

主人公に勝てなくても幸せにはなったオリ主

ツダはISなんぞに劣る筈がない！！

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ただ書き綴っただけです。

※主人公は番外編を除いて神様転生ではありません。

## 目次

主人公に勝てなくても幸せにはなったオリ主	1
過去編でヒロイン作れなくても幸せになるだろうオリ主	18
主人公に勝てないけど幸せになれたオリ主	26
時系列がバラバラでも幸せを目指したいオリ主	37
主人公を家族として大好きだから幸せになれるオリ主	60
主人公に勝ちたいし幸せになりたいオリ主	79
主人公に勝つ為に幸せを目指すオリ主	93
主人公に負けたくないから多芸になったオリ主	111
要らない設定を書かれても幸せになったオリ主	126
主人公に勝てないけど幸せなオリ主	131
初めて前後編に別れたが幸せを目指すオリ主	144
主人公（兄）への憧れが対抗心になってる幸せになるオリ主	159
後編になっても主人公に勝ててないオリ主	182
主人公に勝てないけど諦めはしないもう目覚めたオリ主	201
主人公に勝てなくても嵐の中で輝いたオリ主	217
主人公に勝てなくても挑戦するのがオリ主	233
番外編、I S二次創作の主人公に勝てないオリ主に憑依してしまった	246
:	
主人公に勝てなくても幸せへ進むオリ主	266
主人公に勝てなくても負けたくないオリ主	278
主人公に勝ちたくて積み上げるオリ主	294
主人公に勝つ準備をしてる幸せかもしれないオリ主	309
主人公に勝てなくて暗躍して幸せを目指すオリ主	320
主人公に勝てなくても幸せしたいオリ主	336

主人公に勝てないのは（中略）幸せなのが悪いオリ主	343
主人公に勝てないけど幸せになってるオリ主	350
主人公に勝てなくても修学旅行はするオリ主	362
主人公そっちのけでサボったけども幸せにはなりたいオリ主	372

主人公に勝てなくても幸せにはなったオリ主

クラス代表となった俺はISの特訓を始めようと筈とセシリアと共にアリーナに来た時、あいつがやってきた。

「おい兄貴！今日がお前の年貢の納め時だ!!」

俺たちの前にやってきたのは打鉄と同じ色の機体、白式のパチモンみたいなISだった。

「前回の打鉄とは違うんだよ打鉄とはなあ！こいつの名前は打鉄突撃機動型！白式のアイデアを活かして白兵戦特化！対象を捕捉して逃がさない強化モノアイセンサー！両肩部シールドにはアサルトライフル焰火が内蔵されて手にブレードを持ったまま射撃が可能！さらに白式と同時期に完成した機体の荷電粒子砲の技術を応用したブレードの荷電粒子刀が特徴だぜ！」

「前回の打鉄とはって…見たところスラスタと装甲を増やしてブレードが日本刀から雪片っぽいのにな変わっただけに見えるけど。」

「う、うるさいー！」

こいつの名前は織斑秋十、俺の双子の弟だ。

昔から何かと俺に勝負をしかけてくる奴なんだけど…そりや最初はまだ運動会の100m走とか、学校のテストの点数比べとか、競い合うのは嫌いじゃないし楽しんでたりはしたんだけど…小学校から中学校までの9年間365日ずっと勝負とかやらされるといい加減…その…飽き飽きしてくる。中学卒業近くとか受験勉強しなきゃいけない時期とかも勝負しろとか言ってくるし……。

まあ受験勉強の大切さと将来設計の重要さを千冬姉と一緒に説教したら大人しくなったけど。

「とにかく俺と勝負しろ兄貴!!」

「……………1回だけな?」

結果から言えば秋十は負けた。

代表を決める時の戦いでは片手にアサルトライフルもう片手にブレードの銃剣二刀流で武器を構えては打鉄の装甲で最低の攻撃だけ耐えてアサルトライフルを乱射しながら突貫、近づいたらブレードで全力の一撃をかまし、当たろうが外れようが通り過ぎるように全速力で離れては突貫を繰り返すという一撃離脱戦法をしていたがセシリアにはBT兵器を犠牲に攻撃パターンを読まれて撃ち落とされ、俺の時は鏑迫り合いの最中に白式の一次移行が発現、そのまま鏑迫り合いしたブレードごと秋十を叩き斬って敗北した。

今回はその反省を活かしたのか両手でブレードを構えては両肩のシールド内蔵のアサルトライフルを撃ちまくりながら突撃、そして斬り掛かると見せかけて通り過ぎたり斬り掛かっても鏑迫り合いで俺のブレードを塞いだ状態で両肩のアサルトライフルを連射しては俺が秋十から距離を取るように仕向けたり俺から攻撃しようなら全力で逃げ回ってと打鉄の装甲を過信せずに相手の攻撃に一切触れようとしないうちに戦いを披露したがビュンビュンとアリーナの端から端へ

と飛び回るもんだからすぐ追加したスラスタの推進剤を使い切つてはIS本体のスラスターだけでは重すぎる追加武装と装甲に動きを取られて俺の零落白夜の餌食となった。

「ぐぬぬ……つ、次は負けないからな！やーい！お前の幼馴染の姉ちゃん指名手配犯!!」

「次も負けないからなー！やーい！秋十の姉ちゃんの親友うさ耳コスプレおばさん！」

「それどっちも私の姉さんの事だろ!？」

「篠ノ之さん！俺と勝負だ！」

「だから私は箒でいいと…ん？一夏じゃなくて私と勝負するのか？」

一夏は千冬さんと零落白夜の制御の特訓をしているから今日はセシリアに頼んで模擬戦をしていたのだが…。あいつがやってきた。

「打鉄とは違うのだよ打鉄とは！あと姉さんの邪魔したら怒られるし…。あと零落白夜って下手したらISごとパイロット斬っちゃうん

でしょ？ならそれを制御する特訓とか邪魔したらダメじゃん。」

つまり私とセシリアの邪魔ならしていいと言いたいのかお前は…。

こいつの名前は織斑秋十、前から騒がしくて負けず嫌いな奴だった。基本的に一夏に剣道や柔道の試合を持ちかけてきたりするが一夏の都合が悪いとだいたい私に勝負をしかけてきた…剣道で十回くらいボロクソに負かしてやったら柔道、追いかけてこ、算数のテストと自分が勝てそうな勝負にコロコロ替えてくる…微妙にセコい男という印象だな、まあ全部勝ったがな、負けた時がうざったそうだから。

「打鉄とは違うと言っていたがその機体は…。」

「良くぞ聞いてくれた！こいつはラファール・リヴァイヴの改修型のスナイパーカスタム！今までの機体とはちよつと違うぜえ!!」

「ちよつとどころか機体の種類そのものが別物になっているではないか。」

「うるせえ！篠ノ之さんの剣道なんざ撃ち落ととしてやるぜ!!」

結果から言えば秋十は負けた。

スナイパーカスタムはラファールの性能を操縦性、スピード、特定



の装備の使用だけに徹底的に向上させた機体で背中の中の羽は白式程ではないが大型化されカニの爪のように開くと内蔵されたミサイルランチャーが現れ、武装は左脚部に追加した円形の小型ジェネレーターからケーブルの繋がったレーザーライフルと腰裏にマウントされたサブマシンガンとIS用ナイフと従来のラファールよりシンプルになつていた、恐らくその分のメモリを本体の反応速度やハイパーセンサーの精度、狙撃能力やミサイルの誘導性等の能力向上に割り当てられているのだろう。

だがセシリアと何度も訓練している私から言わせてもらえば付け焼き刃の狙撃は防げない事は無い、相手を近づけさせない逃げっぷりには手を焼いたが目くらましのミサイルはセシリアから教わった方法でアサルトライフルを撃てば直撃を避けれる程度には撃ち落とせる。それに近接武装がナイフしかなく白兵戦能力をほとんど捨てたような機体では接近する事さえできれば私の剣から逃れられる筈がない。

何度か逃げられつつも狙撃時にその場から動かなくなる癖を逆手に取り打鉄の装甲を犠牲にして一気に距離を詰めてブレードで攻撃を食らわせてやった、時間をかけたがほぼその繰り返しで私は奴に勝つ事ができた。

「むむむ…っ、次こそ負けねえからな!! 覚えてろよ! やーい! お前の初恋の人唐変木ーう!!」

「なんだと!? やーい! 貴様の兄は難聴野郎!!」

『それどっちも一夏の事だろうが!!』

『急に叫んでどうしたの千冬姉!?!』

聴いてたのか千冬さん。

『なんなのよこいつ!?アリーナのシールドを突き破つときゃあ!』

『避ける鈴っ!!』

『もう避けてるわよ!!』

『おい兄貴!?なんだこいつ!?』

『それがわからんえ!?秋十!?なんでいるんだよ!』

『試合が終わった後に兄貴の白式の整備点検手伝おうとピットに来たらいきなりシャッターが勝手に開いてレーザービームが飛んできたんだよ!!』

『あ、本当だ、私が避けたからピットに直撃してる…よく避けたわね…。』

『へへ!それはこの機体!メイルシュトロームBTE(ブルー・ティーズ・エクスペリメント)のお陰だな!こいつはブルーティーズの戦術実証機でBT兵器を2機備えてるんだぜ!BT兵器の威力が高い代わりに本体は実弾のライフルしか使えないけどその代わり脚部にミサイルポッドを搭載して火力を補ってるから安心だな!』

『どうやって避けたかを聞いたつもりなんだけど?』

『なんでイギリスの代表候補生でも無いのにそんなの乗ってるんだよ…。』

『うるせえ！この侵入者は俺がぶちのめしてやるぜ！援護は任せろ！！』

(あ、「お前らは引っ込んでろ！」とか言わないんだ…。)

結果から言えば秋十の機体は大破したわ。

最初秋十がビットとライフルの銃撃で三方向から攻撃しては相手(まあアレは無人機だったんだけど)避ける方向を制限してあたしと一夏に背中を向けるように誘導して一夏が零落白夜で本体の(無人機の人の部分ね)腕を避けるようにビーム砲付きの大型アームを切り落として武装を破壊しての無力化を図ったけど無人機は直ぐに対応して残った片腕を盾替わりに秋十から叩き潰そうとしてきた、秋十も秋十でそれを読んでたのかミサイルを同時に何発も放って爆風で動きを止めては瞬間加速を連続で行って距離を取り、巧みに無人機と追いかけてっことは隙を見てミサイルとビットで攻撃を繰り返さ…あれ？あいつさり気なくセシリアができなかったマルチタスクしてない？ま、まあセシリアと違ってあいつのビットは直線的な動きしかできてなかったし…。

まあ最終的に一夏が止めを刺した後に「へへ、ざまーみるガラクタ

野郎。」とか言つて無人機の残骸をぺちぺち叩いてた所で自爆に巻き込まれたわ……ねえセシリア……なんで少し離れた位置に居た私と一夏が保健室のベッドで包帯巻きにされて直撃喰らつたあいつは無傷で篠ノ之に『クラスみんなの避難誘導してたから見てなかつたが勝利に酔つて自爆に巻き込まれるとは何事だ！油断禁物という言葉を知らんのか!!』つて説教受けてるの……？

## ドイツ某所

「ラウラ少佐、先日IS学園で起きた無人機事件は知っているな？先程M s・織斑から弟殿の護衛を我々に依頼してきた。君は今から日本……IS学園へドイツ代表候補生として転入してもらう。」

「はっ！了解しました！」

「モンド・グロツソでは我々はテロリストにブリュンヒルデの家族の誘拐を許してしまった、この汚名を挽回する為にも是非ともM s・織斑から教わつた技術を振るつて欲しい。」

「はい、織斑教官も被害者である一夏殿も我々の落ち度を責めずに寧ろ庇って頂きました……その御恩をお返しする為にも粉骨砕身力を尽くすつもりであります！」

「……ところであの帽子がうさ耳の形に盛り上がった整備士が君の専用機となるISを弄り回しているように見えるのだが……。」

「はい！何やら身に覚えのないデータがインストールされていたので検査に出したところ『あー、これは修理案件だねえ……大丈夫大丈夫！たばn……整備士さんが今日中に直してあげるからねー！』との事であります！」

「そうか……なら専用機は君の転入に間に合うように後ほどクラリツサに送らせる、日本で手続きもあるだろうから君は一足先に日本へ向かうといい。」

「了解！」

俺と鈴の怪我也癒えて有耶無耶になった勝負の続きをする為にセシリアと箒に立会人をして貰って模擬戦を始めようとした時、あいつが来た。

「よう兄貴！」

「やらないからな？」

「いや俺はただ2人の勝負を見学させてもらおうと…。」

「普段の行いが悪い。……聞きたかったんだけど秋十はどうしてそんなポンポン新しい機体に取り換えてるんだ？というよりISSってそう何度も別の機体に取り換えられるもんなのか？」

「兄貴の所属が倉持技研だとしたら俺はISS委員会に所属してるんだよね…それで『量産されない機体や使わない試作機に男性パイロットを乗せて正式パイロットが乗っても大丈夫か、実際に操縦した上での問題点を探さ』」

「なんだそれは!?!まるでモルモットではないか!?!」

「そうだ秋十!!お前そんな」

「いや、俺の方から頼んだんだけど…。」

「『そうなのか?』」

「いやあ…本来ならISSコア1つにつき一機の専用機を一人しか動かせない所をコアに外付けのメモリを増設することでコアを他の機体に付け替えられる様にしたり他の人でも生体データを登録すれば動かせられるようにする…えーつと『セーブ・データ・システム』だったかな?それを搭載したISSコアを丸ごと専用でくれるって聞いてさ…ISSを動かせられるってんなら色々な機体に乗りたいし。」

「ああ…組み立てもしない癖に色んなプラモデル買い溜めしてたなお前…。色々乗りたい気持ちは分かるけど1つの機体を習熟した方がいいんじゃないのか?そっちの方が他のみんなに勝てると思うけ

ど。」

「う、うるせーやい！お前のねーちゃん汚部屋住人！！」

「なんだと！そっちこそお前んちの長女酒乱全裸女！」

「どっちも千冬さんのことじゃない！？殺されるわよ！！」

「もう遅い。」

結果から言うと織斑兄弟はジ・Oとキュベレイを相手にした百式並にボコボコにされたわ。でもあれだけズタボロにされておいて次の日にケロツとした顔で『よう飯一緒しようぜ鳳さん！』って来る秋十はなんなの？

「よう兄貴！今日も平和そうな顔してるな！俺、兄貴のそういう自然な微笑み顔好きだぜ！あ、そうそう！前々から兄貴が欲しがってた射撃兵装、試作品を用意したから放課後ちよつと付き合ってくれよ！」

「お、おう……。ご機嫌だな秋十……」

「恋は人生を変えるってやつさー！」

転校生が来てから1週間、他のみんなはタッグトーナメントが近いからなのかピリピリしているのに……秋十だけ凄いご機嫌だ。中学時代から頑なに外さなかつたトレードマークのサングラスも外して改造したノースリーブ制服も俺と同じ無改造になつて……。

まあこれはアレだけど原因は微笑ましい理由だから別にいいや。

「おはよう秋十くん、一夏くんといい元気なのはいい事だ。」

「おう！おはようボーデヴィツヒさん！」

「あ、おはようラウラ。」

「うむ、秋十くん。転校初日にも言ったが私は別にラウラで構わないぞ……」

この人はラウラ・ボーデヴィツヒ、第二回モンド・グロツソで起き



た『織斑一夏誘拐事件』で千冬姉と協力して事件の犯人であるテロリストを発見して助けに来てくれた軍人だ、テロリスト自体は千冬姉1人で倒しちゃったらしいけど彼女達ドイツのIS部隊がいなければ発見できなかったかもしれないって話だ。

「ボーデヴィツヒさんも俺のことは呼び捨てでいいよ？なあ兄貴。」

「おう、同じクラスの友達だしな。」

「そうか？日本語の講師から男の友達には必ず名前の後に『くん』を付けるものだと言いたが…。」

「それ以上に仲のいい友達には呼び捨てでいいってことだよ。」

「そうか、では改めてよろしく頼むぞ。一夏、秋十。」

「おう！よろしくな、ラウラ（さん）」

結果から言えば秋十は撃沈した、いやこの場合撃チンしたと言うべきだろうか。転入してきた頃から男というにはあまりにも不自然な所の多かったシャルが案の定女の子だったのだ。まあ秋十は普通に気づいてたのか『君こそ俺の理想のパリジェンヌ!!付き合ってください!いや!お友達からで構いませんから!!』とか叫んでクラスのみんなから男色つて勘違いされかけてたし。

最初飲み物買いに出かけた帰りに秋十の叫び声が俺の部屋から聞こえた時はとうとうやりやがったかと部屋に飛び込めば手にシャンプー入のレジ袋を持った秋十が床に倒れてて脱衣場にはバスタオル巻いたシャルが居た。

……そういえば昼休みに「あ、シャンプー切らしてたな」って秋十の前で呟いたな。

そのあとシャルのお家事情で色々あったけど話すのが面倒臭いからいいや。

「ハニー♡、俺の事好き?」

「だーい好きだよ!ダーリン♡……ほら、ダーリンの為に朝ごはん作ってきたの!その代わりに僕は食堂のランチだけだね。」

「おお！ハニーの愛妻弁当だ！やったぜ。」

「ぶっ飛ばしていいかしらあのグラサン…長袖になった以外元に戻ってるし…。」

「暴力は良くないぞ鈴。しかし教官から聞いたが『恋人になりたいから君にどんな事でもしてあげたいんだ！』の一言が決め手とは…：やはり恋というものは変な言い回しなんて馬鹿馬鹿しい告白なんぞせずとも当たって砕けろが最適解なのだな。」

「……………」

「ん？鈴、そんな頭の痛そうな顔で私を見てどうかしたのか？」

『ニュースです、フランスの女権団体がIS企業デュノア社のアルベール・デュノア社長に対して娘であるシャルロット・デュノアさんを人質に脅し、男性操縦者織斑一夏さんの所有するISのデータの強奪を命じたとして脅迫罪を初めとした複数の罪状を理由に何人ものメンバーが逮捕されており、中にはアルベール氏の親族もいるとの事で…これに対してIS委員会特別顧問の篠ノ之束博士は『未来あるIS適性者がこのような事件に巻き込まれてしまった事を非常に悲しく思う』等とコメントを……………』

『臨時ニュースです、ドイツのIS研究所が違法研究を行っていたとしてドイツ軍からの告発があり、IS委員会から調査員が派遣された所、調査される前に研究所が爆発、幸い怪我人はありませんでしたがテロリストによる犯行の可能性もあり、IS委員会の篠ノ之博士は「IS学園を襲撃した無人兵器テロと同一犯の可能性があり見過ごすことはできない」とコメントを……………』

「なあ箒、東さんって行方不明とかじゃなかったか？」

「ああ、1つの場所に留まるとテロリストに関係ない人が狙われる可能性があるから世界中を飛び回って行方を眩ませる事で自爆テロだの襲撃だのでできないようにしているらしい。必要な時だけ公に最低限出て基本的にはテレビ電話等を通してNASAとかの宇宙開発機関とISの研究をしているそうさ。」

「そうなのか…。」

「ちなみにあの無人機って本当に東さんじゃないの？」

「……………『いっくんの護衛用ISが完成したからIS学園に運びこもうとしたら丁度いっくんが試合で活躍してて興奮しながら見てたらちゃんと固定してなかったせいでアリーナのど真ん中に落とされた上に衝撃で制御コンピュータが暴走しちゃったんだよね、ごみんね？☆』だそうさ。」

「何してんだ東さん…。」

「心配するな、姉さんは私と千冬さんがメントスコラ限界チャレンジの刑に処した。」

「何その私刑!？」

「うう…お尻がまだポツカリしてる気がするよう…。」  
「束様、いい加減トイレから出てきてください。いちいち近所のコンビニに行くのは面倒臭いです。」

過去編でヒロイン作れなくても幸せになるだろうオリ主

昔の話…

「わあ…これがあのパピー・ポツティーに出てきた9と3／4番線…ほらー束さん見てみて！今から魔法学校いきまーす!!」

「はいはい見てるよ見てるよー…」

「もう、ノリが悪いな…だから妹に『姉さんはたまに2、3日お風呂に入らずに過ごすからついその…嫌悪感が顔に出てしまつて…私は可愛げ無い嫌な妹なのだろうか…』つて愚痴こぼされるんだよ。」

「はいh…ええ!?!バレてたの!?!というか箒ちゃんがあんまり束さんのこと好きじゃない理由つてそれなの?」

「うん、みんな知ってるよ? ついでに篠ノ之さん『それさえなければ私にとつては世界で一番凄い自慢の姉さんなんだ。』つて言つてたよ?」

「うわ凄いショック…てつきり束さんの性格と家族に対する態度が嫌われてる理由だと思つてた…。」

「むしろ『姉さんは会話こそしないが母さんが風邪を引いた時は黙つて看病してくれたり、父さんがパソコンの使い方が分からなくて困つてた時にパソコン教室のパンフレットを渡してきたり、不器用だけど家族想いな人なんだ。』つて姉自慢してた。」

「まじか…明日からちゃんとお風呂入ろ…。」

「そんな事よりもせつかくのイギリスだよ!? 楽しまない!!」

「シャーロック・ホームズの実写映画が面白かったって理由だけで朝の四時に叩き起されて『束さんイギリス行きたい! 行こう! 行くぞ! ちよつと行く!!』って耳元でギャンギャンがなり立てられて誰にも教えたくもない人参ロケットの隠し場所まで布団ごと引き摺られて……そんなコンデイションで旅行楽しめると思う?」

「なら楽しむ努力しろよ!? なめてんのか!？」

「全部他力本願でイギリス旅行しやがった奴に努力とか言われたくないよ……といかなんで束さんはあつくんに言われるがままイギリスまで飛んだんだろ……」

この子は束さんの親友のちーちゃんの弟のいつくんの双子の弟のあつくん、人の事を猫型ロボットかなんかだと思ってるのか時々思いついたようにやれ『夢の国に行つてエレクトリカルパレードの真つ最中に同時多発的にシユールストレミングの缶詰の中身をぶちまてリア充共のデートを台無しにしてやりたい!』とか『いつも頑張ってる千冬お姉ちゃんに温泉旅行させてあげたい!』とか『車体をボロボロに錆付かせた上でシャークペイントを施してエンブレム代わりにバッファローの頭蓋骨を貼り付けたキャデラックに乗つてテキサスのハイウェイにV8エンジンの唸り声を轟かせてみたい!』とか『嵐の中で輝きたい!』とか『お台場の実物大おっちゃんにラストシユールディングのポーズ取らせたい!』とか頼み込んでくるんだよね……まあいつも束さんが凄いい暇だったり気分転換に何か騒ぎたいなと思つてる時に来るからついつい面白そうだなあつて手を貸しちゃうんだけだよ。

しかし今度は映画に影響されてイギリス旅行なんてあつくんも意外と小学生らしい頼み事するんだね、まあ寝てる束さんを起こすのにわざわざパジャマとパンツ脱がしてお尻に爆竹挟ませようとしてい

たのに気づいた時はチエルノブイリに放り捨ててやろうかと思ったけど。

「よし、満足したから列車乗ろう！」

「はいはい、それじゃああつちの2番線nうわあつ!」

『おいあつちに有名人がいるらしいぞ!』

『ジャパンのコメディアンだつて!』

『違うよ!ボイスアクターだよ!』

『たしかくろがねの城つてロボットの:。』

『そんなわけあるか!レッツツコンバインするやつだよ!』

『ぬまつちつて言うらしいぞ!』

「た、束さん!?大丈夫?おもつくそ観光客っぽい人達に突き飛ばされてたけど:。」

「痛たた:おい!どこに目をつけてるんだよ英国凡人共!!」

「多分束さんと同じ場所に:あれ?束さん?うさ耳は?」

「え?:.....あれ!?無い!!無い無い無い!?束さんのうさ耳が!」

嘘でしょ?束さんのチャームポイントのうさ耳が!?あつくんのクソダサイグラサンと違ってオシャレポイントのうさ耳が!:...さつき  
の凡人達にぶつかった時に取れた!?無い!?あのうさ耳が:!!

「た、束さん?なんか顔がガミラス帝国の人みたいに真っ青だよ:?  
ちよ、ちよつと?」

「ひつ!あああああ、あ、あつくん!お願い!束さんのうさ耳探して!?  
あ、あれが無いと:。」

「ほ、本当にどうしたの?いつも余裕そうな腹立つドヤ顔が消えてる  
よ?」

「あ、あれにはちよつと言えないけど束さんの大切なデータが入って



るの！お願い！誰かに盗まれたりしたら…。」

あれは使い方さえ違えば核ミサイルすら凌駕する兵器になる！そんなもの誰かの手に渡ったら束さんの夢が戦争の悪夢にされる！そんなの嫌だ！！

「お願い！探すの手伝って！もしくは破壊して！！」

「壊すの!?!たかがメカっぽいうさ耳カチューシャに何ビビってんの？」

「いいから!!手伝ってくれないなら…箒ちゃんが夏の暑さに負けて誰も居ないと思って剣道着をはだけさせて涼んでた所をあつくんが覗き見して箒ちゃんのまな板の桜色をすっかり見た上に鉛筆でスケッチ描いて額縁に入れて鍵付きの引き出しに隠してる事をバラすからね!!」

「や、やめろよ…バレたらガチで友達の信用失くすタイプの秘密を盾に脅すのはやめろよ…。」

『しかしセシリアには悪い事をしたな…。』

『大丈夫よ、あの子には他の使用人やチエルシーがいるもの、それに夫婦水入らずの旅行なんてセシリアが生まれて何年ぶりかしら…。』

『君には苦勞をかけるな…。』

『構わないわ、その代わり貴方には損な役割をさせてしまっているもの。』

『ああ、君が敏腕な女経営者、そして私はその社長のさえない夫であり会社の幹部：普段君の尻に敷かれている私には君をよく思わない幹部やライバル企業の手の者が来る…。』

『そして貴方がそんな連中から得た情報は私へと送られる……ねえ、やっぱりセシリアには本当の事を…。』

『いいや、まだダメだ。君から会社を：オルコット家の全てを奪おうとする奴等はまだまだ多い、いずれ家を継ぐセシリアの為にも敵を1人でも多く私達が減らさなくては。少なくとも全て話すのはセシリアが社会の分かる年齢になつてからだ。』

『貴方……ん?』

『どうしたんだい?』

『ほら、あそこ……。何かカチューシャが落ちてるわ。』

『おや、本当だ……。金属のウサギの耳みたいなデザインだな。』

『何かしら……?映画とかの小道具』

「あああああ!!?!!そのイギリス人!!うさ耳返せええええ!!」

『きやあ!!』

「あ!?!束さんのカチューシャが!?!落とし物を投げるんじゃないですか!!それじゃあ失礼!!」

『……な、なんだったんだ?』

『さ、さあ?……あのカチューシャ、あの子のものだったのかしら?ビツクリして遠くに投げちゃったわ……悪い事しちゃった。』

「ああ糞！線路まで投げ落とすなんて…どんな肩してたんだよあのイギリス熟女…見た目が20歳くらいにしか見えなくても子供産むくらいの歳だってバレバレだつてーの！」

「あのカチューシャは東さん以外が頭に装着すると自爆装置が働くつて言うの忘れてた…まあダサイサングラス付けてるやつが東さんのイカしたうさ耳を付けようなんて思うわけないよね。」

『あら？お父様、お母様？旅行に行くんじや無かったのですか？』  
『ただいまセシリア：それが駅で謎の爆発が起こってね、大事を取って帰ってきたんだよ。』

結果から言えば案の定秋十は爆発した。感情に合わせてピコピコ動くうさ耳を着けてみたいと思ってしまったのだ。

爆心地に居たはずなのにグラサンにヒビ入った以外は無傷だと束が言っていたが恐らく奴の驚異の科学力で秋十を治療したに違いなし、頭皮の真上で爆発が起きて怪我ひとつしない人間がいるものか。問い詰めても束はしらを切るし：恐らく脅されているのだろう、秋十は一貫して「自分がイギリスに行きたいと言ったせいだ。」とまるで原因は自分にあるかのように束を庇う。あいつが温泉旅行をプレゼントした時は驚いたが……まさか、私と一夏だけで熱海旅行に行かせたのは秋十が遠慮したからではなく束が秋十を何らかの良からぬことに利用する為か？奴の一夏に対する視線も怪しい……ここは心を鬼にして束を問いたださなくては……。

「というわけで私は束に牙突千本ノックしてくるから秋十と大人しくお留守番してるんだぞ、一夏。」

「わ、わかったけど素振り用の小さい竹刀を持って束さんの何処を

ノックするつもりなの千冬姉…。」

「うう…閉じないよう…穴が閉じないよう…。」

「姉さんの部屋に何でオムツが…え？…ま…まさかお風呂だけ  
じゃなくてトイレも？…ええ…しばらく姉さんと距離置こう  
…。」

主人公に勝てないけど幸せになれたオリ主

「舞い上がつれ〜舞い上がつれ〜舞い上がつれ〜♪白式い〜♪」

「君よ〜♪」

「はしれ〜♪」

「まだ勝利を求める〜♪闘志があるなら〜♪」

「ひかりの〜つるぎで〜♪」

「勝てよ♪勝てよ♪勝てよ〜♪」

「しろい〜つばさで〜♪宇宙（そら）へ〜♪びやくしい〜き〜♪」

「インフイニット〜♪ストラトおス〜♪白式い♪白式っ!!♪」

「のほほんさんとラウラは何を歌ってるんだ？」

「おりむー知らないの？クラス代表を決める試合でおりむーがセツシーと戦ってる時にあつきーが歌ってた応援歌『跳べ！白式』だよ？」

「本音さんがハミングしていたから曲を教えてもらうついでに歌ったのだ。」

「そうなんだ…全然知らなかった。」

「学園の流行歌だぞ？遅れてるな一夏。」

「中学の頃から思ってたけど、秋十はさあ…お兄ちゃん好き過ぎじゃない…？」

「気にするな鈴、秋十の奴は小学校の頃からライバルポジ気取りな癖してそんな感じだったからな。」

シャルの一件も一段落して俺は秋十が改造してくれた白式の訓練を…ああそうそう、秋十はIS委員会直属のパイロットであり、そこそこIS開発もできるので「すいません、消防署『の方』から来たんですけど」みたいな感じで色々口出しできる立場を手に入れたらしく、秋十がIS委員会を通して倉持技研へ

『近接武器だけのISで一夏を野放しにすると収集できるデータが偏るのでは』

という懸念の声があり、結果、秋十ちゃんが定期的に俺の白式用に新兵装を開発してくれるようになった。

しかし秋十ちゃんは何んだか格闘専用機のことをキライみたいで、いつもいつも不愛想にビックリドツキリメカばかりお出して、お予算足りない足りないのだった。

…：話は戻すけど秋十がやっと真面目に作ってくれた白式用の射撃兵装が…「右腕部内蔵二連装グレネードランチャー（単発）、左肩部サブアームシールド+内蔵マシンガン、両脚部補助スラスタ兼用荷電粒子砲」とガンダムで例えると白式にZガンダムの右腕、ザクウォーリアのシールド（裏側にマシンガン付け）、リバウのフレキシブル・ビーム・ガン追加…：剣1本の白式があつという間に重武装になったわけだ…：え？イコライザが無いのにどうやって武装を追加したか？…：ああ、元々あつた装甲を全部剥がして、武装を取り付けて、それに合わせて装甲を貼り直して白式の外装パーツとして登録し直したんだとか。元々パワーも推進力も高い白式だからこそ元々の性能はほとんど落とさずにここまで豊富な武装を実現させた

んだとか。：欠点としてはどの武装も弾切れしたらパーツ丸ごと取り外さないと補給できないらしい……。

整備性悪くないか？：簪さんにまた色々教えてもらわないとなあ……。

とか考えてたら俺に影がさしてきた：物理的に。

「よう兄貴！敗北の苦渋を味わう準備はできたか？」

「ごめんね一夏、今大丈夫かな？」

IS学園ベストバカップル賞で前大会優勝の代表候補生カップルにトリプルスコアを決めて優勝した日仏コンビがやってきた：いや、シャルの方は覗き込むように顔を出してなきや分からなかったけど……。

ちなみにシャルと呼んでるのは本人が女子として転入したときに『これからは気軽にシャルって呼んでください』とクラスのみんなに言ってたからそう呼んでる。：誰に言い訳してるんだろ俺。

「なあ秋十。俺にはお前がMGSPWのコクーンのAIポッドを丸ごとISの上半身に付け替えたような機体に乗ってるように見えるんだけど……。」

「良くぞ聞いてくれた！これが本来兄貴に渡す予定だった白式用射撃兵装『分離合体式単独要塞：一夜城』だ！どうだ！でっかいだろ？」



「宇宙服の筈のISがなんでガソリンの臭いガンガン吐きながらキヤタピラ駆動してるんだよ…え？今それ白式用の装備って言わなかった？」

「おう！白式そのものを脱出装置に見立てて、超火力、重装甲、オールレンジを実現した夢のようなISだぜ！どうだ凄いだろ？」

「そりゃ自動操縦のミサイルだのガトリング砲だの沢山積んでおけばオールレンジ（笑）って言えるかもしれないけど、アリーナの6割がお前のISで埋めつくされてるんだけど…。」

「ちなみにこれの最高速度は時速20kmだよ。」

「原チャリより遅いIS初めて見た…。」

これキヤタピラで移動してるって事は飛べないんだよ…：原チャリ以下の速度でキヤタピラで縦横大型トラック数台分のスペースないと動けないISを俺に渡すつもりだったのかコイツ。

「ま、完成が遅れに遅れたから兄貴に渡すことなく試作機作っただけで計画が凍結されたんだけどさ。」

少なくともこんなもん完成させるまでの予算は降りてたのか…。

「そんなわけでこいつの試運転ついでに兄貴!!お前を倒して俺が織斑家のニューリーダーになってやるぜ!あ、ハニーは危ないから下がっててね♡」

「わかったよダーリン♡、愛情たっぷり込めて応援するから頑張つてね!」

「うん!ハニー宇宙で1番大好き!!…さあ!来いッツ!!」

結果から言えば秋十の惨敗だった。秋十の機体は90度旋回するのに1分かかるし自動操縦のミサイルもガトリング砲もISで振り切れるIS登場前の兵器の使い回しだしついでに脱出装置とコクピットを兼ねてるIS本体は上半身が無防備でむき出しの超ポンコツだったのだ。

だが秋十はすぐさまガトリング砲を手動に切り替えては自分で発射したミサイルを撃ち落とすことで白式を爆風に巻き込もうとした。りミサイルをばらまいて足止めを使う事に専念してはガトリング砲を当ててきたり、IS自体もアサルトライフルとバズーカを装備して近づかれてもある程度戦えるようにとスピード自慢の白式への対策を思いついては使いこなしてみせた……だが、巨大すぎる機体は1度近づかれるとどの武装もガトリング砲では近すぎて攻撃できずミサイルは避けられる上に自分自身に直撃する……ぶっちゃけそれに気づいてはガトリング砲とIS本体の武器の射線が届かない足元で零落白夜をチクチクするだけで勝てた。

そもそも相手が近づけば全力で逃げ回り、距離を取ろうとすれば追いかけて回して射撃兵装でガンガン削る感じの一撃離脱戦法モドキが得意な秋十に鈍足すぎる機体は罰ゲームだと思う。

「こ、これで勝ったと思うなよ！やーい！お前のIS学園初の男友達女の子ーっ！」

「なんだと！やーい！お前の彼女……ぱ、パリジエンヌー！」

「どっちも僕の事だよね!?あと一夏は思いつかないなら無理に捻りださなくていいからー！」

「その時たまたまグラサン外してノースリーブ脱いでたから気づかなかったんだと思うんだ。……だから生徒会長に言っちゃったよ。『あの…俺、秋十ですけど?』ってさ。」

「確かにあつきーって、声も見た目もおりむーと瓜二つだもんね。ひよっとしてサングラス付けてるのっっておりむーと見分けつくよう

に？」

「その通り、だから織斑先生は俺がグラサン付けてても何も言わな  
いってわけ。」

「いやいや、流石に織斑先生は見分けついてるでしょ？」

「……………兄弟二人揃って風邪引いてさ…途中トイレ行って戻ってき  
た時に兄貴もトイレに行つてさ、怠くて自分の布団じゃなくて近くの  
兄貴が寝てた布団に入ったんだよ……そしたら台所からお粥を持っ  
てきた姉ちゃんが『ほら一夏、食欲はあるか？これだけでも食べてお  
け。』って俺に…。」

「ええ…………。」

タッグトーナメントに備えて俺と箒はセシリアと鈴のペアを相手  
にラウラ指導の元で連携を意識した戦い方を練習していた、その時ま  
たあいつが来た。

「よう兄貴！優勝は俺とハニーが頂くからな！」

「ダーリン、素直に一緒に訓練したいって言えば？一夏達なら普通に

「OKしてくれるよ?。」

「ああ…大丈夫よシャル、秋十のそれは『ただ構って欲しいだけだから』って一夏と千冬さんからみんな聞いてるから。まああたしは中学の頃から知ってたけどさ。」

「ち、ちげえし！俺は兄貴を倒してどちらが上かハッキリさせてえんだよ!!。」

「専用機持ちでもない私が言うもの何だが何回も負けたり引き分けでも機体が大破してたりと散々ではないか、お前の戦績は。」

「うっさい！と、とにかく！この束さんの無人機の残骸をガメて作った『ゴレム・リペアカスタム』で全員けちよんけちよんにしてやるからな!!。」

「そのジオングとギャン・バルカンのミキシングプラモみたいなISあの無人機ベースなのか…。」

「今ガメたって言わなかったか…?お前まさか学園の押収品の無人機をそのままベース機に使ったのか!？」

「大丈夫大丈夫、俺はIS学園より上の立場の『IS委員会直属』のテストパイロットだから。それより見ろよこのブルー・ティアーズの残骸。パーツから解析したデータを元に作った有線ビット、両腕が文字通りジオングになってるんだよね。両肩のビームバルカンは発射速度と射程範囲を従来の機体装備より向上してるし…いやあ、俺の才能が怖いわあ〜。」

「凄いよダーリン！あんなボロボロのスクラップと整備料が廃棄したジャンク品でIS作っちゃうなんて、学園の物を無許可で使う所は控えて欲しいけど技術は本当に尊敬しちゃうよ!。」

「いやあ、ハニーに褒められると照れるなあ……というわけで！タツグトーナメント覚えてろよ!!」

「何しに来たんだあいつは…。」

結果から言えば秋十はトーナメント前日に出場禁止処分になった、やっぱり無人機の残骸を勝手に使ったのがいけないかったらしい。出場禁止だけでお咎め無しなのは秋十が遠隔操作と無人操縦可能な部分を完全に破壊していたから『テロリストに奪われる前に無人機を破壊処分した。』というお粗末な言い訳が通ったとの話だが俺は生徒指導室で仁王立ちする千冬姉に土下座する秋十とIS委員会のお偉いさんを見てしまったから多分千冬姉がブリュンヒルデ的なアレで秋十を庇ってくれたんだと思う。

ちなみに優勝したのは普段の訓練の成果を余すことなく発揮した筈と軍人としての経験と千冬の指導をみっちり受けた事で自他共に認める実力を持つラウラのペアだった。

元々抽選で相方を決めるつもりだった俺は秋十と組めなくて意気

消沈したシャルと組むことになったんだが……初戦の相手が山田先生にボロ負けしてから訓練しまくって息ぴったりのセシリア&鈴のペア…即席チームの俺達じゃ勝てなかったよ。

「それで裸エプロンの簪さんに似てる女の人が出てき、びっくりしてつい…『俺、秋十だけど…?』って言ったらなんかショック受けた顔して帰っちゃったんだよな。」

「ドアを開けたら裸エプロンって……そーいや兄貴、優勝した篠ノ之さんがなんか兄貴を屋上に呼び出してたけど何かあったの?」

「ああ、実はトーナメント前に『優勝したら付き合ってくれ。』って言われててさ、今度の休み筈と2人で遊園地行くことにしたんだ。」

「へえ…可哀想に。」

「……………何が?」

「はい…はい…それが…転んだ拍子にすつぽり入ったと言ってます…  
…。冗談ではなくて…いえ、娘はお風呂上がりにファイト一発決める  
つもりだったと言ってます……はい…やろうとはしたんですけど…  
奥まで入り込んで…はい、お願いします…。」

「束様、救急車がサイレン鳴らして来てくれるそうですよ。」

「何もしてない…束さん何もしてないのに…うう…あんまりだあ…。」

「娘が久しぶりに家に帰って来たかと思ったら風呂場で悶絶してる  
……あと私のコーヒー牛乳が見当たらないんだが…。」



時系列がバラバラでも幸せを目指したいオリ主

私が更識家当主『楯無』を就任する日……この名を受け継げば私は本当の意味で更識の人間となる……もはや子供だからなんて言い訳は許されない。その為に私は今日まで育てられて来たのだから。

だからこそ……妹には……簪ちゃんには私のように暗い道を歩むような人生を歩んで欲しくない、できるなら本音ちゃんと一緒に陽の光の下で……普通の幸せを考えて生きていて欲しい。

だからこそ……私は今日、妹に伝える。

『無能なままでないさいな。』

何もなくていい、無理をしないで、無茶をしないで……『更識』で貴女の価値を見出さないで……きつと機械弄りが得意な簪ちゃんはその才能をどんどん伸ばすでしょう……。でも、それはいけない……そうすれば貴女も引きずり込まれてしまう……私が進もうとする……日陰の中に……。

だから私は……はつきり言おう……最愛の妹に……たとえ拒絶されてしまおうとも。

愛する者の為になら嫌われても構わない……それが家族でしょう？

さあ伝えよう……。

と、さつきまでは思っていたわ、簪ちゃんの部屋の前に立つまでは…。

「かんちゃーん、お花飾りはこれでいいかなー？」

「うん、ありがとう…そしたら、これ…掛けるの手伝って…。」

「ん？なにになに…『刀奈お姉ちゃん！更識家当主、就任おめでどう！』…この横断幕かんちゃん1人で作ったの？すっごーい！」

「お姉ちゃんに…お祝いしてあげたくて…。誕生日とかも私は何もしてあげられなかったから…。」

「お姉ちゃん思いの妹を持ってお嬢様は幸せだねっつ！」

「ほら本音、早くしないと刀n…楯無お嬢様が来るからお菓子は置いて。」

「むう、ちゃんと手伝ってるよー！お菓子はただのつまみ食いだもん！」

「つまみ食いもダメ… 虚さん、クラツカーの用意は…？」

「はいこれ、あとはお嬢様が部屋に入ってくるのを待つだけで…。」

「ドアを開けたらクラッカーがパパパーン！だね！」

い、言えねえ…！こんなお祝いムードな相手に『無能でいなさい』とか言えるわけない…！こんな状況で言ったが最後、最悪簪ちゃんどころか本音ちゃんにも虚ちゃんにも嫌われかねない…！それだけは避けないと！！布仏姉妹には私の『無能でいなさい』発言の後に…。

『楯無就任の日に無能でいなさいと言われた？…もしかして本心は…。』

みたいな感じで何となく私の本心を簪ちゃんに悟らせて姉妹の寄りに戻す為に必要なんだからあ…！…どすればいい!?今日という日を逃したら…後日『無能でいなさい』をやってもそれはただの悪口！本当の意味を悟らせるにはどうしても就任当日の今日言わないとダメなのがいいいいいい!!!

「お姉ちゃん、私の作った扇子：…どう？達筆の文字が浮かび上がってメモ帳とかカンペとして使える機能を付けた自作なだけど…？」

「ありがとう簪ちゃん！お姉ちゃん本当に嬉しい！！愛してる簪ちゃんっ！」

「むぐっ…お、お姉ちゃん…む、胸が…息出来な…っ」

結果から言えばめつつつつちやお祝いパーティー満喫したわ、つい我慢できなくて今まで抑えてた分簪ちゃんを猫可愛がりしてたら何か次の日から顔を赤くして私を避けるようになっちゃったけど…あ、姉妹仲は悪くないわよ？今でも偶に私と一緒にお布団で寝たいと甘えて来るところが可愛いのよねえ……ってあれ？織斑くん…？何処行くの？ねえちよつと！楯無お姉さんの昔話くらい付き合っつてよ！わかったから！もう裸エプロンしないk

……え？俺は一夏じゃなくて秋十だよ？

……ごめんなさい。部屋を間違えました。

「へえ、篠ノ之さんと鳳さんが二人揃って医務室送り…ねえ、何かあったか知ってる？ラウラさん。」

「いや、だが2人とも寮の自室…キッチンで爆発に巻き込まれたと噂らしい。」

「はあ？IS学園って国際的な教育機関でしょ？そんな事故が起きたら人の首が飛びそうな施設で爆発って…大丈夫？学園建てた会社が手抜き工事とかしてないよな？」

「さあな、まあIS学園は人工島を利用したちよつとした街みたいな

ものだからな…ほとんどの施設が学園を締めているとはいえ食堂にトレーニングルームに射撃場に…建設するのに莫大な金額が流れているんだ。袖の下に入れようと何処かで金と手を抜いていても可笑しくは無いだろう。」

「まあ防犯の要でもあるドアが木刀で簡単に突き破られるような寮じゃあ…ねえ。」

「人を悪く言うのは軍人として避けたいが…それは箒の腕力がおかしいだけだと思っぞ…多分。」

学園に来て馴染めるだろうか不安はあったが織斑千冬教官の教え子という点や一夏や秋十が真っ先に私と交流を深めてくれた事からそれ繋がりで織斑家ファンクラブなる生徒達を通じて私にも友達が沢山できた、黒兎隊と教官のアドレスしか入ってなかった私の携帯も今では友達の名前でいっぱいだ…本来の任務を忘れてはいないが、学生としてこの3年間を生徒として青春してみるのも悪くは無いな。

「ところで俺はハニーと夕食食べようかなあって思ってるけど、ラウラさんはどうする？」

「む、食堂で済ませようと思っていたが…私を誘って大丈夫なのか？シャルと恋人水入らずの方が…？」

「何言ってるんだよ、可愛い可愛いハニーの手料理だよ？そんなの友達に自慢しなくてどうするんだよ？ほら、俺の惚気の為にラウラさんには夕食をご馳走様してあげるよっ！」

「わわっ、こら、背中を押すんじゃないっ…わかったわかった。付き合ってるから…。」

「廊下の真ん中で騒ぐもんじゃない、他の生徒に迷惑だ。」

「きよ、教か…織斑先生!」

「げ、姉ちゃん!」

「実の姉をみて第一声が『げ』は無いだろう…全く、もうすぐ夕食の時間だがお前達は食堂に行かないのか?」

「はい!いいえ、今秋十に夕食を誘われてご馳走になる所です!」

「あ、そうだ。姉ちゃんも一緒にどう?俺の未来の奥さんは料理が絶品なんだよ。」

「ふむ…:そうだな、義理の姉として弟の妻に相応しいかどうか料理を味見してやろうじゃないか。」

教官は冗談らしく笑いながらそう告げる、成程…きつと教官の守りたいものというのはこういう…:暖かいものの事なのだろう、家族の事になれば教官は頬を綻ばせ微笑みを浮かべていた…。

「あ、おかえりダーr…:お、おおお織斑先生!」

「ただいまハニー!ハニーの手料理を自慢したくて誘っちゃったよ。」

「……ボーデヴィツヒ、今デュノアが織斑弟におかえりと言っていたように聞こえるが。」

「はっ！秋十に頼まれて私が一夏の部屋に、秋十はシャルの部屋で過ごししております！」

「あ!?!ちよつと!?!」

「秋十からは『ほら、ラウラさんは兄貴の護衛に来たんだろ?なら兄貴が一番無防備になる寝床……寮の部屋に一緒に居た方がいいんじゃないかな?』と提案を受け、それは名案だと思いい部屋を交換しました!」

「……………ほう。」

「え、あーっ…は、ハニー!?!ほら、今遠目で部屋から誰か出ていくように見えてたけどアレは何かあったのかな!?!俺すっごく気になるなあー!!気っになあーるっなあー!!(CV・子〇武人)」

「ダーリンがテラ子〇に…え、えーと料理を教えて欲しいって頼まれて今一緒に作ってたんだよ。料理は完成したけどちよつと作り過ぎちゃて…そ、そうだ!良かったら織斑先生とラウラも一緒に…あはは。」

「……………まあ、今回は見逃して置いてやろう。」



結論から言おう、私達4人は仲良く病院へと搬送された。原因は食べたポトフに絵の具と香水がタツプリ入っていたそうだ：夕子の悪い食中毒になったかと思っただぞ…。しかし絵の具を入れたセシリアも悪いが秋十のヤツめ、いくら何でも香水を台所に置きっぱなしにするのはどうかしてるぞ。しかも見た目は『紳士服を着た蜂がハチミツを舐めているイラスト』とは：料理初心者のセシリアが調味料と間違えてもおかしくはな……くもないけど……ああ、死ぬかと思っただし。しばらく他人の家で食事をご馳走にはなりたくない……。ところで一夏よ、私は体内に医療ナノマシンを仕込んでいるから軽傷で済んだが：何故シャルと織斑教官は未だに意識不明なのに秋十はその日の内に退院してリンゴを剥きながら床に正座するセシリアに『彩りが足りないからって変なもん入れるやつが何処にいるんだよ！』と説教しているんだ？

昔の話……………

「へえ……ここが中国か……黒い噂をネットで聞くけど意外と観光名所つて感じだなあ。」

「まあ……観光名所だからな。しかし束、よくお前が知らない他人の為にここまでする気になったな。」

「まあいつくんと箒ちゃんの友達なんだし、そのリンリンだからランラんだか知らないけど箒ちゃんの頼み事なら断れないよ。」

「すいません、束さん。」

「姉さん……私が転校したくないと我儘を聞いて貰ったばかりなのに……本当にすいません。」

「気にしないでよ！束さんも家族と離れ離れはぶっちゃけ嫌だから政府の人をお願いしただけだしさ、まあ両親の方は政府の人が生活を全

面サポートするって言った途端に『ちよつと夫婦水入らずの時間を過ごしたい』とか言つて島根まで飛びやがったけど……。」

「まあ父さんと母さんは姉さんに苦労した分羽根を伸ばしてきて欲しいから私が秋十に『両親を唆して欲しい』と頼んだのですが。」

「箒ちゃんったら酷い！東さんそんなに手のかかる子供じゃないもん！」

「言つとくがお前、少し前までご近所から『中学生になって他人様の家の小学生の男の子をあっちこっち連れ歩くシヨタコン』って噂されていたからな。」

「マジで!?あれほとんどあつくくんが東さんを振り回してたからね!？」

「あれ?そう言えば秋十は?」

「おーい兄貴!!見てよこのゴーグル!そこのおっさんから聞いたんだけど中国軍が独自開発した機密兵器の『物が透けて見えるゴーグル』だつて!こんな凄いのがつったの8000元!いい買い物したぜ!」

「……………カモられてる……。」

「アイツがナチュラルに中国語話してた事実はともかく、アレただの……。」

「うん、中国軍つてのあつてるけどアレただの壊れた暗視スコープだね。」

「秋十…お前という男は…だから一夏に負けるのだ。」

「畜生…！畜生…！こんなものって…こんなものって…!!」

「あつくん、普通に考えてインチキだってわかるでしょ…。」

「大通りのど真ん中で号泣するんじゃない。周りの人が路上パフォーマンスと間違えてスマホ構えてるではないか。」

俺と秋十、箒は家庭の事情で転校した鈴に久しぶりに顔を見に行こうと中国へやってきた、まあ飛行機は束さんが用意して貰った人參のボディにうさ耳を模した翼というふざけたプライベートジェットに乗ってきたけど…中学生3人だけで外国は危ないから束さんと千冬姉が保護者として着いてきてくれている。

まあ、秋十…時々頭の良さに似合わないバカをやる所、お兄ちゃんは嫌いじゃないからな。

「それで、鳳さんの家ってどこなの？」

「知らずに来たのか秋十……なあ箒。」

「私も知らんぞ。てつきり一夏が知つてるとばかり…。」

「言い出しっぺの秋十が知つてるかと…。」

「文通してる兄貴ならわかつてるかと…。」

「何!?一夏!?!お前鈴と文通しているのか!?!」

「え、ああ…そうだけど…。」

「貴様……っ!」

え?俺悪い事してないよな?鈴とは友達なんだから連絡位は取りたいし…。

「何故私にも教えてくれないんだ!私だって鈴と友達だぞ!」

あ、確かに。それは俺が悪かったな…。

「ごめん箒、俺達みんな箒とメールアドレス交換してるしいかなつて…。」

「馬鹿者、メールではなく手書きだからこそ伝わる気持ちもあるだろう!」

「そうだぞ兄貴、まあ鳳さんが文通言い出してそれを兄貴にしか伝えなかつた俺も悪かつたけど」

「チエストオお!」

「ぐへえ!?!」

「あ、秋十おおおおお!?!」

「話が全く進まん……。」

「尤もです、千冬姉。」

「なんで私達が外に…。」

「仕方ないだろう、秋十が『東さんと一緒に鳳さんのスマホをハツキングして自宅の場所調べるから待ってて!』と言って私達を置いてこの……この……多分ネカフェ?に入ってしまったのだからな。」

「それで東さん、例の物は?」

「もちろんできてるよー!はい、ヤクル〇の容器に入った惚れ薬。いやあ箒ちゃんに告白する事なく失恋したかと思ったら今度は中国娘とは、あつくくんは切り替え早いねー。」

「いやあ…それほどでも…。」

「褒めてないからね?」

「で、これを飲めば…。」

「うん、あつくくんが望んだ通りに『同じ惚れ薬を飲んだ相手を強く意識する。』効果が出てくるよ、まあ意識するだけで本当に惚れるかどうかは当人同士の好意次第かな?」

「よっしやあー!」

「でもいいの?東さんなら完全にあの中国娘をあつくくんメロメロの好

好き好き大好きにできる惚れ薬作れるよ？」

「それじゃダメなんだよ……いや、これも本当はダメだけど……これを飲めば鳳さんは俺を一夏の兄貴と比べずに織斑秋十という一人の男として見てくれる……その上で告白して断られてこそ……俺は鳳さんを諦めきれんだよ。」

「惚れさせる為じゃなくてフラれる為に惚れ薬飲ませる奴なんてあつくん位しかないだろうね……。」

「いらっしやい一夏！箒！秋十！千冬さん……それと……。」

「こんちゃー！束さんだよー！日本ではそれなりに有名人だよ！」

「いや名前が分からなかったんじゃない……篠ノ之博士……あの、I Sを作った……。」

「そう！本来の目的は宇宙を飛ぶためのものだけど大衆共に受け入れ

て貰うために『女性しか動かせない事を除けばどんな危険な場所でも安全に作業できるパワードスーツ』として発表したんだよね！もちろんISの実機で実演してデタラメだの虚構だの言う連中を黙らせてやったよ！」

「最近アマゾンの密林の火災も消防隊仕様のISが消火してもう鎮火寸前なんだっけ？」

「そうそう！日本の地震やアメリカの台風の後の被災地の復興にも大活躍っ！そんな世界最高の発明をした大天才がこの篠ノ之束なのだー！ひかえおろー!!」

「え、えーと…ははーっ」

「いや、鈴…乗らなくていいからな？」

一応メールで来ることは伝えただけどまさかメールした翌日に来ると思ってなかったのか鈴は最初驚いていたが友達との再会が嬉しいのかすぐ笑顔で迎え入れてくれた。

「それはそうと済まなかったな鈴、急にやって来てお茶まで出してもらって…。」

「気にしないでよ箒、別に何か用事があった訳でもないし…それに友達がわざわざ日本から中国まで会いに来てくれたんだからお茶位ださなきやこつちが罰当たつちやうわよ。」

最初は何故か仲が悪そうな雰囲気だった箒ともいつの間にかいつも一緒にいる…鈴にとつて男の親友が俺なら女の親友は箒って感じの仲になってたんだよな…やっぱり武術をやってる者同士通じ合う所があるのかな？そういうえば弾が鈴をからかって秋十が箒を茶化しては箒と鈴のダブルパンチで2人仲良く吹っ飛ばされてたなあ…何故かいつも秋十が弾の下敷きになってたけど。



どうせなら弾や数馬も誘って……ダメだ東さんがokする予感がしない。

「それで最近学校はどのようなよ？弾のやつはやっぱり秋十とナンパ失敗記録伸ばしてるの？」

「ちよつとー俺があんな中学デビューと一緒にされちゃこまるぜ！このグラサンに懸けて！俺はナンパなんて不埒なことは……。」

「そうやって『金髪お姉さん』だの『僕っ子大学生』だの『バイク一筋な姉御肌』だの弾に言いくるめられて休みの日に仲良くナンパに繰り出してたのは何処の誰だっけかなあ〜？」

「…ぐう…」

「ぐうの音を出すな馬鹿者…まあ秋十は最近弾の奴の誘いに乗らずに一夏一筋だな。」

「………まだやってるの？」

「ああ、『最近は音楽の授業のテストで勝負しろー！』って言ってさ名前忘れたけど英語の歌を歌うテストだったんだけど…秋十は『英語は完璧だけどドイツ訛りが酷すぎて音程が取れてない。』って言われて『普通に音痴未満』って言われた俺が紙一重で勝ったぜ！」

「自慢することかそれは…。」

「さつき中国語で挨拶された時もそうだけど何で秋十は外国語話す度に『イギリス訛りのイタリア語』とか『黒人訛りの中国語』とか『中国人の話すロシア語』とかどれもこれも言葉と発音がアベコベなのよ…しかも誰一人として『日本人の発音とは思えない。』みたいな評価し

てるし……。英語の先生びっくりしてたわよね……。」

「だって教えて貰う講師の人が悪いし……。」

「前から気になってたがお前は誰からそういう事を教わるんだ？私の後輩がスクーター壊して困ってた時も自動車修理工もビックリな手際でバラバラに分解して組み立て直しながら修理してたし……束か？」

「IS以外の機械関係は束さんじゃないよ？というか束さんもそれ前々から気になってたんだけど……。」

「やべ……ま、まあまあ！俺の事はいいじゃん！今は鳳さんの事話そうよ！…ね？…ね？…」

「だから私は鈴でいいって……もう、本当に頑なに名字でしか呼ばないんだから。」

.....

「でき、兄貴がすつ転んで頭が弾くんの股間に…ぷぷっ」

「ぷっ…っ…ははっあははははっ！ただボーリングしてただけで…くふっ…そ、そんな奇跡起きるっ…ぷはっ…私もそれ見たかったなあ。」

「所がどっこい…ここに録画した動画がございますお代官様。」

「ふふ、秋十も悪よのう…。見せて見せて！」

「やめろよ2人とも…俺の顔面であの感触味わって…うげえ…やっ  
と忘れてきたと思ったのに…。」

「それでも手放したボールがストライクを取ってしまう当たり一夏は  
こういう事は運が良いものだな。」

「わかるわあ…一夏にジュース買ってもらうと結構な確率で自販機の  
ルーレット当ててるのよね。」

「お、おい！お前らそんな理由で俺をパシらせてたのかよ？」

「いいじゃんか兄貴、逆にいえば篠ノ之さんも鳳さんもいつも兄貴  
にジュース奢ってたんだしさ。」

「そういう秋十は俺にジュース買わせる時何だかんだで金出さないよ  
な。」

「あ、いやそれは…あはははっ」

「あ、もうこんな時間…みんなそろそろ帰らないと…。」

「え？もうそんな時間？」

「む…まだ話し足りないが…しかし明日も学校があるからな…。」

「そんな、俺まだ鈴と話せてないこといっぱい…。」

「無理を言うな一夏、束だって予定を無理して空けてここまで私達を連れてきてくれたんだ。」

「そっか…：…なら途中まで見送るわ！帰り道も話はできるでしょ？」

「…」「鈴（鳳さん）（リンリン）…：…」「…」

「今リンリンって言ったの誰よ!?!？」

.....

「はあ…今日の昼に鈴と再会して夕方にまた離れ離れ…ちよつと寂しいな…。」

「気にするな一夏、顔が見たければスマホでテレビ電話でもすればいい。」

「鈴のやつ…本当は自分も寂しいだろうに私達に気を使って…ふつ…最初に会った頃に比べて成長したな…。」

「千冬姉…あれ？秋十…どうかしたのか？」

「え？いや…なんか昔話に花咲かせてる内に何か忘れた気がしてて…。あと忘れ物した気がする。」

「忘れ物？大丈夫か？」

「スマホも財布もパスポートもあるし…グラスンは鳳さんにあげたし…。」

『離れても友情は海を越えても変わらないぜ、鳳さん。』とか言ってたが鈴のやつ普通に『これいらないんだけど…』みたいな顔して受け取っていたな。」

「まあ忘れるような事だし…俺にとってそこまで未練はなかったもんなんだろうな。」

「とか言ってその忘れ物のせいで鈴が困ってたらどうするつもりだ…。」

「たかが忘れ物で?…:…:電話もメールもできるんだから困るなんて事はないでしょ?。」

『あんたが置いていった日本土産のヤ○ルトをパパとママが飲んだら私の目を盗んでは所構わずおっぱい始めるようになったんだけど?!どういうことよ?!?!男女の営みも知らない乱が偶然ベランダで盛る2人を目撃して寝込んだのよ?!?!このアホ秋十おっ!!!』

「ごめっ!本当に忘れてた…っ…てか乱って誰?。」

「心配するな鈴、原因を作った2人には私がお仕置きしておこう……  
とりあえず一夏、しばらく織斑家の食事は全てキノコづくしにしろ。  
お残しは私が許さん。」

「そんな殺生な!?!」

「秋十つて泣くほどキノコ嫌いだもんな……。」

「で、篠ノ之博士はM s. 織斑に『聖なる勇者の剣ごっこ』とやらを受  
けて動けない……ですか?」

「すいません、姉が本当にすいません……。」

「うう……マスターソードの台座じゃないよう……そこは勇者の剣を封印  
してる岩じゃないよう……。」

主人公を家族として大好きだから幸せになれるオリ主

「はあ……暇だ……ドイツまで来たってのに何でホテルで缶詰めしなきゃならないんだよ。」

「しようがないだろ秋十、俺達はあくまで千冬姉の応援に来てるんだから……それにさつきSPの人が話してたじゃないか、千冬姉のモンド・グロツソ2連覇を妨害しようとしている人達がいるってさ。」

「大事を取って安全なホテルでSPさんに警備してもらって……まあ分からなくはないけどよお……。」

そう文句言わないでくれよ秋十、俺だって退屈でしようがないんだから……。

俺達2人は千冬姉が出場する第二回モンド・グロツソの応援にドイツまで来ている……去年は秋十が風邪を引いて看病で行けなかったんだよな……。千冬姉はこの大会で優勝したら選手として引退するって言うから来ることができて良かったぜ。

「まあ殿堂入りのDは出入り禁止のDだからね。」

「やめろよ秋十……確かにテレビで見る限り千冬姉は圧倒的だったけど、でも今回は違うかもしれないだろ?」

「あー……そういえばあのテンペスタ乗りが1番姉ちゃんに食らいついてたよなあ……まあ……今年も姉ちゃんが優勝だろ……。」

こいつ……ドイツ観光できないと分かった途端に凄いやる気無くしてやがる……折角東さんがチケットも護衛のSPの人も泊まるホテル



まで用意してくれたのに…。

「ん……あ、兄貴…俺ちよつとユニットバスのトイレ使うわ。」

「おう、もうすぐ会場に行く為の迎えの人が来るから早めに出せよ。」

「りよーかーい。」

「まあ俺の手にかかれば窓から出るくらい訳無いんだよな…へへっ食べ歩きと洒落こんでやるぜ。」

.....

「おい、お前らわかってんだろぅな？」

「は、はい！オータムさん。織斑一夏が出てきたら拉致って例の場所まで連れていけばいいんですよ？」

「そうだ、スコールがいないからって情けない所は見せられねえ、しくじったら…わかるよな？」

「はっ！はひ！必ずやり遂げて見せます!!」

「さてと…あと20分もすりや織斑兄弟が会場に向かう…で、私らは迎えのフリをしてあのホテルの前に車を付けて織斑一夏の方だけ拉致る、簡単な話だろ？」

「あれ？兄弟2人出てくるなら何で片方しか連れていかないんですかい？」

「考えりゃわかんだろ馬鹿、どっちか片方に『家族が攫われた』って目撃証言してもらわなきゃ下手したらイタズラ電話だと思われて相手されないかもしれないだろぅが。」

「あ、確かに…でも相手は見た目も声もクリソツな双子っすよね？見分け着くんですかい？」

「ああ、スコールから織斑兄弟はグラスンを付けてる方が弟、付けてない方が兄だっちゃんって聞いてあるからな。」

「了解です!!」

「さてと…まだちよつと時間あるしそこの喫茶店でコーヒーでも飲むか。このオータム様がお前らに奢ってやるよ。」

「あざあーっす!!」

……………

「あれ？秋十の奴、トレードマークのグラスン置き忘れてる…恥ずかしくて言えなかつたけど、俺もちよつとグラスンとか…こういう男のファッションってのしてみたかったんだよなあ…ちよつと付けてみよう。」

.....

「あれ？オータムさん！織斑一夏がホテルでてますよ!?!」

「はあ!?!試合の時間はまだ…あいつ旅行パンフレット持ってやがる!!  
姉の晴れ舞台すっぽかして何処行くつもりだよ!?!」

「いや、ひよっとしたら近場の観光スポットで食べ歩きするのもかも  
…。」

「おい行くぞ!」

「まだ注文したコーヒーが来てません!」

「泥水でも啜ってるや!!さっさと来い!!」

.....

「はあ？一夏が誘拐された？」

「はい、ですがイタズラ電話だと思いますよ？先程SPに確認を取らせましたが…。」

『え？織斑一夏くんが誘拐された？』

(ガチャツ)

『……ど、どうかしましたか？(あつぶねえ…秋十がトイレから出てきたかと思ってグラサンぶん投げちやっただけ…。)]』

『えつと…秋十くんは？』

『トイレ行ってますよ？』

『そうですか、失礼しました。』

「と、まあ2人ともホテルの部屋にいるみたいで…。」

「……………成程。」

まあ前回のモンド・グロツソでも似たようなイタズラ電話はあったからな…それに一夏の携帯と秋十のグラサンには束お手製の発信機がついている、何かあったら真つ先に束から私へ連絡が来るはずだ。……でも万が一、秋十がSPの目を誤魔化して街へ出ていた場合…。

「すいませんが秋十がちゃんと部屋に居るか見てもらってもいいでしょうか？」

「わかりました。」

………

「よかった…どこも壊れてないな…というか秋十のやつトイレ長いな…だからトイレはこまめに行けっていつも言ってるのに…。」

「……………(スチャツ)……………俺は秋十だぜ！好きな物はシチューで嫌いな物はキノコ料理だぜっ！小学校の頃は一夏をお兄ちゃん千冬姉をちー姉って呼んでたのは内緒なんだぜ！……………グラサンとノースリーブ着ただけだけど…思ったよりも秋十って感じだな。まあ秋十のコスプレしてるなんて知られた日には恥ずかしくっt」

(ガチャツ)

「あっ」

「えつと……………一夏くん？」

「……………あ、秋十です。」

……………

「秋十くんもホテルの部屋に居るそうです。」

「じゃあイタズラ電話だな。」

……………

「オータムさん！全然信用して貰えないどころかブリュンヒルデ本人に『くだらないイタズラするな』って怒鳴られました!!」

「なんでだよ!？」

「あの、俺…帰っていいかな？そろそろ試合始まつちやうよ。」

「うるせえ！というかお前は誘拐されてんのに家族に全く心配されていないこの状況を何とも思わねえのかよ!!」

「だってこっそり抜け出てきたから多分イタズラ電話扱いされてるの俺のせいだって予想つくし。」

「護衛されてる身で脱走囓ましてんじゃねえよ!!周りの迷惑とか考え

ろ!!」

.....

「もひねすもひねすー、どったのちーちゃん？へ？いつくんとあつくん？発信機の反応はちゃんとホテルの部屋に映ってるよ？…監視カメラをハッキングして様子を見て欲しい？…あつくんがなんかノリノリで踊ってるけど？あ、喉乾いたのかな…玄関のキッチンへ行っちゃった…街の監視カメラじゃ死角で見えないや…あ、いつくんがカップ麺片手に入れ違いで出てきたよ。」

.....

「イタズラ電話の相手から『もう一度確認してみろ』とか言われたから確認させたが…やはり2人ともホテルに居るみたいだな。」

「イタズラ電話ですね、着信拒否しておきます。」



.....

「あいつら本当に着信拒否しやがった!?!畜生!!」

「ぞっまあw」

結論から言うと秋十は救出された、結局トイレの鍵が閉まってないことに気づいた俺が慌ててSPの人に伝えてから30分くらいで千冬姉が秋十を見つけ助けて助け出したんだ。ちなみに誘拐した組織は束さんが国連と協力して壊滅させたい、なんでも世界的なテロリストだったから天災が目をつけたのを丁度いいからって理由で束さんが見つけた所を片っ端から一斉検挙と逮捕したそうなの。

でも当時俺がグラサンノースリーブのままだったから世間的には『織斑一夏が誘拐された。』ということになった……。解せぬ。

助け出された直後に秋十は千冬姉の説教と金的のダブルパンチを喰らって失神した、帰国まで目覚めなかった秋十をホテルに置き去りにしての千冬姉と2人でのドイツ観光は凄く楽しかったなあ……。

そういえばなんで災害救助用のパワードスーツであるISがガンダムファイトもどきしてるのかといえは……。

昔の話……

「ただいま帰りました。」

「おじやましまーす！へえ、箒の家って神社なんだ…。」

「ああ、と言っても別にこれといって何かあったりはしないが…寛いでくれ。」

「あ、箒ちゃんおかえりー…と、その子は？」

「姉さん、こちらは鳳 鈴音。少し前に転校してきた私の友達です。鈴、この人が篠ノ之束、私の姉でつい最近ニュースにちよつと出てきたI Sの開発者だ。」

「この人が…あの…ごめん、私そのニュース見てないと思う。」

「そっか…あはは…だよねえ…はあ…。」

「あ!ご、ごめんなさい!!」

「気にしないで…うふふ…。」

「…………姉さん、なんであんな凄い I S が世間にあまり知られていないのですか?」

「純粹に…………テレビがニュースで取り上げてくれなかったんだよ。ほら、I S って軍事利用したら大変な事になるし…そんなもの開発してるなんて大々的に広めて国際問題とか日本的には洒落にならないだろうし…………そこら辺が絡んでるんじゃないかな…。まあ束さんも最終的に宇宙を飛べれば I S はできれば兵器以外の使い道で世界に知って欲しいから文句は言わないけど…………。」

「姉さん滅茶苦茶元気無いな…………。」

「ついでに軍事兵器になりかねないものに予算は出せないとか言われてさ…………。はあ…………めんどくさいなあ政治って…………。」

「…………まずい、姉さんは結構自己顕示欲が強いからこのまま I S が世の中に広まらなければ下手したら強引な手段で I S を世界に認めさせようとしてくるぞ…………。」

「強引な手段?」

「例えば世界中の核ミサイルを日本に発射してそれを撃ち落としてI Sの力を見せつけるとか…。」

「まさか、I Sを兵器として使って欲しくないとか言ってたんだからそんな馬鹿なマッチポンプするわけないでしょ?。」

「それもそうかもしれんが…。」

「なんとか世の中にI Sを…子供が笑顔になる方向で広める手段は無いものか…。」

「(私、箒に一夏に惚れた者同士仲良くしようみたいな感じで家に誘われたのよね…なんで小学生がこんな相談してるのかしら…。)」

「……………鈴は何かアイデアとか無いだろうか?。」

「え? ああ、そうね……………そうだ! こういった事ならアイツとか力になるんじゃない?。」

「ん……………ああ! あいつか!。」

……………

「それで、このアニメは本当に神アニメなんだよ。キャラクターはそれぞれ違いあってタダのモブで収まらないし、子供向けなのに大人も楽しめる良さがあったてさ……。」

「ふうん……この前ロボットアニメの劇場3部作を俺に見せた時も似たような事言ってたか？」

「いいからいいから……ん？電話……誰だよこんな時に……。」

『あ、もしも秋十？私鈴だけど……ちよつといいかな？』

「今兄貴と録画したアニメ見てるから後に出来ない？」

『録画してんなら別に後で見ればいいでしょ！女の子が困ってるんだから話だけでも聞きなさいよね！』

「えー……どうせ兄貴が唐変木が困るとかしよーもない話でしょ？篠ノ之さん鳳さんも一々俺にそんな話題振らないですよ……。」

『違うわよ！いや違うはないけど今回は違うの!!』

「えー……どーしよつかなあゝ。」

『今度美味しい酢豚食べさせてあげるから！（一夏に食べさようと作った残り物だけど。）』

「……兄貴い！」

「おお、これゲームにいないアニメオリジナルキャラなんだな……ん？どうした秋十？」

「今中華なら何食べたい？」

「中華？酢豚食べ飽きたから青椒肉絲食べたいかな。」

「OK……回鍋肉定食と青椒肉絲定食、大至急ね。」

『あんた覚えてなさいよ!! 箒い！ちよつと台所貸して!!』

~~~~~

「そう、ISを世の中に広めて、好意的に認められたい…ねえ……なん  
で篠ノ之さんじゃなくて鳳さんが俺に相談してんの？」

「箒は今落ち込んでる束さんを慰めてるのよ。」

「そう……まあ簡単だよ、ISでアニメ作ればいいんだよ。」

「アニメ？」

「そう、ISを題材にしたロボットアニメで知名度を上げて、『実はこ  
のISは実在するロボットなんです！』って発表すれば玩具とかプラ  
モデル作りたい会社とかが宣伝してくれるんじゃない？知らんけ  
ど。」

「なるほど……」

「で、ゆくゆくは世界的有名コンテンツになったISを実際に作るプ  
ロジェクトとか発表すれば世界中の企業とか宣伝効果を狙ってお金  
を寄付してくれるよ…で、完成品はお台場に……。」

「なんか別のロボットアニメで聞いた事あるんだけど…。でもISで

アニメってどんな内容にすればいいのよ？」

「簡単だよ、戦わせればいい。」

「戦わせる？」

「そうそう、物語がつまらなくなるとすぐシリアス入ったり敵が現れて戦うじゃないか。」

「要は喧嘩の見物が楽しいのと同じね。でもISに戦わせるってそれこそ軍事利用を助長しないかしら？」

「レスキューファイアーみたいが悪い連中が人為的に起こした災害から人々を守る内容にすれば大丈夫だよ、どうせ誰も覚えてないから。」

「誰も覚えてないって…そんなことないわよ！オープニングとか結構好きだし…。まあありがとう！早速箒に伝えてくるわね！あ、お皿は後で取りに戻るから!!」

「あれ？鈴もう帰っちゃったのか…？」

「お、兄貴…アニメ面白かった？」

「ああ！最初は子供っぽいと思ってたけど見てる内にのめり込んじゃったよ！…とところで秋十の言ってた事がさっき見てたアニメで聞いたような…。」

「まあ1部受け売りだからね…しかし、やっぱり星のカービイは2期も作るべきだな。」



結果からいえばI Sアニメ化計画は大成功した、1作目は特撮ヒーロー監督が手がけたI Sが悪の組織が巻き起こす災害から人々を守るアニメ『インフィニット・ストラトス』レスキューフォーஸ்』、そして2作目は……『機動武闘伝インフィニット・ストラトス』、内容は察して欲しい。

……1作目放送終了後に東さんと秋十が『I Sとガンダムどっちか最強か』とかめつちや議論してて秋十が『姉ちゃん和白騎士が相手でも東方不敗は最強だから！はい論破あ！』とか言ってたのは関係無いと思う。

「束さん……話のオチが弱いからって身体張らなくても……。」

「違うよ！誰かが束さんの自転車からサドル盗んで行ったんだよ！！ご丁寧にプラスチックドライバーを差し込みやがって！！……ちーちゃんの腕力でも抜けないとかどういふことだよ!？」

「はい……はい……束が……そうですね……すみません、病院まで付き添ってから学校行きます……。」

主人公に勝ちたいし幸せになりたいオリ主

秋十が白式に新しくビームライフルとラウラのISSからアイディアを得たというどう見てもザフトのゲイツなワイヤーブレードを搭載してくれたのでその習熟の為に射撃兵装何でも来いなシヤルを相手に射撃戦の特訓をしていたとき、あいつは来た……。

「よう兄貴、俺も混ぜてくれよ。」

「秋十……。」

「あ、ダーリン♡さつきぶり！」

秋十はいつものようにまた違う黒と灰色の迷彩色のISSを見に纏い俺達の前に降りてきた、いつかの無人機を思わせる脚部に鈴のISS「甲龍」の両腕、4枚に増えたラファールの羽根、腰の辺りに八角形のミツバチの巣のようなミサイルポッドのフロート・ユニットを浮かせ、両腕には外付け式のマシンガン（グフカスタムっぽいアレ……）を装備している……秋十が乗るISSにしては武装が少ないな……。

「へへ……いつは『シュバルツァ・クリーガー』。シュバルツァ・レーゲンの格闘戦特化型だったのをジャンクパーツで近中距離戦闘仕様で改造したISSだ！実はラウラさんの乗るレーゲンの完成を優先して急いだあまり未完成のまま破棄予定になっちゃったコイツをドイツから貰って俺が完成させたのさ！どうだ！凄いだろ？」

「すごいよダーリン！ほぼ週一で一夏の白式の新装備か改造ISSのどっちかを完成させちゃうなんて……いや本当に凄いけどドローンボーじゃあるまいしそんなメカをどうやったら短時間で作れるの？」

「あ、それ俺も気になってたんだよな。」

シャルってヤッターマンとか知ってるんだ…ああ、ロボット好きの秋十の影響か。あいつフルスクラッチでドロンボーメカ全種類作ってたなあ…その後フルスクラッチ1/144ビッグ・ザム持ってきた束さんとロボ魂のカンタムロボ持ち込んだ弾を相手に自作の1/100バイク戦艦のラジコンを持ち出した秋十がブンドドして遊んで棚ごと倒して全部ぶっ壊してたけど。

「そ、それは…そういう野暮な事聞くんじゃない！こいつはAICを普通のパイロットでも使えるように改造したAIC・E(easy)を両腕に2つに分けて搭載して両腕を構えることで正面からの実体系の攻撃を全て左右に逸らす事が可能なんだよ！即ち、兄貴の必殺の剣はコイツには当たらないってわけだなあ…へへっ、射撃素人の兄貴がビームライフル持った所でそうそう当たらねえし、もう俺には勝てないって事だ！」

「お前（ダーリン）もバカスカ撃たないと当たらないじゃん。」

「ちや、ちゃんと狙撃系の武装は当ててたんですけお！使い分け…してたんですけおおお!!」

そう言つて秋十は拳を振り上げ……コンソールにそつと人差し指を当てた。

『織斑秋十　　が　　模擬戦　　を申し込みました。』

とりあえず俺は『はい』を選んだ。

「そんな……嘘……。」

「ぐ……秋十……強くなったな、いや勝ててないだけで元々秋十強いけど……。」

「はははは！鈍い！鈍いぜ兄貴い！まるで止まってるみたいだなあ!!」

流れは完全に秋十の物となっていた。白式の放つビームライフル

を秋十は機体全身の各所に配置されたスラストターを巧みに操りまるで短距離の瞬間移動を繰り返すように避けていき、すれ違い様に両腕のマシニングを浴びせていく、俺が少しでも動きを止めようものならばズーカを展開して数発放つ、1発は直撃コース：比較的弾速の遅いそれはISのハイパーセンサーと白式の少ない強みであるスピードで避ける事はできる、だが流石は兄弟といった所なのか秋十は必ず初撃以外は俺が避ける方向を予測して撃ってくる、なんとか反対の手に持った雪片で切り落とすか運良く避けてはいるが回数を重ねる後に追撃の射撃精度が上がっていく…。さらにこちらが追いかければミサイルをばら撒くように発射しては俺から一番近いミサイルをマシニングで撃ち抜く事で爆風を当ててくる、オマケにその爆風に当てられ他のミサイルも連鎖的に誘爆しては直撃を諦め確実にダメージだけを喰らわせてくる。

…何かがおかしい、別に秋十は弱くなんかない。多分だけど同じ機体を乗り続ければラウラとシャルに追いつける程の勝利を重ねるくらいはできると思ってる…。まあそれを絶対にしなから勝てないんだけど、それを踏まえても俺の行動を先読みして予測射撃、必要最低限の動きで攻撃を回避、バラバラに放ったミサイルをどのタイミングで爆破すれば俺に高いダメージを与えられるのかを瞬時に計算…。…普段の秋十に比べて、正確すぎる、この感じ…。…まるであの無人機を相手に戦ったような感覚を思い出す。思考に気を取られた俺は相手のミサイルとマシニングの波状攻撃に飲まれた。

結果から言えば秋十は逮捕された。

秋十のIS、シユバルツァ・クリーガーには「AIがISCコアの演算能力を利用し勝利に必要な行動を予測、コアネットワークを通してパイロットの脳へ最も成功率の高い選択肢を命令してISを操作させる。」：パイロットをコントローラーにしてAIが動かすという機能が備わっていたのだ。これが「モンド・グロツソの戦闘方法をデータ化し、そのまま再現・実行する」というVTシステムの一つでは無いかと疑われて秋十は千冬姉率いる教員部隊に拘束されたのだ。

VTシステムでは無いことは証明されたそうだがどのみちパイロットを消耗品扱いするようなAIが組み込まれた機体は悪用されたら洒落にならないので束さん立ち会いの元でISCコアを抜き取った後で機体は溶鉱炉に溶かされたらしい。

職員室で生徒会長と千冬姉の前で泣き土下座して許しを乞う秋十とISC委員会の偉い人がいたから多分秋十は2, 3日したら戻ってくるんだらうな。

「まさか逮捕されるとは……ただVTシステムのメカニズムを調べて自分なりにオリジナルH A D E Sシステム作っただけなのに……。」

「寧ろなんでそんなもの作って許されると思ってたのダーリン……あ、着いたよ。」

私は今ダーリンと一緒にIS学園から最寄りのショッピングモールに来てる。林間学校は海のすぐ側で海水浴ができるらしいから水着を買いに行く……ってダーリンが言ってた。

彼は織斑秋十、私の恋人で世界初のISの男性操縦者の片割れでもある。ダーリンはパイロットとしても中々の実力を持っていてしかも廃棄するIS部品から使えるパーツを抜き取ってはそれを組み立てて新品同然のISを作っちゃう凄腕メカニックでもある、1人でそんな芸当できるわけないと思ってたけどkogekkoっていう丸いボールに腕が三本等間隔に生えたロボットを組み立て分解作業員として働かせているのを見たから多分何体か構想を思い浮かんでは



それをロボットの数に任せた人海戦術で同時に作って少しずつ小出ししてるんじゃないかな。

ちなみにダーリンは男の人の格好をした女の人が好きみたいで二人っきりの時にちよくちよく私にシャルルの格好をさせてくるんだよね…理由を聞いたら『俺の性癖が歪んだのはどう考えてもハニーのせいだよ』って力説されたけど、私、なにかしたかな……？

「ねえダーリン、時間少しあるし水着買う前に…デート、楽しみたいかな？」

「もちろんだよハニー！今日は初デート記念日だね♡」

「うん！それじゃあまずは服を見に行きたいな♪」

「わかった！女性向けの服は……。」

「見に行くのはダーリン用の服だよ？」

「えっ……。」

「ごめんねダーリン、でもグラスサンノースリーブは無いと思うんだ。」

「これはどうかな？」

「名ばかりフリーダムで全然自由な人生送れてない赤髪の女性にトラウマありそんな服だね…そんなベルトいっぱい着いた服何処で見つけたの？」

「これならどうだ！」

「ジャスティス名乗ってる割にはコロコロと裏切って出戻りしてるよ  
うな服だね…あとそのグラサンいつものよりダサイと思う。」

「ハニー辛辣……。」

「これは……。」

「……………」

「シャルロット・デュノアは何も答えてくれない……。」

だって16歳になってタンクトップに短パンはコメントすら出ないよ……。

「これならダーリンもオシャレボーイだよ！」

「おお、なんか凄いオシャレボーイな服だ！さすがハニー！いよ！愛の国フランス！」

「えへへ、褒めてもちゅーしかないよダーリン♪」

「くっ…人類の半分が死滅しそうなイヤつきをして…!」

「落ち着くのを鈴、あれはただイヤついてるだけ。なんか腹立つからってISを展開して壁を殴るのは1番しちやいけない行為よ…。」

「私はクラリツサの勧めでげえむせんたあに行こうとしてただけなのに何で君達と共にスネークくっこしなくてはならないんだ…。」

「やはり相手に気づいてもらうまで待つより自分から素直に言う方が…だが、一夏に言ってもどうせ遊びに行く約束と思われるだけだ…。」  
「ぐぬぬ…私なんである時否定しちやったのよ…認めていれば今頃一夏と…。」

「お!ラウラ、こんな所で何してるんだ?」

「ああ一夏、何か彼女達に捕まっちゃってな。」

「あれ、箒に鈴にセシリア…3人とも壁に隠れながら何を覗いてるんだ?」

「……(IS学園の)有名人が彼女連れてデートしてるらしいぞ。」

「へえー…あの3人も芸能人の追っかけとかするんだな…。」

「邪魔しては悪いから…どうだ一夏、ジューズ奢りを賭けてげえむせんだあで一勝負しないか？まあ私は初心者だが。」

「いいなそれ、なら秋十が最近ハマってる戦場の絆？つてゲームやろうぜ！それなら俺も初心者だし。」

「うむ、今は私も同じ学園生、手加減はしないからな？」

「おう！望むところだ！」

「あれ？ラウラは…？」

「ん？そう言えば見かけないな…つてセシリア、何を指さして固まつ…ああ！一夏！ぬ、抜け駆けだと…！」

「ラウラの場合は友達と遊ぶ感覚だろう。」

「そうだった、ラウラは特に一夏とそんな関係でも…つて千冬さん織斑先生！」

「カップルの尻を追いかけるほど暇なんだろ？私と水着でも買いに行こうじゃないか…なあに生徒と教師のスキンシップってやつだ。」

「ああ！ちよ…ま…い、一夏が！ああ！力強つ…。」

「ああ！いけません織斑先生！いけません！んおお！逝く！逝くつ！！鳳 鈴音！！16歳！大衆の前で鬼教官にネックハングキメられながら気絶するわよ！！見てなさいよ！！フッフッフ！！（過呼吸）」

さつきからチラチラ見てるのに気づいてたけどなんかハチャメ  
チャしてるなあ……。

あとなんで見てもらう必要があるんだろう。

「いやあ、まさか山田先生がいたなんて……。今日は千冬ねe織斑先生  
と一緒にじゃないんですね。」

「なんか用事があつたみたいで……。」

「へえ……千冬姉が買い物誘って来たからってつきり山田先生も誘ってる  
かと……。」

「そうなんですか？あれ？じゃあ織斑くん先輩と一緒になんじゃ……。」

「いや、今日は友達と遊ぶ約束してて……あはは……あ、ラウラは偶然  
……。」

「弾くん！そんな動きでは私のダンス☆レボリューションは止められ  
んぞ!!」

「この幼女ダンレボめちやくちや上手え!!さつきのメガネ巨乳先生と

いいー夏の知り合いはみんなゲーム達人過ぎだろ!？」

その日の夜。

「秋十にVTシステムのデータを送ったらしいな……今日は機嫌が悪いから人間ペットボトルロケットの刑にしてやる。」

「ちよつと待つて!?! 高圧洗浄機は死んじやうから!?!」



## 主人公に勝つ為に幸せを目指すオリ主

少し前…。

「織斑秋十です！その初期アバターの双子の弟です！趣味はフルスクラッチでプラモ制作！特技は…教えてもらえば何でも覚えるぜ！目標は打倒兄貴と姉ちゃん!!…そうそう兄貴と違ってグラサンとこの真っ赤なノースリーブ制服がトレードマークなんで…そこんとこよろしく！あと俺の事は兄貴と区別つくように『織』斑『秋』十』でオリアキって呼んでくださいーい！以上！NEXT織斑ズヒント兄貴！」

「え？お、おう！…織斑一夏です！趣味は料理！特技は家事全般！えっと…ISに関しては完全に初心者なので皆と一緒に学んでいけたらいいなと思います！」

「はい、自己紹介ありがとうございます織斑くん。」

ふう…秋十のおかげで無事に自己紹介できた…。ところでなんで他の皆は山田先生来た時に挨拶返さなかったんだ？秋十が『いいか兄貴、IS学園は元女子高なんだから第一印象は大切だからな？挨拶もできない奴なんて思われたら皆に嫌われちゃうかもしれないぜ？』って言ってたから小学校の頃を思い出すつもりで先生に挨拶返したら俺と秋十と箒だけしか言わなかったし。

……

『みなさん、おはようございます。』

『『『『……』』』』』

『え、えっ！』

『おはようございます!! (秋十の言う通り挨拶は大事だな!)』

『おっ、おはようございます!! (みんなダンマリするから出遅れちまった...)』

『(ん...? し、しまった! 緊張してて聞いてなかった!!)』

『お、おはようございます!! (一夏と秋十に挨拶できない奴と思われてたまるか!)』

……

なんかタイミングズれてたけど…。まあ気にする事じゃないか。

しかし本当に秋十には頭が上がらないな…HR前の空き時間に自己紹介考えてなかったって言ったら『とりあえずこれに名前と特技と趣味とクラスの皆に一言書いとけ、絶対役に立つから。』ってメモ帳貸してくれたし。後は書いた内容読み上げるだけで無難に自己紹介できたぜ。

「一夏、ちょっといいか？」

「お、箒。どうしたんだ？」

「篠ノ之さんが感動の再会を祝してちゅーしたいってさ。」

「えっ!？」

「そんな事一言も言ってない!! だいたい中学卒業して再会と呼べる程日も経ってないだろう…。なんなら先週の日曜日に一夏とは会っている。」

「ああ、束さんからISの専用機?…の話と一緒に聞いたな。」

護身用にISくれるって話だったな…俺も箒も束さんの身内って理由で受け取るのは他の生徒の人に悪いからって辞退したら束さんが泣きそうな顔するから勢いに押されて領いちゃったなあ…箒は最後まで頑なに『篠ノ之束の妹という立場に胡座をかくつもりはありません。欲しければ日本代表候補生にでもなります。』って言い切ってたけど。

「…え?俺聞いてないんだけど?」

「そりや秋十は『用事がある』って言って元々いなかったじゃないか。」

「ねえねえ!おりむーとしののんはどんな関係なの?」

「お、おりむー?」

「うん!織斑くんだからおりむー!」

いつの間にか俺と秋十の間を挟むように女子がぴよこんと顔を出してきた…袖が長いなこの子…。

「しののん…私のことか(アダ名か…中学の時はクラスメイトに『ホツキー』と呼ばれていたな…。)」

「ああ、箒は幼馴染だよ、中学の時まで一緒だったんだ。」

「そうなんだ…ひよつとして恋人だったり?」

「ひえ!?わ、わわわわわ、私は、そ、そんな…!!」

「無い無い、ただの幼馴染。」

箒は可愛いし家事もできて面倒見いいから、良いお嫁さんにはなるなあと思うけど……。

しかし本当に袖が長いなこの子……。

「じゃああつきーと……？」

「いやでも、私は別に嫌では……って！こんなノースリーブと付き合うわけないだろう!!」

「箒（しののん） 辛辣……。」

「……………」

ん？いつもなら秋十が何かしら……『なんだと!? やーい! お前の姉ちゃんストロングゼロ中毒!!』とか言いそうなのに……ってアレ? 秋十の奴、よく見たら袖の長い……えつと……名前聞いてないや……袖の長いのはほんとしてそうな子をじつと見てるような……。

なんでこんな袖が長いんだ……?

「キャラが……被ってる……っ!」

「ほえ!?!」

「はあ?」

何言ってるんだコイツ…。

「いやいや!ほら!制服の袖改造してるじゃん!袖改造キャラ被ってるよ!!」

「ええー!?いやいや!あつきーはノースリーブで私のは萌え袖だよ!!」

「萌え袖ってレベルでいいのかその長さ…なんかナイフとか隠せそうなんだが…。」

「そんなの仕込んでないよ!あ、でも中にプリッツは入ってるよ?しのん食べる?」

袋じゃなくてプリッツ1本袖から出してきた…よく折れないな。  
でもプリッツを隠すのにその袖の長さは必要なのか…?

「いや!それでも袖が他の人と違うって時点でキャラ被ってるよ!!」

「マスコットの癒し系とチンピラルックを一緒にするんじゃない。」

「私マスコット!?!」

言われてみたらなんかデフォルメのキャラグッズ作ったら売れそうだなこの子…袖の長さとか表情豊かな所とか箒の言う通りマスコットっぽいかもしれない。

「お、俺がチンピラ!?どこら辺がだよ!オイ!こらア!イテマウドコラア!」

「全体的にチンピラじゃねえか!!ノリがいいな秋十!!」

「何を騒いでいるんだ!全員席に着け!」

「グラサンノースリーブはオシャレだろうに…。」

「結局一夏に本題を話せなかった…。」

「(そういえばさつきからオルコツトさん…セツシーがこっちチラチラ見てたけど何だろ?)」

「っなんだこの夢っ!?!」

「うわびびっくりした!?!どうしたのダーリン…。」

「いや、1回しかセリフが出てこないイギリス人の夢を……。」

「セリフ？イギリス人？…映画の夢でも見てたの？」

もう、バスに乗った途端に寝ちゃって…寝て5分位で飛び起きたけど。

今僕達は臨海学校でバスで海の近くの旅館に向かっている。で、走行中のバスの中で……。

「♪〜!!♪〜!!♪」

「織斑先生08小队とか知ってるんだ…。」

「しかも歌い方が遠藤正〇カバー…。」

絶賛カラオケ大会中…織斑先生意外とノリノリ過ぎる…。さつきは一夏が『めぐりあい宇宙』歌ってたし…箏は『哀・戦士』…秋十がガンダム布教したのは予想着くけど…。僕もガンダムとか見た方がいいのかな…。

「ふう…採点機能はないのか…。」

「織斑先生ありがとうございました！次は…ボーデヴィツヒさん！曲は『マジンガーZ (Infinity ver)』です！」

うん、絶対秋十が吹き込んだよね。

「セシリアがGONG歌ったって本当!？」

「ああ、コブシが効いてたぜ！なあ秋十！」

「オルコットさんがあんまりにもノリノリで歌いきるからトリに回された俺が凄いプレッシャーだったよ…。」

「そんなこと言って…ノリノリでエヴァンゲリオンのOP歌ってたじゃん、しかも水樹奈○の声真似で。」

「ガンダム以外知らない秋十がスパロボ布教してないわよね？」

「鳳さんの方はカラオケ大会とかしなかったの？」

「私のクラスのバスは○ラえもんの夢幻三銃士の上映会してたわよ、バスのモニターで。」

「それ帰りのバスでやる事なんじゃねえかな…。」



そんなこんなで俺と秋十は旅館の部屋に案内されて…部屋割りは  
てつきり俺と秋十で同室だと思っただけ…。

「織斑は私と同室、織秋は山田先生と同じ部屋……なんだが…。」

「絶っつ対に嫌です!!マイビューティラブリエンジェルプリンセス  
ハニーシャルロット以外の女性と同室なんて嫌です!」

「ガンプラどころか呼び方まで盛るのか…。文句を言うな、私と同じ  
部屋にしなかつただけ満足しろ。」

「そ、そんなに私と一緒に嫌ですか…?」

恋人を大切にするのはいい事だけど、秋十…そんな廊下をゴロゴロ  
寝転がって往復しながら駄々こねるのはお兄ちゃん見るに耐えない  
んだけど。あと山田先生が泣きそうな顔してるからやめてやれよ…。

結果からいえば秋十は折れた。千冬姉が「デユノアの部屋から見つかつたこれは何だろうな？ん？」と0・03ミリを取り出したのだ。使用済みスーツの内ポケットに入れて持ち歩くのはどうかと思います、織斑先生。

「つたく、人の部屋のゴミ箱漁るとか有り得ねえよ…もう…。」

「学生の分際で元女子校の寮室でやる事やってる方が有り得ねえと思うけどなあ…ところで…あれ、いいのか? 『抜いてください』とか書いてあったけど。」

「束さんがこんな所に来るわけないから誰かのイタズラだよ。」

「いやそうじゃなくてさ…地面から生えてた束さんのウサ耳に千冬姉と山田先生のI S スーツ姿の写真貼り付けてたけどバレたら秋十ぶちのめされるぞ?。」

「でもウサ耳単体はちよつと抜けないし…。」

「お兄ちゃん思うには物理的な意味だと思っただけどなあ…。」

「美味しいっ。」

「このタレがいいよね。」

「織斑くんが作った特製タレだつて！」

「そうなんだあ…織斑くんに女子力で負ける私達つて…。」

「……………」。

「さあさあ！どんどん食べて！こんなことできるのはIS学園臨海学校だけだよ！」

「おりむーのタレも美味しいけどあつきー特製ハチミツ漬けのお肉もおいしいよー!!」

「熱っ…おい秋十お！何故私まで肉を焼かなくては…熱うっ！水着だから油が！油がモロにつ!!」

最初の一日は自由時間な為、俺達は海に出た…ただ秋十はカナヅチだから浜辺で勝手にBBQしてはみんなに焼いた肉を振舞つてるけど。

ちなみに他のメンバーは箒は最初何処にも見当たらなかつたんだけどいつの間にか秋十の手伝いをして鈴は泳いでる最中に足をつつてセシリアに連れていかれてシャルはクラスの友達とビーチバレー…で、ラウラは…。

「ヒヤツツツホオオオオオオオオ!! エンツツツトリイイイイイ  
!!!」

「すごいラウラさん!? 逆立ちのまま後ろ向きに波を滑ってる!!」

「今度は180°。方向転換しながら波を飛び越え…別の波に乗り込んで!? あれってサーフィン得意ってレベルでいいの!?!」

何処ぞのゼーゴックみたいな変態軌道かましながらサーフィンに勤しんでる。

……この軍人俺の護衛として転入した割にはエンジョイし過ぎてないか?

「ねえダーリン! 一夏! こっちで一緒にビーチバレーやろう!」

「あ、ハニー♡! 今行っきまーす♡♡!!」

「おう! 混ぜてくれよ!!」

(デュノアさんナイス!!)

(シャルさんのおかげで珍しくノーマークの織斑くんと距離を縮められるチャンス!!)

まあみんな楽しそうだしいいか！

「おい!? 秋十!! 私を置いてくくな!？」

明日私に I S を渡すとか言ってた姉さんとは旅館に着くまで L I N E してたのに何故か浜辺に来てから連絡が取れなくなったし、私のような実力の伴わない者がただ開発者の妹というだけで専用機を受け取るのは間違っているんじゃないかと皆から離れた岩場で一人悩んでたらいきなり秋十と布仏に両手両足を持ち上げられて担架みたくに強制連行されて砂浜で牛角メニューばかり焼かされて……私は

何か悪い事でもしたのか!? そりゃ入学初日に同室とは知らずに部屋に入ってきた一夏には：裸を見られてついビンタしてしまったのは：本当に悪かったと思ってるのだが仲直りはした筈だ！ 鈴とは一夏を巡って時々くだらない争いはするがあれは私達なりの友情あつての行動だ：セシリアとは紅茶と緑茶の淹れ方を互いに教え合う仲：ラウラは私にとってはISのイロハを説いてくれた師匠だと尊敬している：：シャルロットは：そういえばISで訓練する時はあんまり接点が無いな：。クラスを中心とまで言わんが昼食を共にする友達だっている：私はこんな目に遭うような事何もしてないぞ!?

「しののん！次厚切りカルビ食べたい！」

「なら私はここら辺でホルモンいきたいっ！」

「ソーセージ追加お願いしますーす！」

「おい！学年生徒の3分の1を私一人で捌けっつて言うのか!? 戻っつてこオオおおい?!?!」

「あ、あの：：私も、手伝う。」

「お前は：：確か四組で一夏に白式の整備を教えた：：。」

「織秋くん、本当デュノアさんの事となると周りが見えないんだね……篠ノ之さん、ほら焼き立てのお肉取り分けたからこれ食べて、その間交代するよ?。」

「た、鷹月……!」

「私も食べて満足したから焼くの手伝うね！」

「織秋くんと篠ノ之さんばかりやらせても不公平だもんね、ほら！篠ノ之さん何食べたい？」

「私ももう少し食べたなら手伝うよおく…あ、そうだ！しののんラムネ飲む？」

「み、みんな…！」

父さん、母さん…私は友達に恵まれて幸せです!!  
でも秋十は絶対許さん。



「あの…ちーちゃん、なんで東さんはごめん寝のポーズで縛られてるのでしょうか…?」

「旅館の中庭に私の写真を置いて又いてくださいとはお前も随分タチの悪いイタズラをするようになったな…。」

「ち、ちーちゃん?なんの話?いや(ウサ耳を引っこ)抜いてくださいの看板を立てたのは東さんだけど…いや!あれはいつくんとあつくんに向けたちよつとしたイタズラで抜くと東さんg」

「又くとお前が2人にナニをするつもりだったんだ?ん?(おこ)」

「ねえ!?!そのロアナプラ育ちみたいなドスの効いた声おこつてレベルじゃなくない!?!」

「よし、折角の夏だ…:スイカ割りならぬモモ割りでもするとしてどうか…。」

「またなの!?!医療ナノマシンも万能じゃないんだよ!?!失われた物はもう二度と取り戻せないんだよ!?!」

「心配するな、形ある物はいずれ壊れるものだ。」

「ねえ！スイカ割りの真似ごとならせめて目隠ししようよ!?!東さんの後ろでビリヤードの構えしないでよ!?!ねえ!?!」

「せーのっ。」

あっ

主人公に負けたくないから多芸になったオリ主

「尻入られて〜、いるんだあ♪長過ぎい♪なモノを♪」

「人は〜♪挿入れるモノを♪選べない…ものさあ♪」

「尻入られて〜♪いるんだ♪太すぎい♪なモノを♪」

「穴もお弱いままではあ〜♪いられないさあ♪この性癖（タチ）い♪」

「嗚呼〜♪だけどお♪こんなあ…ガバ穴でもお♪」

「掘られたい〜♪」「ほられたい〜♪」

「猥褻な♪」「わいせえつなあ♪」

「「所がある……あるう〜んだあ〜♪」「」

「のっけから喧嘩売ってんのか!?!この野郎!!」

「姉さん落ち着いて!?!秋十が白目剥いてますから!!!あとギターは人を便器にホールインワンする物じゃないですから!?!」

「あっきーのギターがポツキリ折れてる……。」

「綺麗にすっ飛んだな。」

「千冬姉、あれは人を煽った秋十と暴力に訴えた東さん、どっちを注意したらいいんだろ……。」

「知るかそんなもん。」

はろはろー！みんな大好き東さんだよお！え？なんで東さんがこんな所にいるかって？それはね……………。

昨日の夜…

「うーん、美味しい！もう一杯!!」

「これがジャパニーズA・S・A・R・I☆ミソスープ…ふむ、最初は変な匂いと思っていたが…磯の香り…食欲が掻き立てられるな…味噌の濃いめの味が中々…」

「しかしオルコットさんも馬鹿だなあ、脚が痺れて辛いなら最初からテーブル席にすればいいのに……………」

「さつきからチラチラ一夏を見ているが…ふつつ、兄と一緒に食事が取れなくて拗ねているのだろうか？秋十。」

「そ、そんな事ないし！俺にはハニーがいるもん、ね？ハニー♡」  
「素直じゃないなあダーリンは…そんな所も好きだけどね♪」

「疑惑は深まったな。」

「もう…ハニーまで…あむ…うん、やっぱり刺身にはおろしたての本ワサが一番、このツンとしても爽やかな後味がなんとも…。」

「織秋くん食レポ始めてる…。」

「素直に慣れない系ブラコン…ぶつちやけすこ…。」

「あつきーは芸達者だねえ…あむ、んー！茶碗蒸しすつごく美味しい  
!!」

「……………ねえダーリン？本ワサって？」

「ん？……………ああ、この抹茶クリームだよ…っ…ふふ…。」

「抹茶クリーム!?生魚にクリームが合うの!?!」

「学園の売店にも生クリームとイチゴの入ったサンドイッチとかあるし生クリームに生魚も合うのではないか?」

「いやラウラ…パンにクリームはともかく生魚とクリームは…。」

「物は試しだ、食べてみればいいじゃないか。」

「そうだよハニー、ほら刺身につけて…あっ!?!そんな全部一気に口に入れたら…!」

「秋十のやつ…一体何したんだ？」

「さあな…だがあの右フック…デユノアもなかなかいいモノを持っているな。」

「隣がうるさいから様子を見に来たけど…セシリアが床で悶絶してるしシャルは一心不乱にお茶をガブ飲みしてるし秋十は白目剥いて千冬さんに運び出されてるし…一体何やらかしたのよあいつは…。」

「ちよつとからかうつもりだったのに酷い目にあつた…。」

「秋十、お兄ちゃん的にあれはお前が悪いと思うよ?。」

「そうだけど……しかし風呂に入ると本当にどっちがどっちなのか  
わかんねえなこれ。」

「確かに……身長とか顔付きならともかく、こここの大きさ

ごめんちよつと遡り過ぎた……今は東さんが悪かったから……ち、  
ちーちゃん……すいません! 本当はすいません! 見てないから! 見て  
ないから!! 双子の1寸違わぬ15cmなんて見てn……やめて!?! こん  
な人前でスカートずり降ろそうとしないで!?! 箒ちゃんは何真顔で法  
螺貝なんか持ち出してんの!?

「うう……まだ寝たりない……。」

「ボーデヴィツヒさん昨日は皆と夢中でスマブラしてたもんね……まさ  
か本音がSwitch持ち込んでるとは思わなかったけど……。」

「せつしーが部屋出る時にたまたま通りかかったラウラウに見つかつ  
た時は焦ったけど、まさか同じ部屋の子呼んで混ざりに来るとは思わ



なかつたなあ。」

「いやあ…あはは、夜中に集まってワイワイはしゃぐなんて軍隊の訓練をしていた時はできなかったからな…つい夢中になってしまった。」

「それはそれとして全員ボーデヴィツヒさんに最低4回はボコボコにされたけど…明らかに初めてゲームするって腕前じゃ無かつたよね？」

「うえっ!?あ、いや…あははは…。」

「そう言えばラウラウ、私に負けかけた時に『ええい!!まだだ!まだ終わらんよ!!』とか言いながら眼帯外してたけど、綺麗なオツドアイだったねえ。」

「そ、そそそそそう褒めても何もでないぞ?ほ、ほら!早く朝ご飯食べないと遅刻してしまうぞ?ほら!な?な?」

「何焦ってるのボーデヴィツヒさん?」

『ニュース速報をお知らせします。昨日未明、ハワイ沖にてアメリカ、イスラエルが極秘に開発していた違法ISが内部告発によつて発覚しIS委員会特別顧問の篠ノ之東博士がIS委員会所属の治安維持部隊による強制捜査を行った事が先程明らかになりました、現在わかっている情報によりますと告発したのはISパイロットであり：「自身のISが条約違反の軍用として改造されている。」とIS委員会へ報告し、それが今回の強制捜査へと繋がった模様です、反ISを掲げ国内でISに代わるパワードスーツの開発をマニフェストに掲げていることで有名なロナルド・クランプ大統領はこの一件に関して関与を否定しており「IS委員会の捜査に協力を惜しまない、あと国

境沿いの壁をもう1枚増やす事をここに宣言する。」とツツタカタ―にて発表しました。』

「ハワイ沖?…ここから近い距離でもないが…。ISの速度なら…。」

「一応簪に聞いてみたけど軍用IS自体はもう束さんが押さえたから事件に巻き込まれる心配はないってさ。」

「ん?何故そこに簪?…?という奴が関わってくるのだ?」

「え?あつ…え、えつと…ほら!簪は日本の代表候補生だろ?そういう話を日本政府から聞いてないかなあ…なんて…あははは。」

「なるほど…しかし姉さんと連絡がつかなかったのはそういった理由だったのか…。」

本当は私的な事情で連絡取れなかっただけで日本からハワイ沖に急いでトンボ帰りしたんだよね。

で、無事ISをその場で競技用に作り直して…まあ不要な物をとっぱらって束さんお手製リミッター付けたただけだね。…それでその試運転ついでにアメリカのパイロットさんと一緒にここまで来たってわけなんだよね…

「以上!説明おわりっ!」

「閉廷!解散っ!!」

「おつかれ〜。」

「山田先生、この後どうです？」

「いいですね！私良いお店新しく見つけたんですよ…あ、でも織秋くんは未成年だから行けませんね♪」

「ちえー、フラれちゃった」

「勝手に解散させるな!!全く、便器から出てきたと思ったら…。」

「ダーリン、とりあえず海の家シャワールームで洗ってきてね。」

「はい。」

秋十が便器に突っ込んだ頭を綺麗に洗い直して戻ってくると織斑先生の指示で私達生徒は先生達と乱入者…姉さんとアメリカ軍の2人の前に整列する。やつと授業が始まるな……。

「……人參ロケットがいきなり海に突っ込んで水没したり、脱出するのに手一杯で力尽きて溺れかけてたアメリカ軍人とポンコツ天災を何故か置いてあった足漕ぎアヒルボートで救助したり、ウサ耳女に心臓マッサージしてる途中でいきなり愚弟がギター取り出してのんびり娘と歌い出したりと色々あったが…改めて臨海学校の授業をこれ

から始める！」

「「「「よろしくお願いします!!」」」」

「勝手にボタン触っちゃダメってあれ程言ったよね？アメリカ軍はそんな事も教えてくれないのかな？」

「ご、ごめんなさい…でも明らかに1人乗りのアレに私たち2人が無理矢理入ったらスイッチがお尻に当たって押してしまっても無理は無いいんじゃないかと……。」

「何？2人して土左衛門になりかけたのは東さんのせいとでm」

「いい加減にしろ!!ほら、自己紹介でもしろ!!」

「はいい…みなさんちやおーっ♪有名人篠ノ之東です！仏頂面なのはちーちゃんだけで充分だからみんな東さんにはフレンドリーに接してくれてOKだよ！まあ社会的常識もわからない子はノーサンキュー!!」

「初めまして、アメリカ軍所属のナターシャ・ファイルスです。知っている人もいるかもしれませんが今朝のニュースで話題になっていたISのパイロット、今日は篠ノ之博士が違法改造されていた私の専用機を直してくれたのでその試運転と……成り行きでみなさんの1日講師をさせていただきます。」

「と、言うわけで専用機持ちは私と東と共に着いてこい。他の者は山田くんら担任の教師とファイルスからしっぴかり学ぶように！」

「…と、言うわけでこれが箒ちゃんの専用機の『紅椿』です!!」

「早くない!?!もつとこう…そんなポケットから小銭出すみたいなのりじゃなくて…空から降ってくるのかないの?」

「何を言ってるんだ秋十、そんなことして方が一にも誰かに当たったり砂浜の砂が飛び散って目に入ってしまったりしたら大変ではないか。」

「そうだよあつくん、いくら東さんでも分かりきったような事故を起こす真似はしないよ。」

「ああ、うん…そりやそうだよね…。」

急に叫んでどうしたと言うんだ秋十は…しかしこれが私のIS、紅椿か。見ての通り真っ赤なカラーリング…武装はブレードが2本だけか…ラウラやセシリアに銃の扱いを教わったから使ってみたくもあったのだが…いやいや!姉さんが私の為に作ったISだ!それに文句を言うなど…私はまだ未熟者、贅沢な事を言っただけでどうする!!恥をしれ篠ノ之箒!!…よし、反省した。使う事がなくとも銃の特性を知っていればそれは戦いの役に立つ筈だ、学んだ物は何一つ無駄になっただけ。この紅椿に…私に期待して専用機を渡してくれた姉さんに恥じぬようより一層の鍛錬を積み強くならなければ…!

「というわけで……この紅椿は初期武装のレーザー発射可能なブレード2本以外にもビーム兵器が効かない相手に備えて他の武装を2, 3丁積める程度の拡張領域があつて打鉄やラファールとかの装備は大体使えるようにOSを組んであるから武装は箒ちゃんが扱いやすいように好きなのを……箒ちゃん聞いてる?」

「うえっ!? あ!! す、すみません!! 切腹します!!」

「なんで?! 別にいいよ!? 専用機貰つて浮かれてるのか気を引き締めるのか分からないけど上の空だった程度で怒らないから!!」

「すみません……武装の説明をもう一度お願いします。」

初っ端から躓いた……情けない。

「このブレードだね、これがそれぞれ雨月と空裂、紅椿の主力武装で雨月は刺突攻撃の際にレーザーを出して空裂は斬撃そのものをエネルギー刃として放出することができるんだよ! 凄いでしょう?」

姉さんは紅椿に振れると二振りの刀を足元に展開させ拾い上げながら説明する、これが紅椿の……私の剣……。

「カッコイイなこれ……。鞘のデザインも合わさつて篠ノ之さん専用って感じだね。」

「えへへそうでしょ? 箒ちゃんの体格やISの稼動データから計算して箒ちゃんが1番使いやすいサイズと重量を割り出して作ったんだよ!」

秋十がそう言って私が手に取った物とは別のブレードを姉さんから受け取っては鞘から引き抜いて空へ掲げる。

「篠ノ之さん、そつちも見せて貰っていい？」

「ああ、構わないぞ。」

「ほ、箒…俺もいいかな？」

「ならこつちを…。」

「箒！私も持ってみてもいいかしら？」

「甲龍の双天牙月に比べれば軽すぎるかもしれないが…鈴なら使いこなしてしまえばいいぞ。」

「ふふつ、刀に関しては箒には負けるわよ。」

「へえ…鈴、そつち見せてくれよ。」

「いいわよ、ねえ秋十。そつちの私に見せてよ？」

「うん、構わないよ鳳さ…ん？」

「どうしたのあつくん？」

「ところでさ…これ…どつちが雨月でどつちが空裂なの？」

「えっ？」

「えっ…あれ？そう言われてみたら…これ、見た目がほとんど同じだな…。」

「何言ってるの…それは…それは…えーつと…。」

一夏と鈴からブレードを受け取った姉さんがそれぞれを見比べ  
……クルリと後ろを向いてからゴソゴソ何かしてからまた私達の方  
へ振り返る

「こっちが雨月で、こっちが空裂だよ！」

ブレードの柄にはガムテープが貼られ、めちやくちや急いで書いた  
のか墨汁を直接零して書いたような「あまつき」「からわれ」の字がマ  
ジックで書き込まれていた。……………本当に情けない。



「ごめん……本当にごめん……束さん……。」

「ぐお……っ！……ぬふっ……お、覚えてろよ……グラスアン野郎……おまつ……お前っ……束さんの……本当にお前っ……。」

「まさか秋十が『見分けつかねえのかよ!』って漫才みたいにつっこみ入れたら束さんがバランス崩して尻餅着いて……。」

「紅椿の爪先の出っ張りにズブっといくとはな……今回は本当に同情するよ、束。」

要らない設定を書かれても幸せになつてたオリ主

IS委員会へ織斑秋十に纏わる報告書

作成：

技術試験部門 織斑秋十 専属担当管理官 ルーコス平野

名前：

織斑秋十

所属：

IS委員会、IS学園及び同学園ジャズバンド部

役職：

IS委員会技術試験部門↓所長代理補佐心得

IS学園↓一般生徒

IS学園ジャズバンド部↓副部長

年齢：16歳

織斑家の末っ子で次男、小学生時代からグラスアンにノースリーブがトレードマークとなっている。理由としては双子として長男である織斑一夏と瓜二つであり、彼と自分自身を見分ける事ができる存在が篠ノ之束を除いて本人以外不可能だったからとされている。(コンピュータによる顔認証ですら彼等兄弟を見分ける事ができていない。)

何故か長男の織斑一夏に異常な対抗心を燃やしており何かと勝負を仕掛けては何やかんやの理由で敗北を重ねている。姉に対しても対抗心は同様だが『まずは兄貴、次は姉ちゃん、そして束さんだ！』と発言しているらしい。

手先が器用であり、一度学んだ技術をほぼ八割ほど自身で再現する特技を持っており、それによりプラモデル制作、楽器演奏、IS開発等の様々な技能を發揮している。

篠ノ之束のIS開発にも関わっていたらしくパイロットとしてもメカニックとしても優秀であり廃棄パーツだけでISを作り上げたリ仕様が全然違う機体をほぼ初乗りで乗りこなす技能を見せつけて

いる。

家族へ対抗心を燃やしているが武装が剣一本しかない一夏の専用機の白式に追加武装を開発したり、姉の織斑千冬に温泉旅行をプレゼントしたりと敵対心がある訳ではなく、「秋十は家族に構って欲しいだけ」との証言もある。

現在恋人がいて人生の絶頂である。

趣味は気に入ったアニメのロボットをフルスクラッチすること。

頭脳労働は感覚でやっている部分があり勉強ができる訳では無い。

専用のISコアを与えられているが機体そのものはIS委員会が世界各国から送られてきた「採用しようかどうか迷う微妙な機体」「専用機として与えるにはイマイチだし量産機にしてはコストがかかる」みたいな機体を与えられてはそれを乗り回して再評価して送り返す：といった具合に特定の機体を所持することは無い。またそれらの機体を素体として廃棄パーツや試験用装備を組み付けた自作ISも同様である。

最もその殆どは大破か条約違反を理由に破壊処分を受けており委員会にはほぼ電子データのみが送られる事が殆どである。

ちなみに彼が作った自作ISはパーソナルマークとしてスパナとボールの十字架に「A. E. (AKITO. EXPLAIT『秋十の功績』)」と書かれたものが両肩と両脚にデカデカと描かれている。

彼の自作ISは一部委員会から与えられた業務とは別にIS学園から「学園固有の専用機」の開発に向けて自分の才能をアピールする為に作られた機体、本人はコンペティション形式で行われると思っており数打ちや当たる戦法でポコポコ作ってはそのデータを学園に送っているとの事。

彼の作る機体はたとえ格闘戦専用機でも遠距離攻撃を可能にし、狙撃特化型でも近接武器を取り付けるなど「どの状況でも最低限対応だけはできる」という彼が自分が乗りたい機体の好みの特徴が見られる。

「二点特化」や「ピーキーな性能」という言葉を「単なる言い訳」と考

えており白式を見せられた時即座に解体しようとして涙目となった織斑一夏の目の前で織斑千冬に殴られる非公式記録が確認される。

どういう訳か篠ノ之束は彼の頼み事に弱く、デ○ズニーランド異臭閉鎖事件、お台場ガンダ○ラストシユーツィング事件、お台場○ンダム輝き撃ち事件を起こしている。

彼女に恋愛感情とか特別気に入られているアレとかではなく普通に彼女が死ぬ程退屈していたから秋十の頼み事を暇潰しにきいてただけとの本人から証言を得ている。

原作で白騎士事件とか妹の専用機持ちに箔をつける為に人が死にかける事件起こすような人だしね。

→誰だか知りませんが勝手に人の報告書に身に覚えの無い文章を追加しないでください。

他2人の織斑家と同じくクローン人間であるが「最高の人類の創造」を目的とした千冬と違い「量産性と汎用性の高い優秀な人材」というコンセプトで作られており、秋十型のクローンが1000人入れば小規模な軍隊を組織するもベンチャー企業作ってそこそこ儲けるも思いがまま……:…と思われたが承認欲求の強い個体しか作れず、本当に秋十が1000人いたら多分「誰が最強の織斑秋十か。」を決めるために勝敗の着かない争いを延々と続けるだけだったりする。

→誰ですか？これは二次創作小説の意味の無い裏設定や自己満足のカラ設定を書くスペースではございません。これははれつきとしたIS委員会に提出する真面目な報告書です。

IS学園においてジャズバンド部に所属、目立った活動はしておらず他の部員からは「たまに来てはめっちゃトランペット吹いていく幽霊部員予備軍」と評価されている。ちなみに吹奏楽部、軽音楽部、邦楽器同好会等の部活からも勧誘を受けているとの事だが「趣味ではない。」と一蹴している。

ボーカロイドとかにわか程度に好きな癖して「俺はジャズ以外は気

が向いた時しかやらないから」とかぶつちやけ寒いよね。

→本当にやめてください。何故か削除できない文章を追加しないでください。

ちなみに担当管理官のルークス平野は実は逮捕を逃れたふぁn

→バカやめろホントにいい加減にしろお前後dくぁwせd r f t

g y ふじこ 1 p

結果から言えば束さんは俺の部屋でラウラとセシリアの3人でマイクラをしている最中に公式文書の改ざん、それと時たま秋十と一緒に土下座していたIS委員会の偉い人にシニールストレミングを浴びせてPTSDにした容疑で誤認逮捕された。

千冬姉から何故か「何バラそうとしているんだお前は」と怒鳴られながら野球グローブを付けた両手で某忍術漫画の千年殺しを喰らっていたけど多分大丈夫だと思う。

ちなみに束さんが悶絶しながら千冬姉に引き摺られて行ったあとラウラとセシリアの2人でマイクラでホワイトベースを完全再現していた。

「篠ノ之博士…篠ノ之博士がいなくなったら…ホワイトベースががらんとしてしまった。…でも大丈夫、すぐ慣れると思うから…心配しないでくれ、束さん。」

「束さんが艦内のモバイルスーツを作る予定だったんだ…。」

「うう…身に覚えがないよう…身に覚えがないよう…。」

「普段の行い…は、別に悪くは無いが反省しろ。」

## 主人公に勝てないけど幸せなオリ主

「A I S—E O I（秋十製インフィニット・ストラトス試作1号）……通称『ディッカーマン』、これはI S学園防衛を目的とした機体であり第三世代に分類されます。外観は全身を装甲で覆った姿に特徴的な背部の可変式バックパックと大型化された脚部……バックパックと両脚部がメインスラスターの役割を果たしています……基本フレームは完全な新規造形であり背部、両脚部に分散させる形でジェネレーターを搭載する事で白式の二倍の推進力、紅椿に次ぐ最大出力を誇り現状存在する機体では速度、火力と共に第三世代中最高の機体です。一撃離脱を基本運用としていますがジェネレーター出力をパワーユニットへ回す事で白式や甲龍を圧倒できる程の性能があり、またエネルギー兵装、実弾兵装と装備を選ぶ機体でもありませんので射撃戦、白兵戦共に乗り手も装備もほとんど選ばずに申し分無い性能を発揮する事が期待されています。基本兵装は白い警棒のような持ち手の先から荷電粒子を発生させそれをA I Cに似たもので形状維持させた……言うなればライ○セーバーみたいな『荷電粒子刀二型』及び機体の基本兵装として唯一の射撃兵装『肩部固定式2連バルカン』の二つです、武装が二つだけなのは第三世代兵装がパス・スロットを圧迫する為にその他追加武装と排他で選択式となっているのが主な理由です。」

秋十のやつ、夏休み初日に教員を集めて何をさせるつもりかと思えば……なんだ、真面目にI Sを造っているじゃないか。いつもトンチンカンな物や明らかに条約違反な物を造っているし、その割りに目の目を見る機体が少ないからテストパイロットに専念して開発は辞めたのかと思ったぞ……しかし聞けば紅椿に次ぐ高性能機、強力なスラスターが背中と両脚に3つも追加されているのは見た目通りの重装甲をカタログスペック通りの速さで動かす為か……一撃離脱戦法を基本運用と言っていたがそれは恐らく第三世代兵装による物、つまり第三

世代兵装を装備しないなら白兵戦特化、射撃戦特化、汎用機と幅広く運用が可能……これから世界各国で第三代機を量産させていく事も考えれば教員部隊のISも打鉄やラファールだけでは少し頼りないと思っていた所だ……この後の模擬戦闘試験が上手くいけば私からもこの機体をIS学園に配備して欲しいと上に勧めてみるでしょう。まあブリュンヒルデも絶賛なんて聞けばIS委員会も学園の理事長も悪い返事は出さないだろう。

『それではこれより模擬戦闘試験を開始する！教員諸君はテロリスト役としてIS学園へ侵入し第三アリーナを占領する事を勝利条件とし、ドイツカーマンはそれを阻止する事を条件とする！ドイツカーマンは試作された三機だけしか配備されていないが第三代兵装を装備した一機以外は背部多連装ミサイルランチャーユニットを装備した火力支援型、秋十製白式用ビームライフル及びグレネードランチャー内蔵シールドを装備した汎用型となっている。テストパイロットはIS委員会より出向してきた三名の……居村望、ルーコス平野、巻紙礼子である、3人ともパイロットとしては優秀な成績を残し



ているので油断してかからぬように!!』

しかし教員全員で向かうのか…この人数をたった3人で相手する等…余程腕に自信があるのかそれともそれだけ機体の性能がいいのか…いや、その両方なのだろうな、秋十が作った機体ということとは。

相手は名前の聞いた事ない2人とIS委員会における秋十の担当官…あの女はパイロットでもあつたのか、知らなかったな。まあいい…久しぶりの実戦…腕が鈍っていないか確認も兼ねて暴れさせて貰うとしようか。

「先輩…大丈夫ですかね？」

「どちらの心配だ？たった3人で教員部隊全員をまともに相手にできるのか……と思っているのなら、油断大敵というものだぞ。山田くん。」

「油断…ですか？」

「ああ、あの機体を作ったのは秋十。そしてそれを相手するのはあいつの姉であるブリュンヒルデ率いる中隊規模のIS部隊、秋十の事だ…一夏を倒す前に私に黒星を付けて一夏に実力の差を見せてやるとか考えているだろう、何より…一夏もそうだが弟共は私を誰にも負けない最強…と信仰と呼べるレベルで信じ込んでいるからな。そんな秋十がわざわざ用意した機体とパイロット……恐らく只者では無いだろうな。」

「そう言ってる割には楽しそうな顔をしていますね、先輩。」

「まあ、久しぶりに全力を出せるかもしれない…と思えばな。」

試験開始のブザーが学園から聞こえる、それと同時に教員達は私と山田くんを先頭に二つの部隊へと別れて学園へと飛び立った。

「作戦は説明した通りだ!! 二手に別れて挟み撃ちを行う! 単純だがその分細かいアクセシビリティによる失敗は互いの実力で補えるだろう!! 私と山田くん、どちらかが撃墜された場合は事前に話した通りの順で指揮官を交代!! 敵の第三世代兵装を装備した機体には必ず三機で取り囲んで相手するように!!」

そうして私の隊と山田くんの隊が互いにまだ視認できる距離で学園へと迫る、ISの速度とは言えまだそれなりの距離、完全に二手に別れる地点までは万が一の事も考えてカバーし合える距離を保つ、するとオープンチャンネルが不意に繋がる。

『待ちに待ったときが来たのだ、私が…紛い物でなかったこと、証のために…!』

この声は…あの時に組織は壊滅させたはず…!? いや、IS委員会は事実上…束が最高権威となっている、あいつなら…まさか…!

『再び貴様と対峙するこの時のために! 私が! お前を倒すために…!』

耳元で警報が響く、ISのハイパーセンサーから熱源反応…いや、耳元で響いてるのではない、ここにいる全員のISから警報がやかましく響いて…まだ学園から数十キロあるんだぞ!? ISが警報を鳴ら

すなんてミサイルでロックオンされるか何らかの攻撃が迫っている  
状況がほとんど……それがこの距離で鳴り響くだと……!? 一斉に鳴  
り響く警報、オープンチャンネルから聞こえる声に全員が不気味さを  
感じ……

その場に止まってしまったのだ。

『ちふゆねえ！おかえりなさい!!』 『ちーねえ！よるごはん！おにい  
ちゃんといっしょにつくったよー!』

一夏……秋十……私がまだ東の話に乗っかる前……あの頃は毎日夜遅く

までバイトして、日々の疲れが身体から離れる時は無かった…でも、慣れない夜更かしをして私を待ってくれた家族がいて…苦痛に感じた事はなかったな…。

『千冬姉、おれ…大きくなったらいっぱいはたらいて、ぜったい千冬姉を楽させてみせるよ!!』

『なら俺はお兄ちゃんよりもっと働いて大金持ちになってお兄ちゃんとかー姉を楽させてやるよ!』

ふふ…秋十はこの頃から一夏に対抗心を燃やして…お前達はいままで経つても私の弟だ。もっと私を頼っていいんだぞ？

『姉ちゃん…今まで言えなかったんだけど…ひよつとして俺と兄貴の区別ついてない?』

そ、そんなことは…すまん…。

『…やっぱり、昨日俺達が風邪引いた時、俺と兄貴途中でお布団入れ替わってたけど姉ちゃん普通に俺の事を一夏って呼んでたよな。』

いや、だがお前達は本当にそっくりなんだ…見間違えてもしようがない…す、すいませんでした。

『秋十、寒くないか?』『子供は風の子だぜ兄貴!それにこれからはノースリーブグラサンが流行る!!間違いない!』

まさか昨日の今日でグラサン付けてノースリーブにするとは…だが、似合ってるよ、秋十。

『ほら！姉ちゃんもこう言ってるじゃんか！』

『へへ、どうかな千冬姉…ちよつとブカブカだけど…。』

まあ中学生はすぐ大きくなるもんだからな、学ランなんて大きいくらいで丁度いいものだ。……萌え袖みたいで可愛いな私の弟。

『へ？なんか言ったか千冬姉？』

いや、なんでもない。それはそうと……。

『？…なんだよ？姉ちゃんも兄貴もこっち見て…。』

『いや秋十…流石に…。』

学ランまでノースリーブにするのはどうかと思うぞ？

『えっ!?俺達がプリキュアに!』

『嘘だろ千冬姉!』

まだ何も言っていないだろうが!...全く、お前達にはIS学園に入学してもらおう。IS委員会最高顧問...まあ東のお達しでな。少なくとも入学すれば実験体だの解剖だのそういった目に合う事は無くなるだろう、まあ東がIS委員会の実権を握ってる限り学園に入らんでもそんな事はさせないだろうがな。

『へえ...なあ姉ちゃん、ちよつと委員会の人と話せたりする?』

ああ、できるが東と連絡を取りたいなら私の携帯から...

『あ、いや!そういうわけじゃないから大丈夫大丈夫!!ね?いいでしよ?』

.....?まあ構わないが...先に一夏にIS学園に入学するのに必要な書類と参考書を渡しておくから後で一夏から貰っておけよ?

『へっへっへ...了解しました!』

なんか怪しいが...まあいいか、行くぞ一夏...

『お、おう?』

『この度、IS委員会から出向してきました、技術試験部門の……織斑秋十です。』

『あ、あれ？秋十さん……？ってせんば……じゃなくて織斑先生の弟さんの……。』

秋十……なんでお前がIS委員会所属のバッチを付けてるんだ……。

『いやあ、IS委員会にちよつと売り込んだら是非委員会直属のパイロット兼技術者について言われちゃってさあ……あはは！いやあ、優秀な人材として認められるなんて、能ある鷹は爪を隠せないもんだなあ……アツハツハツハツハツ！』

いま自分で売り込んだと……ん？……まで、これは……ああ、そうか……。

『織斑千冬よ!!!私は!!帰ってきた!!!』

「これが走馬灯か。」

光が私を包み、視界が白く染って暗闇に消えた。



結果から言えば秋十は逮捕された。明らかに核兵器レベルの破壊力を持つ兵器を作ったからISの軍事利用の疑いと大量破壊兵器製造と複数の条約を違反した容疑で……フランスに高跳びした秋十を怒り心頭の束さんが人參ロケットで追いかけて、フランスの空港で取っ組み合いの殴り合いの末にボコボコにされた後……事情を知らない現地警察に連行される形で逮捕となり、シャルは1人で仲直りした両親と共に実母の墓参りへ行つたそうだ。

尚、本人は『予期しないリミッターとジェネレーター』の故障による事故であり故意的なものではない。』との証言が裁判で通つてしまい、何故か無罪放免となった……ニュースで見てたけど裁判官とか秋十の無罪を主張してたIS委員会の人とか秋十を擁護する会見してた人達……たまに学園に来て秋十の担当のIS委員会の偉い人と仲良く話し合いしてた人達だよな……？何話してたかは外国語だからよく分かんなかったけど。

『爆裂荷電粒子砲……高熱源体である荷電粒子を特殊なナノマシンで包み込み限界まで圧縮させ、甲龍の龍砲に似た空気砲で射出する、ナノマシンで包まれた荷電粒子の塊が目標へ近づくとナノマシンが起爆、風船に針を刺すと破裂するように最大数千度の熱量の荷電粒子が直径十数キロを多いつくし、圧倒的熱量でISの電子機器を破壊して行動不能にさせる第三世代兵装。』

……いくらIS相手でもこんな核爆弾とほぼ変わらない威力のも

のがどうして通ると思ったんだこの馬鹿!!!」

「だってテロリストなんて残党とか出てきたら後々面倒だから一気に焼いた方が後腐れ無いと思ったんだもん!!」

「IS学園は教育機関なんだよ!!こんな破壊兵器運用できるかこのスカポントン!!!だいたい『ISの機動力と速度でテロリストへの最適な攻撃ポイントへ移動し爆裂荷電粒子砲を放った後に撤退、もしくは次の攻撃ポイントへ移動。』ってお前これ殆どメタルギ○の核兵器運用思想と似たようなもんじゃねえか!!後、ラウラから聞いたがドイツカーマンってドイツ語で『太った男』って…これ隠す気無いだろう!!!?」

「でも力なき正義は意味が無いって何人も先人が言ってるじゃん!なら抑止力は必要じゃん!!」

「核兵器より強いISを何十台も保有してるIS学園に今更抑止力なんて必要無い!!というか世界が核の代わりにISを推してる時代に核抑止に逆戻りとか何考えてるんだお前は!!」

「織斑さーん、回診のお時間ですよー。」

「あ、はい。」

「……………」

「あ、あの…篠ノ之博士…ですよ？私、IS学園の山田真耶つていいます…まさか同じ病室なんて…あ、あれ？篠ノ之博士？」

「あ、あんまり話しかけないであげてください。束様は秋十のクソ野郎を逮捕しようとして取っ組み合いとなり…クソ野郎に突き飛ばされた拍子に2人をとり囲もうとした現地警察の持っていた警棒がズプリと突き刺さってショックで放心してしまっているんです…まさかあんなスムーズに啞えこんでしまった自身の恐ろしさに。」

「ええ……………」

初めて前後編に別れたが幸せを目指すオリ主

昔の話…。

「はあ!? 簪ちゃんのISは造らないですって!？」

「い、いえ！ 楯無様、造らないではなく人員削減による延期…。」

「んな言い訳が通る訳ないでしょ!! あの子は日本の代表候補生!! それをたかだか男性操縦者の機体を造るからって蔑ろにしていると思ってるの!？」

う、うう… いくつかの護身用ISを作りたいたから工廠貸してって倉持のお偉いさんしてる元クラスメイトを頼ったら他の人に皺寄せがきてる… これ絶対束さんのせいだよ… どうしよう、なんかあの日本人にしてはちーちゃんの後輩並に不自然に黒とかけ離れた髪色してる女の子めっちゃ怒ってるよう… なんか日本政府お抱えの臀部だか愛撫だか知らんけど裏世界で暗躍してる家柄っぽいし下手な対応したらIS学園に入学するいくつかの達にかしら被害が…。

束さんならあいつを物理的にも社会的にも黙らせて話終わらせるくらいできるけど… いくつか嫌われたくないし、ちーちゃんとあつくんには

「お前の夢を手伝う代わりに後暗い真似したらアクシズ落とししてやるからな。」

「まあIS技術教えて貰った恩返しはするけど寝覚めの悪いことしたら篠ノ之神社にコロニー落としするからね?。」

っておもつくそ死刑宣告されてるし… というか2人とも制裁方法

が人類の半数を死に追いやる被害が出るんですけど頭デラーズかよお前ら。

　　というか私の実家はジャブローかよ。

「お、お姉ちゃん…私は気にしてないから…。」

「かんちゃん、それISスーツ宣伝用のマネキンだよ？」

「ほら見なさい！憧れの姉を追いかけて必死に努力して代表候補生の座を手に入れて念願の専用機受領って時に製造中止の連絡来た簪ちゃんを!!錯乱して鼻メガネ付けて、着る必要もないのにISスーツで街中を歩いてここまで来たのよ!?!」

「そ、それは止めてあげましょうよ…:…というかアレってISスーツじゃなくてただスク水にニーソ履いただけなんじゃ…。」

　　日本政府の偉い人も大変だなあ…:…まあ東さんが『対応するの気まずいから代わりに相手してね』って押し付けたんだけど…:…。

「機体本体とISコアを渡して貰えるなら自分で組み立てますから…:…。お姉ちゃんも1人で組み立てたそうですから…:…。」

「簪ちゃん…:…それテレビに映った天気予報のお姉さん。っていうかその話は…:…まあ後で話せばいいか。」

「重症だね。」

「そ、それならば…わかりました、倉持の方に掛け合ってみます…。」

「え、えつと…お、お姉ちゃん…簪ちゃんと一緒にお父さんに何も言わずに家飛び出して…ここまで来ちゃったから…帰りのタクシー呼んでくるわね?…」

「かんちゃん、元気だして!私も手伝うから…だからいい加減スク水ニーソ止めて着替えてね?ここにIS学園の制服置いておくからね。」

「うん、私はここで篠ノ之博士にISの作り方教えて貰うから。」

「…簪ちゃん、それ観葉植物だから。」

「かんちゃん本当に重症だね…。」

「ど、いうわけで気まずいからついそのまま帰って来ちゃってさ……いやあ、東さんもこればかりは悪い事したなあ……ってあれ？いつくんとあつくくんは？」

「今通りかかったタクシーに飛び乗って倉持技研に行きましたよ。ちなみに今の話は全部千冬さんに伝えましたから。」

「箒ちゃん!?そんな事したらまたちーちゃんが東さんに突うずるっ込みに来ちやうじゃん!？」

「いいじゃないですか、お通じが悪いとか言っていましたし。」

「ちーちゃんのせいで今はドライブスルーみたいになっちゃってるよ!!こうしちや居られない!今すぐ逃げないと……!」

「もう遅い。」

あっ

お姉ちゃん…本音…私に気を利かせて一人にしてくれたのは有難いけどまさか呼んだタクシーに乗ってそのまま帰るのはどうなの…。

まあ電話して聞いてみたら別のタクシーを呼んでくれたみたいだ



けど…。

だけど…。

「すいませんでしたッ!!」

タクシーと一緒に……世界初の男性操縦者の兄弟がボンネットと屋根に土下座の体勢で乗ってやってきた……。

え？何これ……？金さえ払えばタクシーの何処に乗ってもセーフ説？

「ええつと……ひよつとして千冬ちゃんの弟くん達？」

「あ、貴女は……！千冬姉のクラスメイトで……。」

「束さんとロボットアニメ談義で『種運命とR2は無い』と言って殴り合いに発展したという……その名は！」

「篝火ヒカルノ!!!」

「Yes! I am !!」

ノリがいいなあこの人達…。

「……で、自分の専用機のせいで私の機体の開発が中止されるかもしれないって話を聞いてIS学園の受験勉強を放り出して慌ててここまで来たと…。」

「そういうの嫌いじゃないけどタクシーは座席に座って移動しないとダメだぞ少年達。」

「ほんつつつとすいませんしたつっ!!」

私とヒカルノさんの目の前で土下座のまま不動の姿勢を貫く男性操縦者2人、スク水の女の子2人に土下座する男2人って何この絵面…:とかかなんでヒカルノさんはスク水着てるんだろう…。いやそれ以前に何でヒカルノさんはここに…?。

「ん? ああ、私はほら…:これ忘れ物だろう?。」

「あ、私の制服…なんでここに…？」

お姉ちゃん達がなんか言ってたのは聞こえてたけどひよつとして着替え置いてくれたのかな…気づかなかった。

「それはそれとして何でスク水来てるんですか2人とも。」

「それはいいから。」

改めて聞かれると恥ずかしいからやめて。

「…つまり開発途中の専用機…打鉄式は引き取って自分で完成させると…まあ確かにISコアはともかく本体造るなら1人でも…。」

「いや、1人では造らないけど…。」

「秋十、それできるの多分お前と東さんだけだからな…。つて…入学式まで1ヶ月無いけど間に合うんですか？」

「そんなの1週間あればできるだろ？」

「1週間ごとに新しいメカを出せるのは東さんとお前とジオンとドロ  
ンボーくらいしかないって…。」

今グラサンの方が1人で造るとか言ったけど冗談だよね？

1週間とか言ったけどジョークだよね？

まあ倉持技研が『申し訳ないから良かったら…』って入学式までの  
間設備を貸してくれるらしいから…：それでも人手が足りないのは  
変わりないけど…：せめてマルチロックオンと荷電粒子砲のデー  
タが手に入れば…。

「で、これが完成予想図ね。」

「へえ…：ばら蒔いたミサイルが別々の目標を狙う事ができるのか…。」

「どうせならアップサラスみたいにビーム砲にすればいいのに…。」

って何機密中の機密の第三世代機のデータを勝手に見せてるんで  
すかヒカルノさん!? それ私の専用機い…!

「アップサラスかあ…：楽しかったなあ08小隊ごっこ…。」

「ああ、篠ノ之さんが何故かノリス役で姉ちゃん相手に大立ち回りし  
てたね。」

「え?何それ!? それ俺は聞いてないけど!？」

「ああ、ごめん兄貴、誘うの忘れてた。」

「千冬姉も秋十も揃ってお兄ちゃんハブるのは良くないと思うぞ。」

「まあまあ少年、ほら撮影したビデオ貸したげるから、しかもNG集付

き。」

「ちなみにサンダースとカレンはあの五反田兄妹が起用されてるぜ兄貴。弾くんの親父さんが『：間に合うものか』ってカツコ良くキメる所が俺的にはイチオシかな。」

「あのおじさんノリノリだったよねえ…。まあサハリン兄妹一人二役したり陸ガンからマゼラ・アタックまでメカを全部作っちゃった東が一番ノリノリだったけど…。」

「みんなして俺を除け者にしてない？お兄ちゃんいっぱい悲しい。」

「なんか全然関係ない話題でヒカルノさんと織斑兄弟で盛り上がってるし…。」

「まあ、俺的に一番楽しかったのは東さんと一緒にアプサラスを5分の1サイズで完全再現で造り上げた時かなあ…。」

「ああ、プラモも買う時か作る時が一番楽しいもんな。」

私の専用機の話をしに来たんじゃないのこイツら…ん？

「アプサラス作ったの!？」

「ぐえっ、っ、造りました！アプサラスIIIIだけ…他はハリボテ…！」

「うお!?!か、簪さん!?!締まってる!!秋十の首が締まってる!？」

「ああ!?!ちよつとやめたげなつて、グラサン少年が死んじゃうから!!」

「荷電粒子砲はガンダムのビームライフル、マルチロックオンはアップサラスのOS…どっちもデータが揃ってる…。」

「こ、こんな事もあるうかとグラサン型メモリーカードにデータ入れたまんまにしといて良かった…。」

「お前のグラサンどうなってんの？お兄ちゃん凄い気になる。」

「設備もデータも揃ってる…機材も資材も足りなけりやすぐ用意できる。うん、これなら入学式までに間に合わせられるね！微力ながら私も手伝うよ。」

「ヒカルノさん…！」

「俺も、機械弄りとかさっぱりだけど…手伝います！」

「織斑くん…。」

倉持の所長、アプサラスを作った男、そして…えっと、好青年！この人たちが力を貸してくれるなら………！

「俺はパス。」

「秋十!?」「少年!?」「織斑くん!?…の弟の方」

「秋十でいいよ。」「俺も一夏でいいぜ。」「あ、なら私も簪で…あと2人とも敬語使わなくていいから。」

「おい秋十!どうして…!」

「だって、俺IS委員会の方で呼び出されてるから…。」

「そうか…まあ秋十が持ってたデータがなきやそもそも造れなかったんだし感謝しても文句は言えないな。」

「となるとこの三人でやるのか…。」

ヒカルノさんが不安そうに呟く、やっぱり迷惑をかけられないし諦めた方が…。

「なあ秋十、そのアプサラスって実物はあるのか？」

「え？うん…悪用されないように束さんが隠してるけど…頼めば3日で届けてくれるんじゃないかな。」

「ヒカルノさん、例えばだけどISって全く違う種類の機体を分解して別の機体に取り付けるってできますか？」

「…！なるほど、考えたじゃないか少年。私そーゆーの嫌いじゃないぞ。」

「…！となると送るパーツはアプサラス以外にも…。」

突然織斑くんが2人へ質問したと思ったら何かを察したように2人が話を進める…。

実物…データ、取り付け…！そうか！それなら…！  
できる！私達三人でも打鉄式を完成させられるんだ！！

「ふふつ、この篝火ヒカルノ。1ヶ月とは言わず1週間で仕上げてやるよー！」

「やったな簪さん！！これで全て解決だな！」



「出来上がったアプサラスからマルチロックオンや荷電粒子砲を取っ  
払ってISへ取り付けるなんて単純だけど良い考えじゃんか少年、ほ  
ら！お礼にお姉さんの胸もませてやるよ！」

「要りません！要りませんから！た、助けて簪さん!!」

3日とは言わずまさか昨日の今日で届けてくれるなんて…流石は  
『世紀の天才』篠ノ之博士…。

お礼を言いたかったけど倉持技研の倉庫に届けるなりすぐに帰っ  
ちやっただから挨拶もできなかつた…手紙を書いて一夏くんに届けて  
貰おうかな。

「よし、お姉さんが早速OSをIS用に手直し…手直し…  
…なお…。」

「ヒカルノさん？」

「……………ははっ……………流石天才……………全然わからない。」

「ええっ!？」

主人公（兄）への憧れが対抗心になつてゐる幸せになる  
オリ主

「はあ？ブルー・ティアーズの改修をして欲しい？」

「うん、ダーリンさえ良かったらなんだけど…。」

「いやいやハニー…いくらどうしようも無い僕に降りてきた天使のマイハニーシャルロットのお願いでも…俺がIS委員会直属だとしても勝手に他国のISを改造するなんて無理だよ。」

「いやイギリスからISの改修許可…というより要望が来ている、これが書類だ。」

「ん……本当だ…でも何でオルコットさんの機体の改修をハニーとラウラさんが頼みに来るのさ。」

それはクラス委員を推薦された一夏と自薦したセシリアと秋十の三人からISの模擬戦で決めるって話になつた時にセシリアに『貴方の減らず口をそのダサイグラサンごと叩き割つてあげますわ。』つて言ったのをダーリンが未だに許してないからつてセシリアから言われたんだけど。

一夏と箒に話聞いたらそもそも一夏が『ハンデは要らない、むしろ全力で叩き潰すつもりで来てくれ。』つて言った後に続いてダーリンが『ハンデ？負けた時の言い訳にされたら堪らねえから俺も要らねえよ！』つて言ったからセシリアもそう返したらしいからダーリンが怒るの筋違いな気がする…。

まあそんな事わざわざ言つてダーリンがへそ曲げてブルー・ティアーズの改修しないって言い出したらセシリアが可哀想だから言わ

ないけd

「セシリアが『秋十にグラサンがダサいって言ったのを許して貰ってないから気まずい』と言ってたが。」

なんで言っちゃうのかな!?!この無知っ子軍人!!

「は?いやそんな事ズルズル引きずる程怒ってないよ…まあオルコツトさんがファツシヨンセンス皆無な人なんだなって思ったりはするけど。」

多分英国淑女の方が年中グラサンノースリーブの人よりもファツシヨンセンスは高いんじゃないかな…。

「だがセシリアが『私だけハブかれてる』って言ってたぞ?」

「まつさかあ…ちよくちよくI Sで模擬戦するしクラスでも普通に話してるし…気の所為じゃない?というかボーデヴィツヒさん同じクラスなんだからわかるでしょ?」

「まあ、私もそう言ったんだが…『いいえ!私だけ明らかにハブられます!』と強く返されたんだ。」

「僕達から見てもダーリンはセシリアじゃなくても誰かを蔑ろにしたりする人じゃないと思うんだけどね…。」

セシリアが過去編で一言しか出てないとか台詞がどうか出番がどうか言ってたけどよくわかんなかったなあ…。

「うん…よし!誤解を解くためにもやるよ。どうせしばらく暇だしね。」

「ありがとう！ダーリン大好き!!」

「俺もハニーが世界で1番好きいいいい!!♡」

「…………お前達が人目を気にせずイチャつく度にのほほんさんが舌打ちしながらコーヒー豆を貪り食べるようになってもうこんな日月日が経ったのか。私もそろそろドイツに里帰りしてみようかな…。」

「冗談じゃありません！ブルー・ティアーズは現状でクソ機体です！オルコツ党にはそれがわからんのですよ!!」

「もうちよっと手心とかないの…?」

皆を生徒会室に集めるなり何を叫んでるのダーリン…開口一番

デイスられたら…ああ、セシリアが俯いて黙り込んでしまった…。

「おい秋十!!それは流石に酷いだろう!」

「いや兄貴、『専用機』として見るなら俺だつてブルー・ティアーズはサザビーとかキュベレイ思い出すから好きだよ?でも一応俺はIS委員会所属の技術試験官つて役職持つてるからちゃんと仕事しないと…。」

「いやいや、確かにヨイショするのは駄目だろうけど悪口を言っていない理由にはならないだろ!!」

まあいきなり友達のを専用機をクソ呼ばわりされたら一夏なら怒るよね…実際僕も秋十を怒りたい気分でもあるけど…秋十の言いたい事わかつちやつたからなあ…。

「じゃあ兄貴…ブルー・ティアーズの特徴教えてよ?」

そう言うで一夏は何か思い出すように話を始める。

「ブルー・ティアーズはセシリアの専用機で狙撃用のビームライフルが主兵装の射撃特化型、同じ名前のBT兵器…ファンネルもどきを第三世代兵装に持つてる…つまり早い話がヤクト・ドーガとかレガンダムみたいなもんだろ?」

「ガノタ的には一緒にして欲しくは無いけどまあ大雑把に言えばそうだな…でさ兄貴、そのBT兵器だけ…適性が無いと使えないって知ってた?」

「ああ、セシリアから聞いた事あるな。」

「ティアーズ含めて今世に出てる第三世代機体が試験機つてのは知ってる?。」

「箒が紅椿を束さんから受け取った時に聞いたよ。」

「オルコットさんはイギリスのIS乗りでも最高のBT適性持つてる事は?。」

「そんな事どっかで言ってた気がするな……。」

「ねえ、オルコットさんはBT兵器動かしてる時自分は動けないのは知ってるよね？」

「……………確かに…俺が見抜いたな、初めて試合をした時に。」

「少しずつ一夏の歯切れが悪くなる…女の子の事以外だと結構頭の回転早いよね、一夏って。」

「なあ兄貴……………試作機って事はさ……………」

「……………ああ、そっか……………」



「最終的には『量産機』にする筈だよな。」

そうなんだよね：ブルー・ティアーズは第三世代機体の第三世代たる所以の第三世代兵装がIS適性だけじゃなくBT適性がなくちゃ満足に扱えず、適性最高値のセシリアですらBT兵器の操作中は自分が動けない……恐らくですけど猟師が猟犬を獲物に襲わせるようにビットで敵を追い詰めて同時に本体が敵へ一方的に攻撃を仕掛けるっていうのが運用思想なんだろうけどその扱いができない。

そう、適性最高値のセシリアが。

「で、だいぶうろ覚えだけどヨーロッパの防衛に使用するISを決めるとかいうイグニッション・プランにイギリスも参加すると思うんだけど……適性が無いと使えない上に現状適性最高値の人すら本来の運用ができてない機体が採用される?……いや、『量産機』として使えると思う?」

「た……確かに……で、でも！セシリアだってこれから訓練を積んでいけば……！」

「オルコットさんが使いこなせても他の人がダメなら意味無いって

……兄貴。訓練させるのもタダじゃないんだから……必要以上の習熟が無きや想定した性能を出せませんなんて通じないよ……『プログラム通り訓練したら誰でも扱える』『不具合が起きない程度にそこそこ良い性能』これが兵器としての理想像だと俺は考えてるんだけどさ。」

まあ、ジオンもニュータイプ部隊なんかよりもドムとゲルググの配備に力を入れてたもんね……。

実際満足にブルー・ティアーズに乗れる程度にBT適性ある人が何人いるかもわからないし、セシリアと同じレベルでビット操作できるのかもわかったものじゃないよね……うん、確かに量産機としては名機とは呼び辛いかも。

「だったら少数精鋭でセシリアくらいのBT適性の人を集めて……。」

「戦いは数だよ兄貴!! あんなもんに人材資材財源回すくらいだったらラファール・リヴァイブにジェネレーター増設してビーム兵器使えるようにしとけばそれでいいじゃん! ビット? そもそもビーム兵器なんて装甲をコーティングするなりビーム攪乱幕撒かれるなりすぐに廃れるから要らねえよ!!」

「ポロくそ言うわねあんた……セシリアにもうちよい優しくしてやってもいいんじゃないの?」

「ほ、ほらセシリア! 秘蔵の小学生時代の一夏が剣道着の中をうちわで仰ごうとしてポロリしてる写真だぞー!」

「ちよつと待って箒、その写真はこういうことだ?」

セシリア膝を抱えてすっかり落ち込んで鈴が頭を撫でて慰めてる……。普段言い争いが目立つコンビだけど意外だなあ。

「とうか箒はそんな写真なんで常備してるの…？  
一夏がなんか凄い困惑してるって事は盗撮だよね？」

「と、言うわけでしたですえコアの関係で数を揃えられないIS…戦力増強を目的で配備するのに安定性が見込めない機体を採用するのはどうかと技術試験官として報告させていただきました。ていうか量産は諦めてイギリスだけブルー・ティアーズ運用してればいいんじゃないかな？量産するのはともかく個としてはブルー・ティアーズは良い機体だしさ。」

「ヒルドルブかな？」

「ほらセシリア！泣き止んでよ…えっと、ほら秋十も良い機体だつて褒めてるわよ？」

あれ？僕はダーリンに改修を頼んだのであつてセシリアを糾弾してくれって言つてないよね？

「まあ俺はどれか一つ使えって言われたら第三世代兵装使えなくても充分強機体のシユバルツァ・レーゲンか機体も第三世代兵装もパイロットを選ばない甲龍使うけど。」

「や、やめなさいよ…今私の機体を褒められたら私が何言つても嫌味みたいでセシリア慰められないじゃない…。」

ああ、セシリアが鈴にまで睨み始めた…涙目だと可愛くて迫力無いけど。

「なんなんだ、お前はセシリアが嫌いなのか？」

「篠ノ之さんまで…オルコットさんは女の子として魅力的だけどブ

ルー・ティアーズの量産は認めたくないだけだつて。」

褒めながらしつかり否定してる…。

本当はダーリンってセシリア大嫌いなんじゃないかな…。

「ね、ねえダーリン…そこまで言うなら改善案位はあるんだよね？と  
いうか僕が最初にダーリンに頼んだ内容覚えてるよね？」

「ここまで言うておいて何も無いと言うならお前はただセシリアの心  
を傷付けただけという事になるぞ。」

僕の言葉に続くように沈黙を貫いていたラウラが口を開く…：結  
構怒ってる…のかな？まあ友達の間を散々貶されて黙ってられる  
ような子じゃないもんね。真面目な軍人さんだし。

「……………まあ一応程度だけど。」

「と…言うわけでこれがブルー・ティアーズ強化改修型、『クイーン・ビー』…機体のコンセプトは『寄せ付けない数の暴力』って所かな。」

ダーリンのグラサンから投影されたホログラムにはブルー・ティアーズを素体に某東方吸血鬼妹の羽みたいなのが背中に二対四枚出てる…一本一本がビットなのかな…。羽は広げたら端から端までI S二体分の大きさがあるし脚が大型化されて逆関節になってるし…なんか…女王蜂というよりハーピーみたい…に…。ついでに全身装甲になってレイジング・レイヴンをオマーージュした西洋の鎧みたい。

あ、逆間接の脚はあれ足首から先の部分を増設してるんだ、普通サイズだとセシリアの脚バキバキになっちゃうもんね。

「まずコイツは背中に増設された羽に合計32機のビットが装備されてる、こいつはビットの根元がフレキシブルに動いて固定ビーム砲としてそのまま射撃する事も可のu」

「32機?!正気なのダーリン?!そんなの操ったらセシリアの脳みそオーバーロードしちゃうよ!?!」

「まあまあ最後まで聞いてよ…。で、背中の羽のビット…見た目通りの『クロススパア』って名前なだけでさ…刃部分だけの十字槍みたいな見た目だから。こいつが攻撃用の射撃ユニットなんだけど、それぞれの刃先の頂点を繋ぐように正三角形のエネルギーブレードを展開することで直接攻撃可能なブレードビットととしても使用が可能。」

「ほう…方が一ブレード等で叩き壊されそうになっても即座にブレイ

ドビットに変えれば返り討ちにできそうだな。」

「それで本来のブルー・ティアーズのビットが配置されていた腰の部分には『ソードブレイカー』って名前のシールドビットが搭載…しかもこいつは拡散式荷電粒子砲を搭載してるからミサイルとかの爆発物や直接攻撃してきた相手を撃ち落とす事もできるんだ。まあ32機ものビットを潜り抜けてくる相手に通じるかわからないけど。」

「基本はその4機を周りに侍らせて防御するわけね。秋十製らしく大抵の相手には対応できそうな機体じゃない。」

「腕部アームには左腕には50口径の二連装内蔵機関銃、右腕は小型グレネードランチャーが仕込んであるよ。ついでにアーム自体も大型マニピュレーターに変えて指の1本1本がISの装甲に使われる合金でできた鉤爪だからインファイトも可能。」

「ふむ、万が一に接敵されても自衛できる最低限の装備が着いているのか。」

「ダーリンの説明にラウラ、鈴、箒がそれぞれ感想を述べる…：…というかこれ元のブルー・ティアーズ要素胴体と腰以外どこにあるんだろ…。」

「ちなみにミサイルビットは本来自動で敵を追尾する筈のミサイルをミノフスキー粒子も無いのにわざわざ手動操作するとかバカみたいだから取り外したよ。」

本当はブルー・ティアーズ嫌いなんじゃないかなダーリン…。

「で、この機体の概要だけど、パス・スロットもイコライザも無し、目的の運用法に必要なデータは全部コアからデリートしてその分演算能力を初めとしたビットの操作及び補助に関係する機能を徹底的に強化することでBT適性の無いパイロットでも最低でも8機同時にビットを操作できる筈だよ、理論上は……しかもただ使うだけならって話だけど。」

「少なくとも秋十自身BT兵器動かせてたからあながち机上の理論じゃ無さそうだけど……どうして適性の低いパイロットでも……というかBT適性の無い奴でもセシリアよりも多くビットを操れるのかお兄ちゃんもうちよつと細かく聞いてみたいかな。」

「ああ、簡単だよ……このビットはコンピュータを積んだドローンでもあって目標の近くまで移動したりブレードビットとして攻撃する際は誘導ミサイルと同じ要領で自動追尾、射撃自体も目標をパイロットが捕捉すれば自動で射撃して……といった具合にほとんどコンピュータが自動で動かしてくれるからだよ。パイロットはイメージ・インターフェースを通して手直ししたり動かしたいビットだけ直接操作すればいいから、ブルー・ティアーズみたいにいちいち射出したビット全部を操作する必要が無いんだよ。コンピュータが動かしてる間はパイロット自身も移動して敵から離れたり逆に接近するのも自由自在だしね。」

「……何それ凄い……。」

ひよつとしてダーリンその気になればISコア位作れるんじゃないかな……。

「ちなみに運用思想は、目標をハイパーセンサーで捕捉できるギリギリの距離を陣取ってビットを射出……ビット自体も遠距離から数に任

せて一斉射撃することで相手を超長距離から一方的に打ちのめす  
：って感じかな、大型化した分センサー機器も従来のISに積みな  
かったサイズの性能が良い奴を装備できるし脚部の逆間接はティ  
アーズのメインスラスタを増設してできたもので少なくとも直線  
移動ならマツハ2以上を出せるから敵が近づいてもビットをばら時  
いて距離を離してブレードビットで串刺しに…って事も。」

「本体は射程距離外を陣取って自動操縦のドローンがちよくちよく  
エースパイロットの巧みな操作も交えて最低十数機が敵の周りを飛  
び回りながらビームの雨あられを食らわせに来て、敵の射撃が届いた  
としてもシールドビットに阻まれて…運良く近づけたとしても辺り  
そこらにビットをばら撒いて敵を包囲しながら自分はマツハ2の速  
さで射程距離外へまた逃げていく…：…これ相手する側にとって  
遠回しにクソゲーなのでは？」

遠回しじゃなくてもクソゲーだと思うよラウラ…：…なんかこれ  
射程距離外から子機を飛ばして攻撃ってガンダムなんかの機体の  
コンセプトにあったような…：…なんだっけ？

「これならセシリアも大満足だな！やっぱりこういうことは秋十に頼  
むのが1番だな。自慢の弟だよお前は！」

「ああ、セシリア本人はこの機体で無双する自分でも想像してるのか  
ニヤけたまま反応が無いが…このメンバーで1番性能が高い私の紅  
椿でも苦戦は避けられないだろうな。」

「秋十も偶には良い仕事するわね！」

「へへつまあな。」



一夏が凄いいベタ褒めするなあ…箒と鈴も一緒に褒めてるし……  
ダーリンも凄いい得意気になっちゃって……。

でも…これって……。

僕の不安を知って知らずかラウラが口を開く。

「なあ秋十。」

「ん？どしたのラウラさん。」

「ISって一機作るのに億はくだらない費用がかかるな。」

「うん、そうだね。」

「その中でも特殊な機能や兵装を持つ第三世代機はその倍以上は金がかかるな。」

「…そうだね。」

「この機体…クイーン・ビーはまだ開発してないんだな。」

「……そりゃ勝手に改造しちゃ不味いもの。」

うん、ラウラも気づいたみたいだね。

「この機体、原型機のブルー・ティーズから流用するパーツはあるのか？」

「……………ISコアと本体を繋ぐ胴体部以外は取り外す事はあっても流用する事は無いね。」

「なあ、この機体…。」

「イギリスはそんな大改造に予算を出してくれるのか？」

「……………君のような勘のいい軍人は嫌いだよ。」

「ええ!?作れないのか!？」

「そんな…あつ。」

「どういうことd…どうしたんだ鈴？」

ラウラの言葉と秋十の返答に一夏達アジア組が驚く、まあ…そうだよね…ただでさえ下手な兵器よりもお金のかかる第三世代機…それをこんな原型がほとんど残らない上に新しく追加するものが多すぎる大改造をするお金がそう易々と出せるかどうか言われたら…お察しだよね。

あ、さつきダーリンが「一応は」って言ったのはこれなんだね。

鈴がラウラの言葉に気づいてそれを2人に説明してるから僕は何も言わないけど…というか僕途中から全然喋って無いけど皆に存在忘れられてないよね？

「そんな……どうするんだよ、妄想から戻ってこない上になんか俺の

名前呼びながらクネクネし始めたセシリアになんて言えばいいんだよ……。というか何で俺の名前呼んでるんだセシリアは……？」

「気にするな一夏。」

「あんたが気にする事じゃないわ。」

「伝え辛いな……。まあ俺も途中で気づいたのに最後まで予算を無視して改修案を練ったのが原因なんだけど。」

「なんで気づいたのに見て見ぬふりして最後まで突っ走っちゃうのさダーリン……。」

「ねえダーリン、これもつとお安くできないの？例えば改修するのはビットだけにするとか……？」

「そうだな、ビットだけならそんな高くつくことはないよな……。どうだ秋十？。」

「いや、そのビットを操作する為の補助コンピュータとかISの演算能力を高めるための機器類を積むための大改造だし……。」

「なあ秋十、ビットの数を減らしたらダメなのか？」

「いや……ラウラさん、これでも少ない方なんだよ……これ以上減らすと今のブルー・ティアーズみたいに代表候補生レベルの相手にすぐビットの包囲網潜られて接近戦でボコられちゃうんだよ。」

「最低8機とか言ってたのに32機全部使わせるつもりだったのか……。」

「減らしたとしても本当に雀の涙だよ？そもそもビツトって試合中にちよくちよく破壊されるから消耗品扱いで量産しとかなくちやならないし。」

「どうするんだ秋十…セシリアがヨダレ垂らし始めたぞ。」

「篠ノ之さん……もうこのまま夢を見させて知らんぷりしていいんじゃないかねあ……。俺達の話聞こえて無さそうだし。」

「……………よし！決めた!!」

腕を組んで悩んでた一夏が急に立ち上がって……セシリアをお姫さま抱っこして……………えっ、どこ行くの!?

「お、おい一夏!?!セシリアをお姫様抱っこして何処へ行くつもりだ!!」

「ちよつとー待ちなさいよ一夏あ!!」

「どうか、いきなりお姫さま抱っこされても妄想から帰って来ないオルコツトさんはなんなの……?」

「待つて皆！ダーリン……あ、お邪魔しました!!」

「ねえ本音ちゃん、あの子達なんでこの生徒会室に集まってたの？」

「ほえっ!?!会長が許可してたんじゃないの!?!」

「というか話聞いてたけど、秋十くん…結局あれだけ豪語してた『量産できる機体』ってのは全く達成できてないわよね…。」

「お姉ちゃん…一応ブルー・ティアーズを強化するって話らしいから…多分秋十は気づいた上でバレないように説明してたんだと思うけど。」

「と、言うわけでオチは頼むよ千冬姉。」

「おい!!無茶言うな!というかオルコットを私に押し付けるな!!」





「く……クーちゃん……い、いきなり何を……っ……?!?」

「す、すいません……束様が全裸で『マッサージして欲しい』と言うからそういう事かと……。」

「どういう事だよっ……うごっ……全裸なのはお風呂上がりだからだよ……っか寄りによってなんで……止める間もなく間髪入れずにグー・チョキ・パーを無理矢理押し込んだのっ……うぐおっ……。」

後編になっても主人公に勝ててないオリ主

「ダメだ、仕組みはわかるけど何処を弄ったらいいかわからない。束のやつ…多分他の人間…グラサン少年が悪用しないようにメンテナンスは可能だけど改造はできないようにわざとややこしいプログラムを組んだな。」

「それってつまり…?」

ISに移し替える事ができない…。よく分からないと言いたげに首を傾げる一夏くんはヒカルノさんは頭を悩ませながらそう呟く。

「どうにかできないんですか!?!」

「方法はあるよ…OSをIS用に弄れないならISの方をコイツ用に手直しすればいい、ただ…そうになると…。」

ヒカルノさんがチラリとフレームが丸出しの状態の未完成の打鉄式式を見る…要は1/6アプサラスを素体にISを作るってわけだから、多分この未完成打鉄式式と互換性なんてあるわけないからIS部分は一からやり直しという事になる。

「そ、それって1ヶ月で完成させられるもんなんですか?」

「…突貫工事で不眠不休ならできるかな…このアプサラスにISをくつつけるって話だし。」

焦る一夏くんに気楽そうな表情を作って返事を返すヒカルノさん、でも不眠不休の突貫工事を1ヶ月ぶっ続けなんて正気の沙汰じゃない…。

私なんかの為にそんな事させられないっ!

「あ、あのー！やっぱり…打鉄式は…。」

「駄目。」

えっ……。私が話す前にヒカルノさんが食い気味に切り捨てた。

「そもそも原因はね、束のやつがその少年の専用機を作りたいから工廠貸してくれて話を持ってきて私がそれをそのまま上に報告したせいで『篠ノ之博士と世界初の男性IS操縦者のどちらともコネクションができるなら』とか言ってる君の専用機そっちのけにしちやっただってのがそもそも始まりなの。」

「だから今朝アップサラスを届けに来た時、束さんすごい気まずそうな顔ですぐ帰ったのか…。」

そんな話が…。

「そういうこと、私だって大人として責任感じてないわけじゃないんだ。……せつかくその償いができるチャンス。嫌だと言っても完成させるからな。」

そう言つてニヒルな笑みを向けるヒカルノさんは……

私の大好きなヒーローよりもカッコ良く見えた。

「もうこれいつその事下手に改造せずにアプサラス自体ポン付けして  
第三世代兵装扱いにしちゃっていいかな？」

「ヒカルノさん!？」

「ヒカルノさん、いきなり何言ってるんですか？俺こういう事よく分  
かないけど東さんが『仕様変更だと…っ！ふ…ふ…ふぎけるな  
よ…！戦争だろうが…。2度目3度目の打ち合わせ中ならまだ  
しも…納期1週間前に…んなことしたら…戦争だろう  
が…！戦争じゃねえのかよ…！』って言ってたし…。完  
成図と違うの作っちゃダメなんじゃ…？」

「あいつもそんな事言うんだ…。大丈夫大丈夫、プロトタイプって  
事にして試作前期型、戦術実証型、火力試験機とか言って徐々に改修

して元の打鉄式式に寄せてけば最終的には仕様通りの機体になるし。」

「そんなMSVみたいな…。」

「とりあえず完成…外側だけ。」

「これプロトタイプで通るかな…。」

ほとんどポン付けというか本当にくっ付けただけになったけどほぼ1週間で機体自体完成はした…したけど…。

なんか胴体丸々ドアン状態のアプサラスだしフロートユニットがズサ・ブースターだし腕はジオングのサイコミュ無しだし…脚はグフ（フライトタイプ）だし…ええ…私の打鉄式式なんかガンダムブレイカーのモブが使いそうなずんぐりむつくりな見た目になってる…と  
うか私の機体は腕の部分は無かった筈だけど…。

「よし…2人とも明日からは来なくて大丈夫だぞ。後は機体のグツチヤグツチヤなシステム面をISとして動かせるように直すだけだからね。」

「だ、大丈夫なんですか？これ両手両足胴体全部バラバラの機体なんですけど…。」

「大丈夫だって、この程度なんとかなるから。」

「…わかりました、それじゃあ失礼します！」

「あ、あの！本当に…本当にありがとうございました!!」

そういえばこの工廠の隅に置いてある未完成の…本来の打鉄式式、  
ずつと置いてあるけどあれはどうするんだろう…？

まあ、私が心配してどうにかなる話じゃないよね…今度ヒカルノさんにお礼にカップケーキを作って差し入れに行こうかな。

「……………さてと、大人の責任を果たすのでしょうか。」

「つてわけできさ…意外と早く終わってよかったよ。そうそうその後帰る時に何かの縁になって簪さんと連絡先交換したんだけどさ…3日経つけど何てメール送ればいいか分からないんだよなあ…。」

「…なあ兄貴、機体完成って多分それ…嘘だと思うよ？…そんなガンプラ限定のプラモ大会にF A : Gで参加みたいな真似できるわけないじゃん。」

「例えがよく分からないけど…つまり…」

「本当は仕様通りの打鉄式式を作らないとダメ…でも被害者の簪さん



と原因に関わりがあるだけで本当は何も悪くない兄貴に迷惑かけられない……だからガワだけ適当な機体をでっち上げて2人を帰して、自分1人で打鉄式式を作り上げようとか考えてるとか……？」

「そんな……迷惑なんて俺は……！」

「まあ上手く言葉にできないけど大人が自分のミスの尻拭いに子供を巻き込むのを嫌がる気持ちはわからんでもないかな……。」

「俺は……っ、秋十！俺ちよつと出掛けてくる!!」

ヒカルノさんにお礼のカップケーキ…ちょっと沢山作り過ぎちゃったかな…多すぎたら他の倉持の人達にも差し入れて事にするばいいかな…。

例え継ぎ接ぎだとしてもやっとの努力で手に入れた専用機がちやんと完成したのは嬉しい…そんな気持ちでヒカルノさんの元へ向かっていと数日前まで通っていた工場のドアの前まで辿り着くと話し声が聞こえてきた。

「篝火くん。もう充分だろう？もう休みたまえ…一体君は何時間不眠不休で打鉄式式にかかりつきりているのかね。」

「大丈夫です…まだやれます。」

「君…白式についてはそもそも政府からも『残った片割れの専用機は何としてでも確保するから入学までに間に合うように織斑一夏の専用機を優先しろ。』と話が来ていたのだ、君が篠ノ之博士の頼みを上報告しなくてもどの道…式式の延期は避けられない事だったんだ。」

「それでも…それでも、結局あの娘から機体を取り上げる原因を引き起こしたのは私である事に変わりありません。」

「責任感を感じるのはわかる…だがな、昼間は通常の業務を普段の倍の速度で終わらせては休憩も食事の時間を惜しみ式式の完成の為に眠らずに夜明けまでアプラサラスのマルチロックオンシステムの解析、機体の調整、荷電粒子砲のテストと…このままでは君の身体が持たないだろう？…それに、あんな出来損ないの改造プラモみたいなハリボテを作って嘘をついてまであの2人を帰してしまつて…：…確か更識簪はそれなりにISの開発整備に関して知識はあるのだろうか？なら今からでも呼び戻しよ！」

「私は…私は大人で！技術者です！本来なら私達倉持がちゃんと完成させて受け渡す筈の機体を…『後から別の機体を作る事になったから作れません。』『間に合わないので諦めてください。』『間に合わせたいなら手伝ってください。』…これが大人が、子供へ言う言葉ですか？一端の技術者が言う台詞ですか？」

「…だが、どの道君一人でとてもじゃないが間に合う訳ないだろう！！諦めて白式の開発に集中したまえ！！」

「白式と並行して式式の開発に取り掛かって構わないと篠ノ之博士からは許可は得ています。むしろ何故そう言われているのに式式の開発に誰一人回さないのですか？」

「…もう知らん！野垂れ死んでも知らんからな！！例え完成しても君の席がこの倉持にあるとは思うなよ！！」

「…勝手にどうぞ。」

「……………」

そんな…知らなかった…ヒカルノさん、私の為にそこまでして…なのにそんな事も知らずに私は一人浮かれて…っ！

あの時…最期まで手伝うと言っていたら…！あの時…私が潔く諦めていれば…！

気がつけば私は走り出していた…私のせいでヒカルノさんが…そう思うと、もうあの人にどんな顔をすればいいかわからなくて…両手を振って息を切らしてその場から逃げ出していた…持っていたカップケーキを落とした事も気づかなかった…。

「お願いします!!ヒカルノさんと式式の完成を手伝ってください!!」

「お、織斑くん!?本人なのか…!」

「い、一夏くん…?」

走って、走って…走り疲れて…足を止めると聞き覚えのある声と名前が聞こえてきた。

「織斑くん…頭を上げてくれないか、そうやっても君の専用機を放り出して式式に回るわけにはいかないんだよ…。」

声が聞こえた場所…別の工廠の扉の隙間を覗き込めば…そこには土下座をして倉持の研究員に必死に頼み込む一夏の姿があった。

「お願いします!!俺の…俺のせいで…誰かが悲しむ所なんて見たくないんです!!」

「やめてくれないか…私達だってやりたくて彼女の機体の製作を取り止めた訳じゃないんだ。大人の事情ってやつがだね…。」

研究員らしき人の一人…この人たちのリーダーらしい年配の人が一夏くんの前に膝を着いて子供に言い聞かせるように頭を上げるように話す。

そうだよね…政府の命令を断る訳にはいかない…ISを扱う以上倉持は政府の膝元…この人たちにだって生活がある…。

「そこをどうにか…どうにかできませんか？」

「無理だよ…君に聞かせる話じゃないが、これは日本政府からの決定なんだ。我々の意思でどうにかできないんだよ。」

「っ……………なら……………ん…。」

「え？…なんだって？」

取り付く島もない相手に一夏くんが呟く、研究員が聞き返すと彼は勢いよく立ち上がって高らかに声を上げた。

「俺は！専用機は受け取りません!!簪さんが機体を受け取るまで…：例え専用機が送られても！俺は一切受け取りはしません!!学校の訓練機以外乗ることは無いし、専用機以外ISに乗るなど言うなら俺はISには乗りません!!例え千冬姉だろうと束さんだろうと誰になんと言われても!!簪さんが専用機をちゃんと受け取るまで!!俺は絶対にISには乗りません!!…：そう政府の人に伝えてください。」

そう宣言して一夏くんは踵を返してその場を後にしようとする…。  
誰かが声を上げた。

「それは困ったな…受け取って貰えないんじゃないやコイツを作っても意味が無いじゃないか。」

出ていこうとする一夏くんの背中へと、一人の整備士らしきおじさ

んが言葉を投げかける。

「……迷惑をかけているのはわかってます。それでも俺h」  
「ならさつさと式式を完成させちまわないとな。」

「……え？」

「ちよ…ゲンさん！何を言い出して…。」

「確か政府の命令は…男性操縦者の機体を優先しろ…みたいな話だったろ？ならその坊やの専用機と一緒に式式の開発を進めても問題は無いだろ？」

「お、おじさん…！」

「だが…そんな事したら確実に入学までに機体を完成させるのは…。」

「なら間に合うように頑張ればいいだろ。そんな若いジャリが女の子の為に土下座までして…それに何もしてやらねえのは…男じゃねえだろ？主任さんよ。」

おじさんの言葉に主任と呼ばれた年配の研究員が肩を震わせる…。  
職人っぽい人ってだいたいゲンさんって呼ばれてるのは何だろう…？

「……私も技術者だ…目の前の仕事を放り出す真似なんて…本当は、したくはないんだ。」

「……なら、やってやろうじゃねえか？なあお前らもそう思うだろ？」

「……そうだ、私達は倉持技研だ…天下の倉持がそれくらいできないわけない!」

「そうよ! 私達はあの千冬様の機体だって作ったのよ! きつとできるわ!」

「私は、式式を見捨てたりはしない…! そうだ! 式式はゴーストファイターなどではない…!」

「……………よし、君たち! 睡眠時間以外休めると思うんじゃないぞ!」

「よく言った! 主任さんも道連れだぜ?」

「当然だ。私だってどちらの機体も完成させられるならそれに越したことはないんだ。」

ゲンさんの言葉を皮切りに次々と研究員の人達も賛同していく…。  
主任の人まで…。

「おじさん…みんな…ありがとうございます!!」

「その代わり、坊やも手伝って貰うからな? 人手はいくらあっても足りないからよ。猫の代わりにブリュンヒルデの弟の手も借りさせてもらうぜ?」

「はい!! 知識とかは自信ないけど…俺! 何でもやります!!」

「あ、あの!! 私も…手伝います!!」



「か、簪さん!?!なんでここに…?」

「役者は揃った…って所か。よし!やるぞ!!」

「「「「おうよ!!」」」」

やったぜ。 メール投稿者：世界初男性操縦者（兄）

年配の開発主任のおっさん（60歳）と先日連絡先くれた特撮ヒーロー好きの眼鏡の嬢ちゃん（多分同い年）とヒカルノさん（25歳くらい）とその他倉持の技術者さん達（45人）を中心に打鉄式式を開発したぜ。

今日も明日も春休みなんで倉庫で機材と工具を持ってから滅多に政府のお偉いさんが来ない所なんで、そこでしこたま予算を注ぎ込んでやりはじめたんや。

3人で納期を舐めあいながら汚れてもいい作業着だけになり持つて来たマルチロックオンのデータを3回ずつ解析しあった。

しばらくしたら、データ解析が中々進まなくてコメカミがひくひくして来るし、焦りから解決の糸口を求めてデータ解析室の中でぐるぐるしている。

主任のおっさんに機体本体の製作を任せながら、ヒカルノさんのくれた塩飴を舐めてたら、先に嬢ちゃんがキレながらパソコンにコナ○コマンドをドバーっと打ち込んで来た。

それと同時にヒカルノさんもわしも怒りの声を出したんや。もう顔中、汗まみれや。

3人で出し合った意見をホワイトボードに纏めながら軽食のパンケーキにハチミツを塗りあったり、束さんに電話を駆け込んで遠隔操作でデータを解析させたりした。ああ、くたまらねえぜ。

しばらく待ってから送られてきた解析データを見ると問題が解決してもう気が狂う程気持ちええんじや。

打鉄式式の機体のコアにマルチロックオンのデータを突うずるっ込んでやると残りの課題が荷電粒子砲と近接武装だけで完成が近い気がして気持ちが良い。

嬢ちゃんもヒカルノさんの胸に顔を突っ込んで歓喜の声を上げて居る。

機械油まみれの主任のおっさんの手伝いをしながら、思い切りビス

止めしたんや。

それからは、もうめちやくちやにおっさんと嬢ちゃんとヒカルノさんと式式の完成の喜びを分かち合い、打ち上げで飲み屋でシャンパンをかけあい、二回もお巡りさんに未成年飲酒の疑いで店から連れ出された。

もう勘弁して欲しいぜ。

やはり大勢で1つの事をにやり遂げると最高やで。こんな、男性操縦者を許してくれないか。

ああ、千冬姉、早くに迎えに来ようぜ。

打ち上げに参加したけど酒は一切呑んで無いって信じてくれるなら最高や。

わしは弾の家の近くの公園前派出所、嬢ちゃんはいつの間にかいねえぜ、糞が。

弟想いの千冬姉、至急、メール返信してくれや。

作業着姿のままの弟をお迎えして、早く家に帰ろうや。

「少なくとも事の発端はお前にあるから黒ひげ危機一髪の刑で許してやる。」

「いや、このご時世でお酒飲んでないにしても居酒屋に入っちゃう  
いっくんも悪いんじゃない? って黒ひげ危機一髪って何!? 穴は1つし  
か無いんだよ!」

「飛び出るまで何本でも押し込んでやる。」

「ゆ、許しよ」

「牙突零式っ!」

ぬふうっ

主人公に勝てないけど諦めはしないもう目覚めた才子主

夏休み序盤、包帯はまだ取れないが充分回復し退院した私と秋十は一夏を連れて家に帰り、ついでに同じく退院した山田くんを誘って教師二人の宅飲みに洒落込む事にした。

……したんだが。

「たまには俺にISを動かさせろよ!!」

「いつも動かしてるだろ!?!いきなりどうしたんだ!」

庭に転がりでて何を喧嘩してるんだあの愚弟共は…あとなんで一夏は青、秋十は黄色でそれぞれスーツを着用しているんだ…。

「世界初の男性操縦者としてチャホヤされたいと言っているんだ!それをわかるんだよ兄貴っ!!」

「俺はお前と違って世界初以外特にネームバリユーが千冬姉の弟ぐらいしか無いんだぞ!というか今更何言ってるんだよ!!」

「俺だって世界初で世界最強の弟って肩書きで人生イージーモードで女子にチャホヤされたいんだ!何故それがわからん!!」

「そこで山田先生と宅飲みしてる…女手一つで俺達を育て上げた千冬姉の前でもういっぺん言ってみろ!!」

「俺は織斑一夏になりたかったんだ!!」

「そうやって誰かに成り済まさなければ幸せになれないと思っ  
ているからっ!!」

「世界は！人間の全部を幸せにできやしない！」

「幸せになろうとする意思があれば!!人間の知恵はそんなもんだっ  
て、乗り越えられる！」

「ならば、今すぐ鳳鈴音にええ乳をさすけてみせろ！」

「貴様をやつてか r…失礼だよ!?別に鈴は貧乳だから不幸せとかじゃ  
ないだろ!?!鈴はペチャパイでも必死に生きてるんだぞ!!」

お前も失礼だぞ一夏…。

「あの…織斑せん s…先輩?なんで織斑くんと織秋くんが外の庭で  
取っ組み合ってゴロゴロ転がりながら口論してるんですか?」

「多分秋十が私のストゼロをジュースと勘違いして一夏と一緒に飲み  
干したからじゃないか?」

「ええ…。」

まあアイツらの口喧嘩なんぞ…シチューにご飯はセーフかどうか  
だの、パクチーは美味いか不味いかだの…宇宙世紀以外のガンダムを  
認めないのはおかしいだの…くだらない話ばかりだから放つて置い

ても大丈夫だろう。

……まあ私は逆にアナザー以外はZZしか見てないんだが。

「だいたい立場が入れ替わったとしても俺はお前のISは白式だぞ!? それに俺はIS委員会に所属したりしないから改造の許可が降りないからパーツ増設して強化なんてできなくなるぞ!!」

「どうしてそんなことするの兄貴……。」

「俺は政治に関わる気が無いからな。IS委員会なんて関わったら絶対面倒事になりそうだし。」

「面倒事って……まあIS学園の防衛用って名目でガツガチに軍事利用前提のISとか設計させられたりするからあながち間違いじゃないけど。」

「ついでに立場逆転したとしても、俺はIS委員会所属の初心者パイロット……秋十は特にIS改造する権限のない整備科志望の1年生……むしろしょぼくなってるないか?」

「ええい! なんやかんやで女子にチャホヤされればそれで構わん!!」

「俺に成り代わりたいうて言うなら入学初日に箒の裸見て木刀でぶっ飛ばされてセシリアのサンドイッチ食べて地獄を見て無人ISに吹き飛ばされて入院してみろや!!」

そう言つてまたゴロゴロと取っ組み合いながら庭を転がりだして……喧嘩といっても口喧嘩だけで後は2人で転がってるだけだn: あっ一夏が秋十を巴投げしてお隣さんの塀の中に放り投げやがった。

「止めなくていいんですか?」

「なら山田くんが止めてきてくれないか？ 私は今ストゼロを自慢の肝臓で処分するのに忙しいんだ。」

「私も熱爛で喉を潤すのに忙しいので無理です。」

「そっか。」

「ああ〜…頭痛い…。なんで俺は兄貴と一緒に寝てんの？」

「ん…お前が昨日『一夏のにーと一緒に寝る！決定！』とか言っ  
てなかつたっけ？」

「は？」

まさかジュースと思いきやストロングゼ〇とは…少ししか飲んで  
なかつたから酔いはすぐ覚めたけど秋十はなんか気持ち悪い甘え上  
戸になってたなあ……グラスノースリーブに抱き着かれるとか頭  
おかしなるって。



「うわぁ……千冬姉……」

「書き置きだ……『私の心の友ストゼロを飲んだ罰として後片付けを命じる……弟達を愛する姉より。』……取ってつけたみたいに愛するとか書きやがって……どうやったら宅飲みで2人分のランジェリーと局部を隠せそうなお盆が2枚ずつ散乱するんだよ。」

「俺、朝ごはん用意するから先に片付けしててくれよ秋十。」

「朝はトーストだけでいいから……うわ！ヌメヌメしてる、気持ち悪っ。」

酔っ払った女教師2人に酒の勢いでナニがあつたのかは考えないようにして俺は昨日千冬姉達の酒のツマミに在庫を解放して空っぽになった冷蔵庫からジャムやマーガリンを用意してからトースターに食パンをセットする……秋十が下着類片付けるまで台所で料理するフリしてようかな。

「兄貴…俺さ…ガンプラで武器と上半身作ってる時が1番楽しい。」  
「気持ちはわかる…俺も千冬姉のプラモ勝手に組み立ててた時そうだったよ。」

「それで下半身で萎えるんだよ…下半身の無いGPシリーズとジエガン達が部屋にあるんだよ…。」

「1つくらい下半身も作ってやれよ…。」

朝食を済ませて2人で残りを片付け終わる頃、ピンポーン…とインターホンがなる。そういえばラウラと一緒にスマブラやりたいとか言ってたから家に誘ったつけ…。

「はい、今受け取りまーす。」

注文したガンプラの宅配と勘違いした秋十が一足先に玄関に向かう、俺もそれに続いて玄関に行く…。

「おはようー夏！それに秋十！先程、教官とすれ違ったが山田先生が何故か織斑教官にもたれかかって2人くっついて歩いてたが…多分夏バテかなんかだろうな…エアコンの効いた室内でも2人とも油断はするんじゃないぞ？」

「やあラウラさん、大丈夫大丈夫。俺と兄貴は意外と頑丈だから。」

「おはようラウラ、そうだな…子供の頃に一回秋十と兄弟揃って風邪ひいたくらいだっけかな？」

「やつほー！ダーリン♡退院したって聞いたからフランスから帰国して来ちゃったよ。」

「ハニー！♡…ごめんね、夏休みはハニーの実家でデュノア夫妻に挨拶する予定だったのに…。」

「ダーリンが無事ならそれで構わないよ…あ、お邪魔するね、一夏。」  
「おう、弟の未来のお嫁さんなんだし実質シャルも織斑家みたいなもんだから大歓迎だよ。」

そういえば秋十が核爆弾みたいなIS作って、それに吹き飛ばされた千冬姉達IS学園教師が入院して…秋十も秋十で、それにキレた束さんにボコボコにされて後追いで入院したんだっけ…。

暑い夏場の玄関前でいつまでも立ち話とは行かないし、家に来たラウラとシャルを早速中へ招こうとして…目が合った。

「「……………」」

何だか気まずそうにラウラとシャルより1歩後ろに下がって並んで……箒、鈴、セシリア、簪の4人と…目が合っちゃった…。  
秋十達は…さっさと中に入って行きやがった…多分俺に押し付けるつもりだったんだろうなあ。

「え、えーつと…みんなどうしたんだ？」

「なんだ、幼なじみが遊びに来ちゃ悪いのか？」

「どうせ夏休み暇そうにしてるだろうなって思って遊びに来てやったのよ！感謝しなさいよっ！」

「あ、あの！一夏と…遊びたくて…と、特撮作品をテーマにしたゲームとか持ってきたから。」

なんで箒達は互いに互いを牽制するように見つめあってんだろ…。

「はい、ダーリン…あーん♡」

「あー…あむっ！ハニーのケーキ美味しい♡」

「それセシリアが持ってきてくれたケーキだからな？」

「相変わらず人目も気にせずに…このバカツプル…」

イチャつく秋十とシャル、それを見て壁を殴りたそうにしてる鈴とツツコミを入れるラウラ…：…なんか睨み合ってる箒とセシリア…：…場所が教室から自宅のリビングになっただけで結構いつもの光景に逆戻りしてるなあ。

「えつと…あう…」

箒だけなんか初めて女子の部屋に来た男子中学生みたいになってる…：…なんか可愛いからもう少しこのまま眺めてようかな…。

「所でみんな女の子な服装だけどラウラさんだけなんか…チャライな。」

「これがナウでヤングでホットでクールだとクラリツサが言っていたからな、それにファッションに男も女も軍人も無い。」

グラスアンノースリーブな秋十がブーメラン発言してるけど：確かに、自慢げにラウラ・ドヤ顔ーデヴィツヒになってるラウラの服装：斜めにずらして被ってるメンズキャップに黒いシャツ、首元と手首にはこれでもかと金色のアクセサリーをジャラジャラ付けて：ダボダボのズボンにカラフルな靴下……：一昔前のラッパみたいな格好してるな、ラウラはちよつと学生生活エンジョイし過ぎなんじゃないかな…。

「それじゃあスマブラやろう…と思ったけど昨日は兄貴とISバーサススカイヤつてたからプレスステ外して配線し直さなきゃいけないとちよつと時間が掛かるんだよね…：どつかのアホ兄貴が『織斑家において出した物は使い終わったら1日以内に片付けること』とかルール作るから…。」

「プラモのランナーやらジャンクパーツ、ガンダ○マーカーに空箱で部屋の足の踏み場を埋め尽くす弟、ビールだのおつまみだのゴミを散乱させてリビングをゴミ捨て場にする姉さえいなけりやそんなルール作らなかつたよ。」

「ダーリン……片付けはちゃんとしようよ。それでシャアザクの角無くして散々大騒ぎして隣の部屋でお昼寝してた本音さんがガチギレして『ぶちのめすぞ変なノースリーブ野郎』って怒鳴られてたよね？」  
「あつたわねそんな事…キツネの着ぐるみパジャマ姿で秋十の顔面目掛けてシャイニング・ウィザードしてっけ…。」

「ああ、鈴も現場見てたんだ…あの後ダーリンが脳震盪で倒れて2日ほど意識戻らなかつたんだよね。」

「……さーと、Switch何処にしまったかなあ〜。」

あ、逃げたよこの弟…。

「じゃあその間に…スマブラをやらせてもらおう御礼に…というわけじゃないが私もゲームを持ってきたんだ。」

　　といってラウラが取り出したのはバルバロッサって名前の粘土をコネてそれが何なのか当てるボードゲーム…らしい。

「スマブラやるまで時間掛かりそうだからこれで時間を潰そう。」

「ラウラさん？それだとスマブラの起動準備する俺が仲間はずれなんだけど…。」

「いいな、このゲームのルールなら誰でも簡単に遊べそうだ。」

「篠ノ之さん？俺の事無視して話進めようとしてませんかね？」

「それじゃあラウラにルール教えて貰いながら遊びましょっか、習うより慣れろって言うし。」

「鳳さん？無視されると俺泣いちやうぞ、俺泣いたら湯b…姉ちゃんきちやうぞっ。」

「今の発言千冬姉にLINEしておいたからな。」

「そんな殺生な兄貴!？」

「よし、私が最初に粘土を完成させたから私から始めるとしよう。」

「得点を手に入れるにはみんなの作った粘土が何なのか当てればいいんだよね?」

「その通りだシャルロット…この場合は…鈴が私に質問する事ができるな。」

「じゃあ早速質問させて貰うわね?…これは生き物?」

「そうかもしれないな。」

「これは自然界にあるもの?」

「そうだな。」

「これは特定の生き物?」

「違うな。…『違います』の返事が出たらもう一度質問するか回答ができる、質問して違うと言われたらそこで試合終了ですよ?」

「なんでアンザイ先生になったのよ……じゃあ答えるわよ……。」

「それh 「終わったからスマブラできるよ？」

鈴が答える直前で……タイミング悪いな秋十……。

「……………これはキノコ……かしら？」

「.NO」

「は??」「は??」「は??」「は??」

「The Answer is ……」



「おっばい。」

「(・8・)( )」(・8・)( )」

「( )」(・8・)( )」(・8・)( )」

「うわビックリした!?!なんでみんないきなり激しくデンプシーロールしながらパンツァーフリート歌い出すんだよ!?!」

「まあバズってたから真似してみたかったし……。」

「秋十は秋十で何言ってるかお兄ちゃんわからないんだけど……。」

私の名前は居村望……前はMと名乗っていたがその名は捨てた……全く、あの第2回モンド・グロツソの日、オータムの馬鹿がしくじったと聞いて助けに行こうとスコールから預かった戦闘員達と奪ったラファール・リヴァイヴに乗って現場に向かおうとすれば道中で待ち構えていた織斑千冬に一撃で全員撃墜されるわ、落下途中でラファール乗り捨てて路地裏に落ちてみればシールドエネルギーが切れても往生際悪く抵抗しようとした戦闘員の小型ミサイル乱射の巻き添え喰らうわ、気がついたら病院で現場で爆発に巻き込まれた観光客と勘違いされて危うく日本大使館に連行されかけるわ、ISもパスポートも無いから2ヶ月かけて陸路でアジトに戻る羽目になるわ、戻ったら戻ったで組織は既に壊滅してるわ、組織無くなったからストリートチルドレン生活強いられるわ……本当に散々な目にあった……。

適当な奴から財布をひったくろうとしたら相手が運良くスコールで、スコールが警察の目を掻い潜るために潜伏してるIS委員会に入ってもらえて……そしたら織斑千冬の弟の片割れのグラサンの方と出会って……私の正体を知れば似たような目標を持つてるからとか同情してくれて私に織斑千冬を倒す機会を与えてくれて……そこ

までは良かったんだ。

やたら威力の高いバズーカを装備したISで織斑千冬を文字通り吹き飛ばす事に成功したが……。

「うう……まだ背中が痛む……。」

まさかバズーカの中で精製される荷電粒子の排熱がろくにできなくてISがファリスの牡牛状態になるとかあのグラサンノースリーブ馬鹿じゃないのか？ ナノマシンのお陰で火傷跡は一切できなかったが死ぬかと思ったぞ……絶対防御貫通する熱量とか殺す気かないだろ……パイロットも敵も。

まあいい、退院した織斑千冬にあのグラサンからくすねた予備のIS……ツダ初号機とやらでもう一度確実にぶちのめしてやる……モンド・グロツソから色々あり過ぎて何で織斑千冬を憎んでるのかももう覚えていないが一発痛い喰らわせて全て終わりにして……あのグラサンから慰謝料分捕って人生をやり直そう……パン屋を始めるんだ……。



主人公に勝てなくても嵐の中で輝いたオリ主

秋十がシャルロットに出会う少し前：

「お邪魔します。」

「おう！ゆっくりしてけ。」

俺の名前は五反田弾、絶賛彼女募集中のピカピカの高校生だ。

それで目の前にいるイケメン双子が兄の織斑一夏と織斑秋十：俺の中学からの友達だな：誰に説明してるんだろ俺。

「いやあ弾くん、久しぶり！相変わらず彼女できない顔してんね。」

「うるせー、そういう秋十はどうなんだよ？」

「ほら：俺は打倒兄貴に集中してるし？それに俺の理想はパリジェンヌだし？べっつにー：まだ恋愛に現を抜かす時期じゃないし？」

そう言えば秋十はパツキン：パリジェンヌが好きとか言ってたな：一度もそんな相手に会ったこと無いくせに。

とうるか相変わらずのグラサンノースリーブだな：中学の頃も学ランとジャージの袖を引きちぎってたし、そのせいで「イケメンだけどファッションセンス無い人」みたいな評価で兄の一夏と比べて秋十はそんなにモテて無かったなあ：まああん時は俺がナンパに誘うまで本当に一夏一筋だった所も本当にあるけどな。

「まあ一夏の方h」

「弾くん？」

「あ、す…すまねえ…。」

「ん？どうしたんだよ？」

「え？ああ！いや！なんでもねえよ！！」

やつべ、危うくまた一夏の事茶化し過ぎて秋十にキレられる所だった…：一夏のやつ…：ISのせいで女尊男卑社会になったのと千冬さんが有名になりまくって女子のファンクラブがあちこちにできたのもあって『自分に告白してくる女子はみんな俺じゃなくて織斑千冬を見てるだけなんじゃないか…：織斑一夏を見てくれる人はいないんじゃないか。』とか思い込んで無意識に恋愛事に気づかないフリしてる…：…って秋十が言ってたからな。

「何でも無くないだろ？…：そう言えば弾、お前最近俺に唐変木とか言わなくなったよな？」

「え？ああ…：まあ一夏には一夏のペースつてもんがあるだろうし！な？」

「それより兄貴。ISバーサススカイの新作で遊ぼうよ？DLCでセシリアさんと凰さんの機体が使えらしいよ？」

「お！本当か？俺、鈴の甲龍使ってみたいな。」

「え？俺どつちも高いからダウンロードして無いけど…。」

「えー…：なら買ってよ弾くん。」

「いやいや、秋十…弾に無理強いさせようとすんなって…別にDLC無くても充分面白いし。」

「ん…お、兄貴！『DLC全部購入するとキャンペーンモードに特別ミッション追加！クリアーするとプレイキャラに『織斑千冬・暮桜改』が使用可能になります。』だつてさ。」

「いやいや、いくら千冬さん大好きな一夏でも…。」

「買え。」

「えっ?。」

うわびつくりした…一夏がいきなり千冬さんみたいな表情でヴィラン連合仕切つてそんな声出してきたぞ…。

「か… 買えと言われても、自腹は切れません…。」

「PlayStation storeの残高があるではないか… 買え。」

「ぶ、PlayStation store…!?身に覚えが…つてそれ妹のアカウントですよオオオオオ!!」

というか蘭…アイツ勝手に俺のプレステでアカウント作るなや!!

「関係ない 買え。」

「は… 面白いイイイイイイ〜!!」

「おかしい!!完全に背後を取ったのにあんな理不尽な反応速度で斬り伏せてくるだなんてこっちをなんだと思ってるんだ!!!」

「死角を狙えば見えてるかの様に避けるしこっちは見失った途端に一撃で倒されて…ふざけてるのかこのゲームは!!」

「あ、あの…先輩?それ敵キャラ現役時代の織斑先輩ですよ?」



「黙ってる山田くん!!くそ!後ろにも目を付けてるってのかよ!!」

「あの…ちーちゃん? 独身女三人集まってする事が酒飲みながら格ゲーって悲しくならないの?」

「お前が持ってきたゲームだろうが!! そうやって脇から見てるだけで!人を弄んでばかりで…っ!」

「ちーちゃん!? アスランじゃなかった錯乱しないで!」

「現実なら上手くできるのに…!! 理不尽を押し付けて楽しいのか!? 答えろ束ツツ!!」

「凡人共は現実の方が上手いかなってんだよ!!」

「現実で世界最強ともなると現実とゲームは違うってセリフがこうも違う意味で伝わるものなんですかね…。」

「束え!! コントローラーにイメージ・インターフェイスを搭載しろ!! この仏頂面女を倒すまで絶対このゲームやめないからな!!」

「ISの技術をゲーム攻略に使うんじゃないか!? あとその仏頂面女はゲームのお前だよ!」

「あの…このマンション、壁が薄いので余り叫ばないで欲しいんですけど…:…:とか織斑先輩も篠ノ之博士も何で私の部屋に遊びに来たんですか…:特に宅飲みの約束とかしてないのに。」



「一夏さんと秋十さんが来てるってお父さんから聞いたけど……お兄がなんか気持ち悪くて部屋に入れない……。なんでお兄は泣きながら高笑いしてるんだろ……。まあいいや、お兄が落ち着いたら私も混ぜてもらって、欲しかったフロムゲー買って一夏さんと遊ぼうかな♪」

「あのね兄貴……やっぱり弾くんに謝ろうよ……。流石にアレは悪いって……。」

「お前だってDLCの山田先生とか二代目ブリュンヒルデとかめっちゃ欲しいがってただろ？」

「……………まあ、後半辺りは俺がゴネる弾くんからコントローラー取

り上げて爆買したのは否定できないけど…。」

「夏さーん!♡どうかしたんですか?」

「い、いいえ!!なんでもありません!!」

「そっか、じゃあお兄をシメるまでもう少し待っててくださいね♡」

「はーはい!!」

「しかしここに来るのも久しぶりだな…。鈴は逆に常連客何だな?」

「そうね…そういうえば筈って五反田食堂でご飯食べた事無いわよね?」

「ああ、深い理由は無いんだが…そういうタイミングに限って腹が空いてなかったからな。飲食店で何も頼まずに居座るなど言語道断だ。」

「なら今日は奢ってあげるから食べてきなさいよ。五反田食堂で食事した事無いなんて人生の半分損してるわよ?」

「ほう…鈴の（日本の）実家の中華料理店で鍛えられた私の舌を満足させられるかどうか…試してやろう!!」

「何言ってるのよ……。」

休みの日に偶然を装って一夏に会いに来ようとしたが、留守だったし神社に帰る途中に、娘のIS学園転入に合わせて日本に戻ってきた鈴の御両親に捕まって家に連れ込まれては『鈴ちゃんと遊んであげてね?』とか言われて鈴と2人で外に出されて……ドアが閉まると同時に男女の艶かしい声が聞こえてくるとか鈴の御両親はどれだけお盛んなんだ……『大丈夫、聞こえないわよ』……って丸聞こえしてたからな…鈴の気まずそうな顔が未だに頭から離れん……一夏を想うもの同士集まってガールズトークにでも花を咲かせようと鈴の提案で五反田食堂に来た訳だが。

ちなみに蘭は中学時代に弾を通して知り合った…一目見て一夏を巡るライバルだと気づいた私と鈴はその日のうちに仲良くなつて2人で色々可愛がってやったもんだなあ…。

「いでででで!? 本当だつて! 本当に一夏が…! アルゼンチンバックブリーカーやめてくれえ!!」

「一夏さんがそんな事する訳無いでしょ!! 変な嘘着くなお兄!!」

「いや、蘭…本当に俺が全部悪くて……あの? 蘭さん?」

なんだこの状況…弾が蘭にプロレス技決められてる…え?どういう事だ?

「どうしたのよ蘭…弾が何かやらかしたの?」

「あつ!鈴さん!それに箒さんも!聞いてくださいよ!!お兄が私のお金で勝手にISバーサススカイのDLCを爆買したんですよ!!」

「いや、だ、だから一夏が…。」

「嘘付け!秋十さんが…『兄貴が…ヒエ…だ、だだ弾くんが!』うおおおおお!千冬さんの下乳うおおお!」とか言いながらやりました!!』って一夏さんに後ろからあすなる抱ききれながら証言してたのわすれてないからね!」

「いや、秋十…一夏に首絞められて脅さr」

「篠ノ之流アルゼンチンバックブリーカー!!」

「ぐおおあああつ!!??」

「勝手に私の実家をプロレス道場にするんじゃない!?」

「流石は蘭…私と箒に鍛えられただけはあるわね。」

いや、確かに蘭に武道を教えたが痴漢撃退に簡単な奴を教えたただけだぞ…こんな大の男を持ち上げてグルングルン回るような鍛え方絶対してないぞ…。

「本当にすいませんでした…。」

なんかヒソヒソ話していたのは聞こえていたから秋十に篠ノ之流尋問術『夜斬之玉津神』……まあ『縮んどるぞー！しっかりせい!!』と言いながら握り締めるだけの技なのだが…まあ秋十の玉を掴んで質問してみれば一夏が珍しく暴走したというわけか…一夏ってこんな事する奴では無いと思っていたが……私が想像していた以上に千冬さん大好きっ子だったのかもしれない。

尋問が終わり床に正座する織斑兄弟へ鈴がジト目で見下ろしながら私に続いて口を開く。

「つたく、いくら弾でも濡れ衣着せるなんてやっていい事と悪い事考えなさいよアホ兄弟。」

「秋十ならともかく…一夏！お前がこんな真似をするなんて幼なじみとして情けないぞー！」

本当に他人に迷惑かけるボケは姉さんか秋十だけにしてくれ…まあ2人ともそこまで暴走した事は…ダメだ、片や無人機を学園に落として暴走させて、片や夢の国にシユールストレミングばら撒く極

悪人若干2名とか擁護できなさすぎる。

「篠ノ之さんが地味に嵐さんと蘭ちゃんにマウント取ってる…。」

「でもよお箒…千冬姉だぞ?。」

「だったら自分のアカウントで買えばいいだろう!!全く…見る!!弾がバックブリーカーされ過ぎて腰が曲がったまま戻らないぞ!。」

「ちようど3時と4時の中間くらい曲がっちゃったよ…。」

ギャグマンガ日和に出てくるグラ郎みたいになってる赤髪チャラ男なんて何処にニーズがあるんだ…。

「まあまあ箒さん、一夏さんも悪気があった訳じゃ無いんですから…。」

「悪意無しで他人のアカウントの金使い込む方がヤベー奴だと思うんだけど…。」

鈴の言う通り一夏もやばいかもしれんが人体の骨格を無視した曲がり方してる兄に無反応の蘭はもっとやばいんじゃないだろうか…。



「もういい!!画面から出てこい!!ブリュンヒルデを教えてやるツツツ!!!」

「落ち着いてちーちゃん!?たかがゲームだよ!?おい!3LDKで物干し竿振り回しちやダメだって!!」

「せめて洗濯物外してください!?さつきから私の勝負下着がばら撒かれます!!!」

「と、まあ逆からバックブリーカーすれば元通りというわけです。」

「大丈夫？ 弾の腰が使い古したガンプラ並にヘタレてない？」

「大丈夫だ一夏、ちよくちよくバックブリって慣れてるから。それに身体柔らかい男って……なんかモテそうだろう？」

「弾……腰だけ首の座ってない赤ちゃんみたいになってる男は正直ナシだと思っぞぞ？」

「私も箒に賛成。」

「私も腰がグワングワンしてるお兄は無いかな……。」

やった本人すら否定するのは酷くないだろうか……とりあえず一夏にはお仕置として……アレだな、私がしばらく学園の剣道場で付きっきりで根性を鍛え治してやる必要があるな、うん。

決して鈴やセシリアに抜け駆けして一夏との時間を過ごしてやろうとかそんなの無いからな？

そう思っていると鈴から死刑宣告が放たれた。

「とりあえず全部千冬さんにチクつとくわね。」

「えっ……。」

「兄貴ごまあ。」

「言い出しつぺは秋十ってしっかり伝えとくから。」

「えっ……。」

多分…今の織斑兄弟ほど『絶望』の似合う顔をしてる男はいないだろうな。

「はい……揉み合いになって……そこからズブリといきました……今思えば私はゲームごときに熱くなって……とんでもない事をしたと思っています。」

「先輩！私は刑事さんじゃありませんよ！？現実逃避してないで抜くの手伝ってください！！」

「は…破城槌みたいに押し込みやがった…た、東さんじゃなきや死んでるよお…っ」

「むしろこんなに啞えこんで生きてるんですか篠ノ之博士…。」

主人公に勝てなくても挑戦するのがオリ主

前回より数日後

「弾、バカな愚弟共が済まなかった。」

「い、いや頭を上げてください千冬さん！俺は別に気にしてませんから！とりあえず店先で土下座はやめてください！」

親父から千冬さんが呼んでるって言われて店前に出てみればそこにはコクピット吐き出した後のサザビー並にズタボロにされた一夏とフィギュアに出てた本編で見覚えの無いボロボロのリガンダム並にギツタンギツタンにボコられて正座してる秋十、そして土下座する千冬さんの姿があった……爽やかな朝には見たくない光景だなあ。

233

「とりあえずはコレを受け取ってくれ。」

「ええ!?そんな、悪いですよ……こんな分厚い封筒……」

「心配するな、金ならそのI.S委員会所属のグラサンノースリーブの財布から出した……謝罪の気持ちというやつだ。」

「そんな……こんなに……」

身体を起こした千冬さんが懐から分厚い何かが入った茶封筒を渡してきた……え？いいの？こんなの受け取っていいのか俺………つてあれ？この封筒の中身………。

「ゲーム……カセット?」

「MOTHER 1&2とMOTHER 3のカセットだ。心配するな、ちやんとゲームとして動くし全クリまでちやんと進められたぞ。」

「本当に気持ちじゃないですか……しかも一通りゲームクリアし終わってから渡すって完全に友達に要らないゲームあげるノリですよね?」

「だがMOTHERは不朽の名作だぞ?」

「まあそうですけども……。」

「あとこれは一夏にあげる予定だったお年玉だったんだが……。」

「ちよ!?そんなの頂けませんって!一夏に渡してやってくださいよ!!」

「いや、謝罪は受け取ってもらおう。」

「いやそんな申し訳な……ってこれゲームミク○じゃねえか!?なんすか!?これでMOTHERシリーズやれてるか!!普通に画面の大きいゲームボーイアドバンス○の方を使うわ!!」

「金を渡すとしても受け取るべきなのは蘭の方だからな。」

それは確かに……。

千冬さんが帰った後、妙に申し訳無さそうにしてた蘭が昨日のバツクブリーカーのお詫びとして俺に焼肉を奢ってくれた。

チラッと見たら蘭の財布がグッチだったよ。

…え？俺の出番もう終わりなの？

「それで…一夏と秋十は仲良く千冬さんの篠ノ之流ZZパイロドライブを시켰たま食らったせいで寝込んで欠席ってわけなのね。」

「鈴…私の実家はプロレスなんか教えてないしZZガンダムは劇中でパイロドライブなんかしない。」

時は現在

「はいダーリン…あーん♡」

「あーむ…：美味しい！クレープもそうだけどハニーの愛情が伝わって2倍美味しい!!」

「カップル仲睦まじいのはいい事だな。」

しかしアレだな…クラリツサは「バカップルのそばに居ると口から砂糖が出る怪奇現象が起きる」とか言っていたが微笑ましいだけで特に何も無かったな…まあクラリツサは日本に行ったことなんて殆ど無いらしいから嘘は言ってはいいのだろうな、情報が正確では無いだけで。

入学直後も「親しくなりたい異性に対しては『俺の嫁だ』と宣言する風習があります。」とか言ってたから一夏と秋十に『私の嫁になってくれ』と満面の笑みで頼んだら箒とセシリアに何故か怒られたし…クラリツサに聞く前に自分で調べてみる癖を付けた方がいいかもしれないな…：いや、インターネットは嘘ばかりってネットに書いてあったしやはりクラリツサの情報も蔑ろにする訳にはいかないか？

「いやあ、ボーデヴィツヒさんがたまたまクレープ屋さん立ち寄ってくれたお陰で助かったよ。まさかミックスベリーのクレープの正体が2つのクレープを2人で食べさせ合いっこする…なんて思いも寄らなかつたな。」



「まあ食べさせ合いつこなんて僕とダーリンは2人でご飯食べる時  
いっつもやってるからね…。ありがとうラウラ。」

「私が教える前に既に口移しで食べさせ合いつこしてたから私は実質  
何もしていないんだが…。まあ感謝は受け取るとしよう。ツナマヨ  
クレープ奢って貰えたしな。」

「つて、そうじゃない!!!」

急に秋十が立ち上がりながら叫ぶ、どうしたんだ？公共の場で口移  
しするのはマナーが宜しくないことに気づいてくれたのか？

「夏休みに入ってから…。いやーハニーとイチヤイチャしまくるようにな  
っててから…。俺、兄貴と勝負してねえじゃねえか!!」

「あ、言われてみればダーリン夏休み中はIS作ったり入院したりセ  
シリアの専用機ボロクソに言ったり…。一夏と勝負してないね。」

そう言えばそんな事してたな秋十、普通に忘れてた。

「よし、今すぐ兄貴を倒す為のガチ機体を作ってくる!!」

「え？ダーリン！僕とのデートは!？」

言うが早いか秋十は凄い勢いで走り出し…タクシーを拾って帰っ  
て行った。え？シャル置き去りにしちゃうのか？

「だ、ダーリン……。。」

「……。なあ、シャル…私と一緒にゲーセンでダンレボするか？」

「……………する。」

「つーくるん♪♪つくるん♪♪インフィニット・ストラトスつくるん  
♪♪条約なんかしらねえん♪♪バレたら逮捕ん♪♪（んごー）」

「あいつはオルコット♪（んごー）」

「あつきー？なんで今向こうの渡り廊下歩いてたセツシー指さしてたの？」

「いや、語呂が良かったから…。手伝ってくれてありがとね、のほほんさん。」

「そっか…。どういたしましてあつきー、でも今度お菓子ご馳走してね？」

「もちろん！約束通り美味しいチョコケーキ食べさせてあげる。」

「やったぜ。」

「さーてと…コイツで兄貴と勝負してくるか。」

結果から言えば秋十は敗北した。

久しぶりに俺に挑戦してきた秋十は「テンペスタ・スクランブル」という空戦特化形の機体で戦いに挑んだ。

この機体はテンペスタの右腕を丸ごと大型の荷電粒子砲に取り替え左腕は肩部に最高速度の赤椿を補足できる大型レドーム、腕部に牽

制用マシンキャノンと両腕共にマニピュレーターを完全に排除して高性能な武装に転換、脚部には散布式ミサイルポッド、腰にはビームガン、背部には可変式ウイングに強化型のブースターを装備し飛行形態に変形すると頭部をすっぽり覆いグライダーのようになる……某ガンダム種のデインみたいなアレだな。

実際こいつは可変ウイングによる揚力だけで空中飛行を行い、P I C等は武装を使用する際の姿勢制御のみに使うことで飛行しながら無茶な機動で射撃を行っても反動によってバランスを崩す事がなかった。戦闘機のように飛び回って一撃離脱戦法を行う、強力な武装を大量に装備しばらまくように弾幕を張ることで敵を近づけないようにするコンセプトらしく接近戦は一切対応できなくなっている、強いてあげれば某ジ・Oみたく腰のスカートアーマーに隠し腕がありそこからエネルギー・ブレードを展開し振り回す程度ならできそう……その前に零落白夜で装甲諸共切り落としちゃったけど。

試合は徹底して俺から距離を取り弾幕を張りながらアリーナの外周を飛び回る秋十に向けて俺はアイツが作ってくれた白式用のライフル型荷電粒子砲を撃つも元々接近戦に持ち込まなければラウラやシャル相手にも大立ち回りできる(逆に1度でも接近されてペースを乱されると誰が相手でも確実に負けるんだけどな)秋十には素人の射撃など軽々と避けていく、あつという間に撃ち尽くした俺は外付け武器の腕部2連機関銃を乱射しながら先回りをするように接近、秋十は射線から逃れようとバレルロールしながら向きを変えて俺から離れようとするが瞬間加速で雪片を叩き込むが右腕の大型荷電粒子砲の砲身で受け止められ秋十もその場で瞬間加速を行いゼロ距離で体当たりして俺を弾き飛ばした。

大型荷電粒子砲はデカすぎる余り飛行形態を取っている間は真正面にしか砲口を向けられない。腰のビームガンも腰の付け根を軸に縦にしか動かせないので後方は真後ろしか撃てないだろう。左腕のマシンキャノンはI Sが人型兵器で有る以上はうつ伏せの秋十から

見て右後方それも斜め上に狙いは付けられない。

だからこそ俺は轢き逃げしてまた距離を取ろうとする秋十の背後、マシンキャノンとビームガンの死角を陣取って後を追う、ミサイルをばら蒔いて引き剥がそうとするが白式の推進力に任せて直撃する前に振り切る、ミサイルは通り過ぎた俺を追いかけようとして互いにぶつかり誘爆し更にその爆風で他のミサイルまで吹き飛ばされる。

ミサイルを撃ち尽くした秋十は機体をクルリと回転させ背面飛行する事でマシンキャノンを俺に向けようとするが：なんてことは無い俺も移動してまた死角へと逃げ込む、意地でも秋十の得意なドッグファイトには持ち込ませない、その代わり俺も腕部の機関銃は使わず互いに攻撃を行うことなく追いかけてつこうが続く。

痺れを切らせた秋十が飛行形態を時ながらスラスタの推進で強引に俺の方を向いて大型荷電粒子砲を向けた、追いかけてこの最中にチャージしていたのか既に発射準備は完了していた。

砲口から吐き出された光を擦れ違うように避けて零落白夜を発動させて振り上げながら秋十へ急接近を仕掛ける。

それを読んでいた秋十は撃ち尽くしたフリをしていたのか腰のビームガンを俺に向ける、相手の隙を突いて接近し零落白夜を叩き込む：白式の必勝パターンなどお見通しなんだろう。

だからこそ俺は雪片を放り捨てるように両手を離しながら両腕を秋十へ向けて腕部の機関銃と単発式グレネードを秋十のビームガンと左腕のマシンキャノンへありったけ撃ち込みながら白式のスラスターを出力最大で噴かして秋十から距離をとる、千冬姉から受け継いだ雪片を捨てた俺に虚をつかれたのか秋十は俺の攻撃をまともにくらいビームガンは銃弾の雨に銃身をひしゃげさせマシンキャノンの弾倉へグレネードが直撃しどちらも小さく誘爆を起こす、慌てて無事な荷電粒子砲の再充填を行う秋十：一撃で決めるつもりだったのか最大出力を放った巨砲は排熱が間に合わない。

俺は雪片を展開し直して正面から秋十を切り伏せる事で勝利した。

「ありがとな兄貴！んじやまた後で!!」

「なんだと！やーいお前の……………あれ？」

「おいそれはどつちもクラリネツサの……………ん？」

「はあ……………改築の済んだ実家の二階のベランダに腰掛けて飲むコーヒーはいつもより美味しい…。」

「た、東様！そんな所でコーヒーブレイクなんて危ないです！それ完全にフラグです!!」

「はっはっはっ！大丈夫大丈夫、東さんちーちゃん並に運動神経あるから落ちないし…それに今日は何も悪い事してないからお尻の心配しなくていいしね。」

「で、ですが東さま…。」

「んもー…くーちゃんは心配性だなあ…誰かが庭で棒状のものを振り回してるなら兎も角…ベランダから落ちても庭に背中を軽く打つだけだから心配ないよ…ほら、庭の隅っこで盆栽眺めてる東さんの父親を名乗る生命体から剣道でも教えて貰えば？」

「東さま…彼氏も結婚もできないから見せてやれない孫代わりに私を柳韻お祖父様と遊ばせてやろうという子心って奴が何処と無く溢れt」

「ぶふおっ?!…はー!?一向にそんな親孝行とか考えてませんけどー？天災たる東さんの仮にも遺伝子の繋がった男がボケないようにくーちゃんに相手させるだけですけどー!」

「ふふっ…ではそういう事にしておきます。」

「…………と、言う事がありましたて…………せいっ！」

「そうなのか…………しかし、ISを作って夢の為に家を出た娘がこんな可愛い孫を連れて帰ってくるなんて思わなかったなあ……。」

「いえ、私は束さまに命を救われた恩返しがしたくて仕えさせて頂いてるだけで家族では……。」

「いやいや、束が言っていたよ。『可愛い娘を見つけたから自分の子供にする』…………てね。」

「束さま…………っ。」

「クロエちゃん、素振りが止まっているよっ？」

「あっ！はい…………せいっ…………やあっ…………せいんとせいやつ！」

「最後の掛け声はやめようか。」



「悔しいけど正解。……孫代わりじゃないよ、クーちゃん…東さんに  
とってクーちゃんは可愛い可愛い東さんの……って熱い!? コーヒー  
零し…うわ?! おちおちおち!? ベランダから…落ちる落ちる落ちいっ  
…。」

『誰かが庭で棒状のものを振り回してるなら兎も角…』

『今日は何も悪い事してないからお尻の心配しなくていいしね』

あつ…。

番外編、IS二次創作の主人公に勝てないオリ主に憑依してしまった…

『IS世界に転生したいと言ったからチートスペックのオリ主にしてあげました。』

間違いない……IS学生服の白と赤のカラーを逆転させたノースリーブ、そして某フワトロ・ヴァギー○大尉そっくりなグラサン……いつ……いや……俺は……。

「お、織斑秋十になっちまったのか!」

「急にどうした秋十?お前は元から秋十だろ?」

俺は何処にでもいる休み時間は寝たフリして過ごすタイプの中学生……ただ人と少し違う所を挙げるとすれば……IS世界に転生して一夏をボツコボコにしてハーレムを作りたいてって所かな。

まさか夜中ハーメ○ンのIS二次オリ主作品を読みながら、もしも自分が転生者なら読んでる作品のオリ主よりもっとカツコよく立ち回ってヒロインを惚れさせるシミュレーションをして……目が覚めたらグラサンノースリーブで教室のド真ん中であの唐変木の隣に立っていた…。

え?どういう状況なんだこれ!?

「あの?急に叫ばれてどうかなされたのですか?」

声がして振り返ればそこには心配そうにこっちを見る金髪英国チヨロイン……セシリア・オルコットがそこにいた……あれ?コイツってたしか過去編で一言喋っただけでIS学園入学辺りからセリフが1

「回も出てこない筈じゃ…？」

「大丈夫か秋十？まあ目立ちたがり屋なお前がクラス代表立候補したい気持ちは分かるけど…緊張してるなら無理しなくていいんだぞ？」

「え？あ！いや、大丈夫だ！一夏は引っ込んでろ!!俺がセシリアを倒して日本を馬鹿にした事を後悔させてやる!!」

「(秋十って他人を呼び捨てするやつだったっけ…?)」

「(日本の事馬鹿にした覚えは全くありませんけど…) まあいいですわ…：織斑先生、彼はISによる模擬戦でクラス代表を決めたいようですが…：どうでしょう？無論わたくしも賛成です。」

「(グラサンで一夏とオルコットから見えていないが…：私の弟ってこんなガッツリ英国代表候補生のパイオツをガン見するような奴だったかな…：) …：分かった、では立候補者3名によるIS試合の総当たり戦を行い、勝者をクラス代表に任命しよう…：アーリーナの使用申請をするから試合の日程は追って説明する。以上！」

「「は…」」

「では秋十くん……こちらが君のISコア、そしてこの打鉄とラファールが君が自由に使っていい機体よ。普段はその2機を使って、委員会から指令が下った時は送られてきた機体を使う事、但し改修等は自由に行ってくれても構わないわ……勿論、結果を出してくればだけど。」

「ありがとうございます！スコア……じゃなかった！えーっと……IS委員会の……偉い人の……。ナーバス原尾さん！」

この人たしか原作開始前に束さんに潰された亡国企業のスコールなんだよな……偽名なんだっけ？一夏が催眠ハーレムにボロクソにされるやつとか、強キヤラが一夏に惚れまくりなやつとか、一夏を倒せないやつとか、一夏が顔文字でしょんぼりするやつとか面白い作品なら大体読んでるけど……一夏に勝てなくても幸せになるのは別に読み込んでる訳じゃないからなあ……。

「……今朝名乗ったばかりだけど、私はルーコス平野よ。（今この子私の本来の名前の方言おうとしてたわよね……）」

「さてと……とりあえずこのISを改造するとしますか……。なんか憑依モノ特有ご都合設定で俺の頭の中には秋十のIS知識があるつぽ

いし：記憶とかはちよつとあやふやだけだな。…へっへっ俺だけの最強機体を作つて一夏をボコボコにして、チヨロコツトを俺の嫁ラウラちゃんが来るまでの愛人にしてやるぜ。」

えーと、たしか秋十はISの破損した部品とかのジャンクパーツを集めて作つてたんだっけ…：そうとなれば早速集めまくつてやるぜ！  
グラハムガンダ〇とか作つてやるよ！

「はあ？破損したパーツ…？ある訳ないだろ、一学期2日目で機体を壊すような奴がいたら私が一発痛いデコピン食らわしてる所だ。…：何？…『出席簿で殴らないのか？』だど？…：ほう…：秋十、お前は自分の姉が教育的指導とかほざいて生徒を道具で殴る阿呆に見えるのか…：そうか…：私…：そう…：見えるのか…：。」

「ち、千冬姉!!ほ、ほら！千冬姉つて体育会系っぽく見えちゃうから…別に誰も千冬姉を暴力教師なんて思つてないって！秋十もちよつとした冗談で言つたんだよ！ほら！涙拭いてくれよ千冬姉!!」

「はあ？…ブルー・ティアーズのビット？入学早々から壊すわけありませんわ…そもそもこれから戦う相手になんで国家機密であるISの…しかも第三世代兵装のビットを貴方に渡さなくてはならないのかしら？例え破損したとしてもお断りですわ。」

「ん〜…ごめんね？お姉さんとしては面白そうだから手を貸して上げたいけど生徒会長としては生徒一人に肩入れするわけにはいかないのよね。…あ、そうだ！整備科の生徒に知り合いがいるからその子に聞いてみたら？」

「よっしやあ!!あざあつす!!」

と、言うわけで集まったこのISの廃品パーツの山…ほんとにIS一機作れそうな量だな。

……え？このスクラップ工場に幾らでもありそうな錆だらけで油でギトギトの部品から使えそうな取り出してそこから作りたいISに必要なの取り出すの？

たしか原作だと今日から一週間後に試合…それまでに完成させてるって言うのか…？

完成させた上で乗りこなせと？練習する時間とかあるの…？

織斑秋十……あいつ週一ペースでIS作ってたらしいけどいつ練習してたんだよ…ひよっとして完成したら即出撃してたの？そりや毎日研鑽してる一夏に負けるわ。

「まあ、待て待て…今は俺が織斑秋十なんだ。何処ぞの壺と紫ババア大好きおじさんに憑依したあの人みたいに上手くやれるはず…！」

とりあえずグラムガンダムは諦めよう。

「これは使える…これは駄目…これは…アウト…！圧倒的アウト…！」

まず作りたいISの設計…！必要な部品や機材を割り出して…！リストとにらめっこしながらジャンクパーツを一つ一つ条件に当てはまるものを引つ張り出す…！そこからパーツを点検して使える物を選出して…！こびり付いた廃油と埃を取り除いて…！

「これ…どっちもプラグがメスじゃないか…！…！このパーツはデユノア社製品しか使えない…！…！こっちはサイズが大き過ぎて他の部品に干渉するから組み込めない…！…！こんな杜撰な設計でISを改造しろってのか…！」

IS本体から改造しなくちゃいけない部分を分解…！装甲をひっぺがして…中のパーツを取り替え…付け足す…！接続部分は基本的に合わないから一つ一つ付け替え…！打鉄の規格に合わせる…！あと根本的に大きさが合わないパーツは選び直し…！…！



「改造して形が変わった分装甲を新規造形……今からでも間に合うか……  
板金屋……！足りるのか……！9万円コース……！」

装甲も元の奴は使えないから作り直し……！別の機体のパーツに合わせてOSを書き直し……！デバッグして……動くまでやり直し……！

やることが……やる事が多い……！

ISを自作するオリ主……！凄……！こんな面倒臭い……！作業の連続……！  
普通に苦痛……！今まで……！メカニックキャラを活躍少ないと思っただけ……！  
……！そうだよ……！メカニックが頑張っ……！て機体を作っ……！て整備してるから……！  
……！パイロットが活躍できる性能を実現できるんだ……！……！知らなかった……！  
……！……！こんな……！当たり前のこと……！……！

「あれ……！……！秋十くん……！……！……！？」

くそ…やる事が多過ぎるんだよ！…これ全部1人でやるとか無理ゲーだよ…やるけどさあ!!

二次創作の気な奴でオリ主がIS自作するとかよく読んでたけど嘘つけよ！こんなのすぐ作れるわけねえだろ!!…ああそうだ、アイツらだいたい企業とか東さんとか味方に付けてたわ……ん？企業？そうだ！俺IS委員会所属じゃねえか！なら委員会から人を送って貰おう!!早速スーコル…じゃなくてラスカル美園さんに連絡だ！

「なら来週辺りに技術チームを送りますね、あと私はルーコス平野です。」

「なら間に合わないから要らないです。」

ダメだったわ…。

「はあ…人手が足りない…パーツも足りない…せめて束さんが居たらなあ…。」

「呼んだ？」

「そしたら…って本人!?!本物の篠ノ之束!?!」

「いえす! あいあむ! チツチツ」

両足を取っ払われたISに文字通りガラクタなジャンクパーツ、そして散乱した工具で散らかった整備室でボケくつと現実逃避していると横から束さんが現れた、めっちゃビビるわ。

「で、どしたのあつくくん? 入学前にISに塗装してシヤア専用ラファールとかランバ・ラル専用アラクネとかやってた人がいきなりIS改造に手を出しちゃって…塗装に慣れたとか言っついていきなりプラ板とかパテ買い込んで改造しようとして参考にした動画みたいにな手く作れなくて途方に暮れるガン普拉初心者みたいだよ?」

「まさにそんな感じですけど…。」

「(あれ? あつくん敬語使う子じゃなかったよね?) …手伝おうか?」

「え?! いいの!?!」

「あんまり良くないけど…東さん今暇なのと…それと実は最近、可愛い娘ができて凄いい機嫌が良いからね!」

「おっしや! 勝てるわ! この勝負勝てるぜ!!」

ニコニコ顔で助けの手を差し伸べてきたお尻ポツカリ兔の言葉に俺は高らかに腕を振り上げてガッツポーズを決めた、邪悪なドラえもんとは名高い東さんが居れば負ける気しねえぜ!!

「で、東さんにどうして欲しい? 今なら先着一名様に東さんお手製の第三世代機をプレゼントしちやおうかなあ。」

「マジで!?! 要ります要ります! 今すぐください!?!」

「……………そっか…はい。」

東さんがその場から一歩横に動くとも何も無かった筈の場所には異様に太い腕にビーム砲を肩と拳に装備した…本来ならもう少し後に登場する筈の無人機、ゴーレムがそこに居た。

「よっしや! コイツがあれば負ける気しねえぜ!!」

「あつくん…束さん、あつくんの事はそれなりに気に入ってたんだよね。どんだけ負けても諦めなくて、勝つ為にはどんな事も自分の力にしようと勉強して…努力っていうよりは…執念かな？勝ちたい、その一心で分野を問わずに色々な物事を調べてあちこち駆け回って、必要ならプライドも捨てて頭を下げて…なんか見るとISに打ち込む束さんもこんな風に見えるのかな…なんて思ってたさ。」

「おお！このビーム砲！スラスタもどれもこれも性能がすげえ!!」

「ISの事を教えるきっかけも……『かっこいいロボットを作って兄貴にプレゼントするじゃなくて俺が凄いやつって見せつけるんだよ！』とか言ってる……とにかくいつくんやちーちゃんに褒められて認めて欲しくて…って自己承認欲求が高かったね。」

「このOS…このデータは…！ISがこんなにも息吹を…っ！」

「いつまでたつても子供だし、自己承認欲求お化けだし、小心者な所があるのに凶々しくて、あと時々人の尻に爆竹挟もうとするクソガキな所があつて…そんなあつくんの事を気に入った理由…今も覚えてるよ。」

「…いつと…これに…あ、あとこれも…。」

「いつくんに剣道で負けた時、束さんがさつきみたいに…『いつくんに勝てるようにしてあげようか?』って……そしたらさ…『俺は自分の力で兄貴に勝ちたいの! 剣道は負けたけど今度は料理の腕で勝負してやる!』…つてさ。」

「このセンサー類もひとつまみ…。」

「師事を求めて頼る事はあつても結果そのものは自分の手で勝ち取るうとする、その為ならどんな難しい事も苦しい事もやろうとする…そんなあつくんが何だか妙に気に入って…。」

「よし! 後は設計図を手直しして…。」

「あの……あつくん？何してるの？」

「え？東さんのくれたISバラしてますけど？」

なんか後ろでごちゃごちゃ言ってたような気がするけどよく聞こえなかったなあ……しかしこのゴーレム……ホントにいい機体、分解が簡単だしパーツもユニバーサルデザインって言うか打鉄に組み込むのに必要な加工が打鉄側の端子やプラグを変えるだけとかさつきよりも作業が少なく済んでるし。

「え？……なんで……？普通にそれ乗ればいいじゃん？」

「え？いや……それだと俺じゃなくて機体用意した東さんが凄いつて話になるじゃないですか、俺は一夏に自分の力で勝ちたいの!!過程や方法なんぞどうでもいいけど結果だけは俺の力で勝ち取りたいの!分かります?」

『織斑秋十』がやってた事を俺ができないわけ無いんだからな!

まあ、できなくてもやるけどな!実現するまで諦めなきやオリ主に不可能なんかねえんだよ!

そう言ったら東さんがなんか妙に安心した顔になった……どうかしたのかな……?

「ああ、うん……そうだよね、ポンと渡された貰い物をそのまま使つて勝利なんか絶対認めない子だもんね……あつくんはいつも通り負けず嫌いで人の完成品のISバラバラにしてパーツがめるクソガキだったね。」

「え？なんで俺、ディスプレイられてんの？」

「メインスラスタ―はもう完全に固定しちゃっていいんじゃない？方向転換とかは胴体前後のスラスタ―とバーニアに任せちゃおうよ。」

「それだと機動性落ちるし…いや、ぶっちゃけそこまでの性能求めなくていいか…推力自体はあるから…。束さん、良かったらOSのデバッグ頼めます？」

「おっけー！まあ変な所あったらメモしとくから直すのは自分でやってね？」

そんなこんなで束さんに手伝って貰いながらISを組み立てていく…：やっぱりすぐえよ束さんは…背中からロボットアームめっちゃ生やして細かい作業とか秒単位でこなしてくし、使えるパーツと使えないパーツの選定も頭のウサ耳センサーで瞬時に分けていくし…。

「あ、あのー！秋十くん!!」



「え?」「お?」

そんなこんなで急ピッチながらISの完成を急いでたら不意に声を掛けられた。

振り向くとそこには…。

「あ、その水色の髪は…。」

「た、楯無簪さん?」

なんでアニメ二期登場の楯無簪がここにいるんですか?え?秋十つてシャルロット党じゃないの?

「あの…篠ノ之博士がいるから…ひよつとしたら邪魔かもしれないけど…えつと…わ、私にも手伝わせて!!」

「ええ!?!な、なんで?俺って簪さんに手助けして貰える程の事したっけ?」

「あの時…秋十くんが居なかったらマルチロックオンのデータも手に入らなかった…秋十くんがデータを用意しなかったら一夏もヒカルノさんも…私も…式式の事を諦めてたと思う…だからその恩返しをしたくて…っ!」

……困った、身に覚えがない。だって俺つい最近憑依したオリ主だもん。

「まああつくんから連絡来なかったら束さんもアプサラスの実機なんて用意しなかったかもしれないもんね。」

何それ知らない。

「ね、ねえ……いいかな……?」

「え……あ……お願いします。」

何が何だかよく分からんが……とにかくよs

「俺もいるぜ秋十!!千冬姉をナゲナゲして元気付けて遅れたけど弟が困ってるなら助けてやらなきや兄の立場が無いからな!」

「い、一夏!?!」

まさか主人公が助けに来てくれるなんて……!今までバカにしてごめんよ一夏……これからはTS一夏ちゃんて抜きます……!

「助けを求める者に手を差し伸べる……両親から教わったことですわ……私も手を貸してあげても良くってよ?」

「せ、セシリア!?!っていうか2人とも俺と戦うのにいいの!?!」

チヨロコツトまで……いや本当になんで?この子そんな事するキャラだっけ?

「もちろん試合に向けての特訓もやるさ……でも弟を見捨てる理由にはならないだろ?」

「勘違いしないでくださる?『ISが無くて試合できません。』なんて言わせないように逃げ道を潰すだけですわ。」

「さつきと言ってること違くないかセシリア?」

「シヤラップですわ、一夏さん。」

照れ隠しが下手すぎる…でも……ありがてえ……っ！ありがてえ……っ！

「ふっ、教師として手は貸せないが姉として見守ってやるくらいなら…。」

「よーし！皆で完成させるぞー！！」

「「「おーっ！」「」」

「えっ……おい？……今ここにブリュンヒルデが来たんだが……ちよつと扱いが雑でお姉ちゃんいっぱい寂しいんだが……秋十？」

結果から言えば秋十は爆散した。束さんのデカイ両腕にビーム砲を搭載したIS：ゴーレムと打鉄をニコイチした全身スラスターに有線ビットの両手からビーム砲を繰り出す秋十製ISの『ジ・Oング』は性能の高すぎるゴーレムのスラスターにIS学園の使い古しである打鉄のフレームが耐え切れず、スラスターの推力を出力最大にして出撃しようとした秋十を大爆発させてアリーナ上空で待つセシリアに質量ミサイルとして激突して2人とも気絶してしまい、なんか俺の不戦勝となっちゃった……ええ……（困惑）。

ちなみに束さんは『やっぱりリミッターケチったのは不味かったなあ……。』と呟くと全力疾走して何処かへと逃げて行った。

「リミッター壊れて爆散とかツダみてーなもん弟に渡すんじゃない!!」

「本当にごめんね!?でも1週間足らずでIS完成させるとなるとそれくらいの不具合は避けられないというか……あ!謝るからそのローション濡れのゴム手袋付けた拳を振りかぶるのやめて!?つーか束さんのお尻から手を離して!?束さん悪くn」

あふんっ

## 主人公に勝てなくても幸せへ進むオリ主

「これがA I S―E O 4：『エトワール・シユバリエ』：俺が設計しデュノア社技術研究部が形にした第三代機：以前作った『ドイツカーマン』の正式量産型って所かな。ドイツカーマンはI S学園を始めとした重要施設の警備防衛を目的とした実戦配備を想定した機体だからそれに見合った性能を引き出す為に高性能な部品や機器類を使ったせいで少数生産限定の高級機になっちまったが、こっちはあくまで量産前提の試合用の機体として過剰な性能を落としつつほぼラファール・リヴァイヴのフレームに多少付け足しを加えた程度で生産ラインを流用、ドイツカーマンの可変ウィングは高機動パッケージのオプションパーツにする事でオミットして整備性も向上、ドイツカーマンの時は3つあったジェネレーターは高出力の新型を一つだけにする事で開発コストも抑えられてまさに正統進化と言える機体になってるな。」

「なんというか：ラファールを全身装甲にしましたって見た目だねダーリン：あと違いを上げるとしたら某シナンジュみたいに両足に稼働するスラストと背面のウィングがまんまシナンジュになってるね……これS社に怒られたりしない？」

「ま、まあ……ほらヒュッケバインも許されてるし。」

「許されてるってのは一度許されなかったって事だよねダーリン……。」

「……………ウィングはラファールmkⅡのやつの強化型にします。」

「僕の専用機のウィングならセーフだね。」

「…………じゃあ、続きを話します。」

「あ、うん。」

今僕のダーリン：秋十が僕に説明しているのはデユノア社とIS委員会が共同開発する予定となっている第三世代機だ、まあ表向きの話で実態は実力を兼ね備えた金食い虫こと『ドイツカーマン』（※10話参照）をIS委員会が運用できる程度に安くしたいとの要望に秋十が「デユノア社製のISとして作っていいなら廉価版設計しますよ。」と持ち掛けたらしい。

という訳で秋十が設計だけして開発はデユノア社が行うこととなり、僕のお父さんが「イグニッション・プランに我が社も参加できる！競合相手は手動操作ミサイルだの明らかに使いにくそうなワイヤーブレードとかグフのMSVみてえなのしか無いから勝ち確だ!!」と大喜び。条約違反のISの開発やら数回の逮捕歴がある秋十と僕の交際に懐疑的だったお父さんは今では周りの企業に「織斑秋十ってしてます？あの子うちの婿なんですよー（笑）」（↑英国式意識）と他の企業に横取りされないように言いふらして回ってるとか。

話が脱線したけど、そんな経緯で作られたこの『エトワール・シユバリエ』ラファール・リヴァイヴの基本フレームを多少加工する事で生産ライン流用、そして既存のラファールも少し改修すればジムがジムIIになるようにシユバリエに変更が可能。新型のジエネレーターによってエネルギー兵装の装備もできる、まさにラファール・リヴァイヴの正統進化だって秋十が言ってた。ラファールの利点を残したままドイツカーマン程に優ることは無いけど劣らない機体性能だからね。

「…で、肝心の第三世代兵装が『イージス・エリア・システム』、ウィングに装備されたこいつは機体をすっぽり覆うようにバリアーを展開、そして特殊なナノマシン入りのガスを噴射してバリアーの外周に布が湿って水滴を垂らすように少しずつ染み出させる…こいつによつてエネルギー・荷電粒子系統の攻撃を拡散または減衰させて無効化かダメージを大幅に軽減させたり、ミサイルやグレネードを始めとした爆発系統の攻撃に対してはナノマシンを放電させることで誘爆させて直撃を防ぐ事ができる。」

「弱点としては使ってるだけでナノマシンを消費するから無駄遣いすると使用不可になる事とレールガンや大口徑砲等の強力な実弾兵装やブレードとかの実体武器による攻撃を受けるとシールドが破壊されることだっけ?」

「そうだね、アサルトライフルとかなら大丈夫だけどそれ以上の威力は数発喰らえばシールドが壊れて再展開するまで無効化されるね。もちろんシールドが破壊されたら出したナノマシンのガスが放出されて残量が減るけど。」

「どうせ距離詰めたら近距離戦か弾幕ばら撒くからその間は相手の牽制射撃とか気にせず撃てるのは結構いいかも…。大火力の砲撃とかは余程隙を見せなきゃハイパーセンサー越しに感知して避けられないと思うし…。」

「それはハニーやボーデヴィツヒさんとかのエースパイロットありきの発言な気がするけど…。ああ、それとスラスターを増設した高起動型と、ミサイルポッドや肩部ビームキャノンを追加した支援攻撃型、シールド付サブアームを展開できる重装甲型とバリエーションがあるけど…これ全て背部バックパックと両脚部スラスターの3つをハードポイント差し替えだけで変更できるようになってるよ。」



「今度はゲルググから運用思想受け継いでる……。前々から言いたかったけどダーリン……。秋十はあれなの？サン○イズに媚びてるの？それとも喧嘩売ってるの？」

「えっ…違っ……。確かに俺の作るISがどれもこれもガンダムシリーズの機体からアイディア得てるけども…。でもアイディアを得てるだけで一向にオリジナルだから問題無いと思うし…。」

「頭アナハイムかな？」

結果的に言えば秋十は敗北した。

事の始まりは俺は秋十に誘われ白式用ビット兵器『ドローン・ビット』の試験ついでに勝負する流れとなった。ビット兵器の試験なので俺は白式をビット兵器の運用を中心としたカスタムし、秋十はデュノアの新型を自分専用のカスタムをした状態の機体に乗ら込んだ。

ドローン・ビット…Dービットは簡単な命令だけ脳波コントロール

で行い、攻撃や回避と言った細かい挙動はビットに内蔵されたAIが担当する事でBT適正の無い人間でもマルチタスク擬きのオールレンジ攻撃を可能としているそうだが、ただ実戦に使えるようになるまでにはAIのメモリーに『パイロットはどんな状況でどう判断しビットをどのように動かすのか』と様々なデータを蓄積しなければならず、結局はプログラムに沿った起動しか描けないのでそれを読まれてしまえば簡単に撃ち落とされてしまうらしい。例えば『敵が回り込もうとするならビットは先回りして正面から射撃』というプログラムがあり、それを見破れば全く同じ状況をもう一度作る、後は何も考えずに目の前に銃口を向けておけばビットの方からやって来るわけだ。もちろんパイロットが指示を出して避けさせればAIがそれを学習してプログラムを手直ししてくれるそうだが……なんでビット側にAI仕込んだんだろ……これビット破壊されたら一からやり直しなんじゃねえかな……。

俺は開始のブザーと同時に秋十へ突貫、あいつがアサルトライフルの二丁持ちで乱射して迎撃してくるが何度も秋十との勝負に付き合って行くうちに攻撃を避けながら空を飛ぶ事にすっかり慣れた俺にとっては相手の射線を避けながら接近するのも苦では無くなってきた、零落白夜無しでもセシリアの射撃を掻い潜れる自身がある……まあ実際挑戦してみたらセシリアも成長して自分さえ動かなければビットと同時に自身も射撃が可能になっていてビットで執拗にメインスラスターを狙われて気を取られた隙を突かれて撃ち落とされたんだけど。

先週戦った『シルバリオ・クロス』という秋十がアメリカ軍人の人のISデータ（無断複写）を元に第2世代仕様で作った対空迎撃特化型の機体に比べれば牽制にもならない銃撃に俺が秋十の目の前に近づき雪片を振り上げる、秋十がスラスターを吹かして体当たりしてくるがこちらも急上昇してそれを避ける、最初から俺は囷だ。俺の背後にピツタリ並んで着いてこさせた4機のDービットが四方へ展開して上下の位置はバラバラだが秋十を包囲して一斉射撃を行う、ビット

の内蔵火器であるレールガンの弾丸は秋十が瞬間加速する事で更に前へと突進したことによって避けられ秋十が居た場所に4つの弾丸がぶつかり爆ぜた。

無論だが俺も黙って見ていた訳じゃない、あいつが瞬間加速した事に気づいた時点で俺は最近会得した連続瞬間加速：2回連続を1度の試合に3回程、1度使うと5分以上インターバルを置かないと白式と俺の身体が持たない不完全なものだが：それで強引に秋十の背中へと張り付く、そうされれば当然秋十は俺を迎撃しなきゃならない、そして俺に足止めされ得意の一撃離脱戦法ができなくなった秋十へDービットのレールガンの一斉射撃が降り注ぐ。

とうとう我慢できなかつたのか秋十の機体の腰部分の装甲が前後共に開き複数の銃口が現れる：轟音と共に発射された散弾がDービットを貫いた：：：まあビット自体は絶対防御とかあるわけないからそうなるもおかしくないけど：：：：ビットの運用試験なのに肝心のビットを撃ち落とすしちやっついていいのかと疑問に思ったが秋十に距離を取られる前に俺は零落白夜を展開して切りつけ試合を終わらせた。

「……………なんか、兄貴強くない？」

「ダーリンが毎回勝手の違う機体で戦いを挑んで来るんだからアム口と同じ理論で嫌でも対応力も実力も成長するでしょ？というかさりげなく別の機体も含めて合計2回負けてるよね？しかもまた逮捕案件やらかしてない？」

「まあ不起訴になったからセーフでしょ。」

「デュノア社の社長令嬢的には逮捕案件控えて欲しいなあ…。所でダーリン。」

「何かなハニー。」

「なんでビーム兵器対策マシマシの機体で実体兵装メインのレールガンビット装備の白式と戦ったの…？」

「あ、兄貴の単一仕様はエネルギーブレードだし。」

「普通にレールガンでバリアー破壊されてから叩き斬られてたよね？」

「……………やーい！ハニーのお父さん好色男!!」

「なっ…やーい！ダーリンの義父になる人浮気者!!」

この後ダーリンと喧嘩ツプルから仲直りックスしようとしたら布仏さんに「安眠妨害マジやめろ」ってダーリンがローリングソバットされました。

にんげんってよくとぶんだなあって思いました。



秋十の奴がおかしい…今回も勝負が終わると用事は済ませたと言わんばかりに帰って行つた。前日も…前々回も…何か引つかかる。そう思考していた俺に勝負の様子を見ていたのか鈴が声をかけてくる。

「…しかしあれね…秋十の奴、毎回一夏に負けてる癖に懲りないやつ。」

「まあ目標に向かつて諦めないのは1つの長所だからな、お兄ちゃんとしてはいっぱい嬉しいと思うよ。」

「でも最近では明らかに一夏の方が優勢な時が多いじゃない、今回は機体の相性もあつたけど…：…ほら、『アラクネ・Ⅱ（ツヴァイ）』とかいうアイア○マンの背中から蜘蛛の脚を生やしたような殆ど人間サイズの機体で一夏に挑んできた時も対IS捕獲用兵装の…『ウミヘビ』だったかしら…：粘着性のナノマシンの糸を飛ばして相手を捕まえて糸伝いに電流を流すことでISコア周りの電子機器をショートさせてISを強制的に停止させるとかいうやつ…：…八本の脚から出したのゼーんぶ一夏に避けられてたし。」

「皆の知らないところで連敗記録が増える…。」

「え？どうかしたの筈？」

「いや、何でもない。…：…一応、秋十は弱い訳では無いのだろうか？」

いつの間にか来ていた筈が話に入ってくる…：そう言えば最近、筈と一緒に訓練したりする機会が減ってるような気がする…：女子だけで特訓してるのか？

「まあ、弱いわけじゃ無い…：秋十はアレだからな…：…なんていうか。」

「私や他の専用機持ちが『実力を上げて強くなる』ってんならアイツは『性能をあげて強くする』って感じよね…。」

そうなんだよな、秋十はどんな機体も乗りこなせるという意味ではパイロット適正ってやつが高い…頭ジエリドかよってくらい乗り換えまくる。…以前、『エースパイロットなんてもん育てるより強い機体量産した方が絶対コスパ良いじゃん。どうせ育てて伸びるかどうかわかんねえんだし。』と、アニメでザクウオーリア達にボコボコにされるストライクを見ながら言っていたしな…いや、アレは秋十が錯らn…じゃなくてアスラ○も○ラも嫌いなだけか。俺は種シリーズ好きなんだけどなあ…00の次くらいに。

「二夏？ いーちーかー！…ダメね、考え込んじゃってる…。そういえば箒、あんた最近放課後見ないけど何してるの？」

「む？ ああ、少し前から秋十に機体操縦のコツという奴を実戦形式で教えて貰っているんだ…本当にISを乗りこなすだけならピカイチだからなああのグラサンノースリーブ男は。紅椿の運用理論と一緒に考えたり、私に展開装甲を含めた紅椿の整備の仕方を教えてくれたりと助かってるよ。」

「へえー…第4世代の紅椿の整備なんて…整備なんて必要なの？」

「そりゃISはパワードスーツだ、整備を怠って良い理由があるわけないだろう。…と秋十に言われてな、姉さんからメンテナンスフリーと聞いてほったらかしてた身としては耳が痛い話だな…。」

「……………ふーん。」

「あのね…ちーちゃん。別に東さんはね説教したいわけじゃ無いんだよ。」

「……………その、東…なんだ。」

「有給だからって酔っ払って東さんに『これがホントのアナサラスだなww』っていいながら東さんのターニングポイントにMG1/100のEz8を突うずるっこんできやがった親友を責めたいわけじゃないんだよ。ちーちゃんが酒癖悪いの知ってるから。」

「あの…あれなんだ…誤解だ、東。」



「生徒がいない隙に逆バニー姿で部屋に入ってきたおっぱいメガネに現場を見られて『違う!!違うんだ真耶!こいつが無理矢理…!』ってまるで束さんが自分からちーちゃんにガンプライストファツ○強要したみたい言い訳しやがった事を怒ってるんだよ。」

「その……………本当にすまん。」

「しかも何でそんな馬鹿みたいな言い訳を信じて帰っちゃうんだよ…あのおっぱい…………。」

主人公に勝てなくても負けたくないオリ主

「楽しかったな秋十兄さん。」

「ああ、今日の兄貴の誕生日パーティーは大成功だったな。」

私の今の名前は居村望：ちよつと前まで亡国企業というテロリストのメンバーだったがIS委員会に潜り込んでいた元メンバーのスコールと兄のコネでIS委員会の特殊事務官：という名の篠ノ之博士の私兵兼秋十兄さんの専属パイロットに再就職して社会復帰を目指している若干だいたい16歳だ：誰がなんと言おうが私は16歳なんだ。

兄のIS開発に協力する為、そして姉である千冬に「さすがに学歴中卒以下なのはちよつとアレだと思う」との事でIS学園に秘密裏に転入し保健室登校して学生として最低限のラインまで勉強して来年留年という形で正式に学園生となる予定だ。

元テロリストを入学させる国際教育機関とかセキュリティガバガバじゃないか？：いや元からセキュリティはおざなりな気がするから問題ないな。

「最初は女子の皆が兄貴にサプライズパーティーやるとか言ってたけど……暗い部屋で兄貴を捕まえて椅子に拘束とか下手したら兄貴がIS展開して反撃するかもしれないから普通に『誕生日パーティーやるよー』って手紙渡す事にしたのは我ながら英断だったかな。」

「皆が誕生日祝ってくれるって分かってたからか終始ワクワク顔でエンジョイしてましたね、一夏兄さん。」

「篠ノ之さんがお茶入れて、オルコットさんがビリヤード、凰さんが古典舞踊を披露して、簪さんが遠藤正〇の歌をメドレーで歌って……

ボーデヴィツヒさんがオペラ歌い出したんだよな。」

「ああ…男性声のテノールで高らかに歌い上げたインパクトが強すぎてその後の秋十兄さんとシャル義理姉さんの漫才が滑ってましたね。」

「…………滑ってたのは元からな気がするけど…まあインパクトといえば、最後の最後で姉ちゃんとマドカが2人でメイド服で登場したのが1番インパクトあったんじゃないか？兄貴が文字通りひっくり返ってたし。」

「そりや存在の知らない妹がメイド服で現れたらビックリしますよ。」  
「しかし、その後の立食パーティーに姉ちゃんがメイド服のまま山田先生と何処か行って帰ってこなくなっちゃったけど…大丈夫かな…。」

「ゲボ……ほっ……おえ……風邪引いた……真耶の奴……治ったら覚えてる……もうやめると言っても絶対やめてやらんからな……げほっ……」

一夏と秋十の誕生日パーティーをした翌日……粘膜から直に風邪を伝染された。

山田くんがやけに火照っていたがアレ風邪引いていたのか……私の弟の為に無理して誕生日パーティーの準備やら司会やらしてくれたいのは嬉しいが風邪なら風邪で普通に安静にしていって欲しかった、生徒に伝染したらどうする。

しかし、静かだな。弟達が風邪を引く事があっても私自身はそんな経験1度も無かったからな……少し新鮮な気持ち半分、寂しくないと言ったら嘘になるな……。

一夏は私の心配をして授業が上の空になってないだろうか、秋十はまたバカをやっているだろうか、山田くんは私の代わりに上手く授業を進めてくれているだろうか……生徒達に私と山田くんの関係がバレていないだろうか。

「やっぱり風邪は他人に伝染すと治るんですね。やっぱりアワビからですか？」

「どうでしょうか？先輩はいつもする時はぺにp……って何を言わせるんですか織秋くん！」

「いや完全に山田先生が口を滑らせてましたよね？」

『やっぱり織斑先生と山ちゃん……』

『ほらー、私の言った通りでしょー？』

『そうだけど…でも本音、山田先生が水龍敬ランドみたいな格好して織斑先生の部屋に入る所を見たなんて普通信じられないって。』

『でもこの前セシリアさんが体育館倉庫で千冬様が体操服ブルマで学ラン着た山田先生とイメージプレイしてたって言ってたよね？』

『ああ、くたまらねえぜ。』

「はあ……静かだな……。」

ただベッドで横になって天井を見つめるか目を閉じて瞼の裏を見つめるか……話し相手が欲しい……もしくはスマホの充電器が欲しい……風邪引いて暇だからってスマホ弄り過ぎた、充電しようにも寝ながら片手で差し込もうとして充電器の端子をへし折ってしまった。

暇すぎる……というか誰か見舞いに来てくれたりとかしないのか……しないよな、今授業中だろうからな。

『……！……！……！』

「……ん？」

なんか外から聴こえてくるな……隣の人のイヤホンの音漏れみたいなくぐもった音が……なんだ？清掃員が音楽流しながら作業しているのか？

『♪……！……♪……！……！』

「いや……これは……この部屋に近づいて来ている？」

なんだ…なんか妙にノリノリな音楽が……そうか！東か！

なんだアイツ、来るなら来ると言えればいいのに…ふふつ仕方ない奴だ。まあ親友の交だ、大人しく看病されてやろうかな…ふふふ。

『デツデデ→デツデツ←デツ→デデデツデデ←デツ→デデン←デツデ  
デデデツ→』

「おいこれ棺桶ダンスだろうが!? 吊うな吊うな!!」

風邪引いた奴に贈るものが棺桶ダンスって嫌がらせか!?

これがホントの-okuri BEAT ってか!?

「おいゴラアっ!!……え？」

「あ、織斑先生！」

「結構元気そうで良かったです。」

「いや私たちが棺桶ダンスなんかしてたから出てきただけじゃない?」

「織斑先生起きてるの?」「千冬様元気そう?」「ちよつと見えないんだけどー。」「私も私も。」「これが…若さか…。」「ちよつと押さないでよー。」「誰か私のお尻触ったでしょ!」「俺は触ってないからな!」「一夏!こんな状況で痴漢プレイとは…!」「恥を痴れ!俗物!」「織斑くんは触ってないって。」「セシリア、何故一夏に尻を向けているんだ?」「触れないであげて、ボーデヴィツヒさん。」「そういう織秋くんはさつきからデュノアさんのおっぱい触ってない?」「腕組むフリしてナニしてんのこのスケベグラサン…。」「いや、別に僕はダーリンとナニもしてないからね、あはは」「デュノアさん…右手を織秋くんのズボンか

ら離れたら?」「本当にナニしてんのこのバカップル…。」「ああ、その健やかなるときも、病めるときも、これを愛し、これを慰めてそういう…。」「結婚の誓いをちんちん亭的に解釈するのはNG。」「山田先生は?」「風邪ぶり返したから医務室に置いてきたよ。」

「お…お前達…なんでここに?」

私のクラスの生徒達が…全員集まっているだと…?

「あ!千冬姉!!」

「い、一夏…一夏か?ぎゆうぎゆうに密集し過ぎて手首しか見えんが。」

「俺だよ!俺が千冬姉の様子を見に行くって言ったら…他の皆も千冬姉にお見舞いしたいって言って…。」

「お前達授業は…そうか、もう昼休みなのか。」

寮長室を覗き込み時計を確認する私へ生徒達が口々に言葉を続ける。

「はい!千冬様に少しでも元気になってももらいたくって…。」

「先生!風邪なんかに負けないください!」

「私達みんなでお粥作ってきたんです!織斑くん監修で栄養満点ですよ!」

「そのでつかい箱って給食バットだったの!」

「どうかそのお粥入れてた容器、さつきバカップルとボーデヴィツヒさんとのはほんさんと棺桶ダンスに使ってたよね…?」



「お前達……全く……馬鹿みたいにゾロゾロ全員で教師の見舞いに来る  
とは……………」

…込み上げるものに耐えられず私は顔を床へと俯かせる。

「あ、あれ……織斑先生？」

「やっぱり全員で来るのは不味かったんじゃ…。」

「な、何よ？あんただって『厳しくても理解できるまで付きつきりで教  
えてくれる千冬様に恩返ししたい』って言ってたじゃないっ。」

「そ、そーゆーあなただって『イグニッションブーストの練習のコツを  
教えてくれた先生に何かしてあげたい』って…。」

「本当に……………バカな連中で……………」

…胸に溜まるモノに声が震えてしまう……………」

「あ、兄貴……………」  
「ああ、お兄ちゃんも同じ考えだ……………」

「自慢の生徒達d…ってどうした!？」

顔を上げ笑顔を向けようとした私の前には、土下座する生徒達の姿が広がっていた…水戸黄門で観たなこんな光景。

「あれ?千冬姉怒ってない?」

「見舞いに来て貰って怒るわけないだろう?寧ろ…嬉しく思ってるよ。」

「え?姉ちゃん怒ってな…うえ!?泣いてんの姉ちゃん!」

教師となって…いつも悩んでいた…本来、正規の教員免許を持たない私がIS関連限定とは言え教鞭を取る資格があるのか…代表候補生をやめてすぐ教師を目指し勉学に励んでいた山田くんを差し置いてブリュンヒルデのネームバリューを利用したいIS委員会の意向で役職を与えられただけの私が担任教師等務まるのか…私は、良き教師になれるのか…。

「え?千冬様嬉し泣き?」「マジで!」「マジだこれ!!」「織斑先生も涙出るんだ…。」「坊やだからさ。」「織斑教官…泣けるんだ。」「今のうちに写メつとこ。」「あ、後でそれ送って!」

「全くお前達…昼休みが終わったら、授業に戻るんだぞ?」

そうか…これがきつと…答えなんだろう…。

「それじゃあ…お前達の作ってくれたお粥を貰おうか。」

「千冬姉…ああ！みんな!!」

「「「「「はい!!織斑先生!!」」」」」」

教師になって…良かった!!

「おはよう！山田くん！」

「おはようございます、風邪治ったんですね。」

「ああ、山田くんも治ったようで何よりだ。」

「先輩…なんか嬉しそうですね？常時にこやかな顔の先生なんて初めて見ました。」

「失礼な奴だ、私だって機嫌が良ければにこやかにもなるさ。……それに、教師としての自信がついてきたからな。」

「逆に今まで不安だったんですか……？」

「ああ、だからつい表情が強ばってな……。」

「（あの仏頂面は緊張してただけだったんだ……。）」

「まあなんだ……。」

「今日も一日……頑張ろう！いち教師として！」

「はい！織斑先生！」

『一学年生徒の9割が風邪を発症した為、学年閉鎖とします。b y I S学園理事会及び生徒会より。』

「わ、私の風邪で生徒がクラスター感染してる……。」

「げ、元気出してください！ほ、ほーら真耶ママが千冬ちゃんを慰めてあげまちゅよく？千冬ちゃんママにバブバブするの好きでちゅよねく？……な、泣かないでください先輩!!そんな甲子園のサイレンみたいな男泣きしちやダメですよ!？」

「手洗い、うがいは世の常ってはつきり分かんだね。」

「私が新型の起動試験してる間にそんなことが…。」

「どうだった？マドカ。」

「はつきり言って……凄いの一言ですね。」

秋十兄さんの開発したIS用操縦補助システム…。

その名を『Trans・Automata・System』、通称『TASシステム』。

いつぞや兄さんが作ったAIが人間を媒体にISを無人操作するコンピュータを強化回収し人間の脳の命令に従いコンピュータが最適な行動を計算し弾き出した答えを脳に受信させることによって無意識に身体が動くようにイメージ・インターフェースのみでISの操縦を可能にする。

従来のISの操作には脳でイメージしそれをISに反映させるイメージ・インターフェースだけでなく腕部マニピュレーター内に収まっている操縦桿による直接操作も必要だった…だがこのシステムさえあればロボットの操作に置ける『思考から実行』このタイムラグを無くして文字通り手足の様に動かす事ができる…脳さえ無事ならばISを十全に操る事ができる。

言うなれば常に脳内で学校に来たテロリストを倒すイキつたイメージトレーニングがそのまま実現可能と言うわけだ…。

「問題はパイロットが無茶な操作による負荷に耐えられるかという所でしようか…。」

「あと』思いついただけで即実行』しちまうから、誤操作による事故が怖いな…そこら辺はどうだマドカ?」

「そうですね…試験中は特n」

「やつほー！束さんだよー!!マドちゃん大丈夫?学年閉鎖起きたって聞いて風邪引いた箒ちゃんのお見舞いついでに様子を見に来てあげたよ！えっへん！」

…びっくりした、明らかに出入口の無いはずの物陰から篠ノ之博士が飛び出してきたぞ…。

「篠ノ之博士：お久しぶりです。」

「いやいやあ硬い、硬いよー？もっと束さんにはフレンドリーでいいんだよー？」

「束さーん？俺の心配はしてくれないんですか？」

「バカは風邪引かないし、あつくんはいいかなあつて。」

…。  
なんか兄さんには微妙に態度が辛辣っぽいのは気の所為だろうか

「いやいや、ほらこのお手製マスクと頭の冷えピタが見えないんすか？」

シャークペイントのマスク…：それファツションじゃなかったんですね、風邪引いたなら大人しく寝てください。

「はっはっはっ、あつくんはウルトラスーパーデラックス癌細胞でも死ななそうだし。」

「束さんが風邪引いたらケツにネギ刺してやるからな。」

「天災は風邪引かないよーだ。」

そんな子供みたいな口喧嘩を…：しかし尻に葱を生やした篠ノ之博士。

…：面白そうだからちよつと見てみたいかm

『TA・システム作動』

「…え？」

「ん？今ペツパーくんの声が聞こえた気がするんだけど…？」

「お、おいマドカ？お前こっちに…東さんに近づいて何を…。」

「あ、あれ？す、すいません！ISが…勝手に…!!」

（「あと『思いついただけで即実行』しちまうから…。」）

「……………篠ノ之博士!!今すぐ逃げてください!!ああ!やめろ!腕が  
すんじやない!!そんな汚ねえモンをおっ拡げてんじやねえ!!?!おい!  
それはネギじやなくて私の大切な1/5サイズフィギュアの初音ミ  
k」



「兄さん……私は……そんなつもりじゃ……。」

「束さん……強く生きて……。」

「……生きるの諦めたい……。」

## 主人公に勝ちたくて積み上げるオリ主

『I S 学園バカップル選手権 2 位の代表候補生カップル、第三アリーナで現行犯逮捕』

昨晚未明、代表候補生 2 人がアリーナのご真ん中でみだらな行為をしていたとして現行犯逮捕される事件が発生、逮捕したのは教師 2 名。代表候補生 2 人はそれぞれ

『私たちは後から来た、先にやっていたのはあの教師達だ、アメリカ代表候補生として誓ってもいい。』

『教師を詐欺罪と名誉毀損罪で訴えます！理由はもちろんお分かりです。貴女たちが自身のこんな淫行を隠蔽し！生徒に罪を擦り付けたからです！覚悟の準備をしておいて下さい。ちかいうちに抗議します。ギリシャ政府にも問答無用で弁解してもらいます。会見の準備もしておいて下さい！貴女たちは淫行教師です！理事長に減棒される楽しみにしておいて下さい！いいですね！』

と容疑を否認、対して 2 人を逮捕した教師の C. O さんは

『2 人は犯行当時に 1 人は全裸に亀甲縛り、もう 1 人は鞭を片手に裸リボンというふしだら極まりない格好をしていた、誰が淫行野郎で誰が正しいのかは明白だ。現に私も山田くんも体操服にブルマーと上下共に服を着ている、ブリュンヒルデ嘘つかない。』

と話しており 2 人の証言を否定。罰則として本来であれば停学処分、教師の M. Y 氏の要望により社会奉仕として亀甲縛りを始めとした縄縛りプレイの講習を行う事で今回の件を不問とする事で話が決まったとの事。』……………」

「いや、いい歳した女 2 人がブルマー履いて何してんだよ、千冬姉……………」

「あ、秋十くん、本当に……これを渡せばあの件は……。」

「ええ、勿論ですよ。それにこれは『IS委員会の技術試験に倉持技研が協力した。』……という事になってますから、公的には何も問題ありませんよ。技術の流出は一切ありません……書類上はね。」

「わ、わかった……これが約束のデータ、実物は君の指示通りの場所に運んである。」

「………確かに、感謝しますよ……倉持技研の最高責任者の……局長さん。」

「………な、なあ！本当に！本当に例のアレは内密にしてくれるんだね？」

「しつこいな、俺は…織斑秋十は約束はちゃんと守る男ですよ。」

「そうか……信じていいんだな？あれが世に知られば私は終わりだ……。」

「ご心配なく、俺の胸の内に留めて起きますよ。まさか倉持のお偉いさんが……。」

『『水色髪眼鏡なあのおじ様、私をママにして？』なんてタイトルの3D系アダルトゲームを作ってるなんて誰にも言いませんよ。』

「た、タイトルを言うんじゃない!!更識の手の者が何処に潜んでいるのかわからないんだぞ!!」

「しかしエンディング全回収までプレイしましたけど、これ本当にくつつつそ抜けるわ…特に鈍感ルートでヒロインに押し倒される所とか…。」

「あ、わかるかね？私もここはヒロインの心理描写とか特に力を入れていてね…CGの方もMMDを元にしてはいるがほぼ自作なんだよ。」

「いやあやつぱりエロはこうでなくちゃってのが大体抑えられててティッシュに手を出したのはもんくえ以来ですよ。」

「ああ、アレはエロかったなあ…私もエロゲー制作を趣味とする者として学ぶ所が…。」

「お姉さんとしては純愛ルートからの分岐で姉にNTRれて百合ツクス見せつけられるエンディングが好きかな。」

「ああ、『あはは♡私達のココを見てそんなにしちやって…♡ほら、この娘も見られてこんなにしちやってるわよ？♡』って煽られまくる所でティッシュユ一箱使ったわ俺。」

「私も若い頃はあんな風に百合に見せつけられるような青春がしたかった…。」

「ん？今女の人の声が……。」

「もう遅いわ。」

『倉持技研局長、ポルノ所持が発覚し降格処分：後任は篝火ヒカルノ氏が引き継ぎか。』……あの局長さん、打鉄式式の開発で予算を回すのに手を尽くしてくれた良い人だったのに……。」

「その人の事は忘れなさい簪ちゃん：あとグラサン野郎とは縁を切つて。」

「なんで？」

「秋十、ドイツからお前宛に書類が届けられていたぞ…何故お前宛の荷物が私に届いたのかはわからないが…。」

「お…サンキュー、ボーデヴィツヒさん。IS委員会技術試験官としてちよつと調べ物があつてドイツに資料を送って貰ったんだよね。」

「そうなのか…ああ、確かデュノア社の新型はAICをアイデアにした対エネルギー兵装用のバリアーを展開する能力があるとか聞いたな…。」

「二応、ドイツのAICの技術を盗んだとかはしてないよ。」

「そうだったらとつくに私が秋十を逮捕してるさ…。」

最近秋十は全く一夏と勝負しなくなった…せいぜい白式の整備や白式用の武装を作つてやる程度。その代わりに他のクラスの代表候

補生や整備科の先輩とつるんでいるのが目に入るとなつた…一応彼はIS委員会から役目を与えられているからな、仕事のせいで一夏との勝負にかまけていられなくなったのだろうか……。

正直、一夏が寂しがつてるから相手してやって欲しい所だが…私も軍人だ。上から与えられた任務を放つたらかして友人と遊び回らなうて許される筈がない。IS委員会に自分から売り込んで雇われた秋十、自身の価値を示さなければ後ろ盾も出世街道も閉ざされてしまうだろう。

まあ二度と遊…試合も訓練も共にできない訳でもあるまい、一夏には弟を信じて待ってやれと私から言つて見るとするか。

「それはそれとして秋十…織斑教官について聞きたいことがあるのだが…。」

「ん？姉ちゃんの寝起き顔がみたいなら山田先生のスマホの待ち受け」  
「n」

「いや、そんな話では無くてだな…織斑教官には専用機があつただろう？。」

「というか教官と山田先生は隠す気あるのか？…教師のオフィスラブとかスキヤンダルだと思ふんだが……。」

「ああ、酒浸り…だっけ。」

「暮桜だ。1文字もあつてないしそれは教官の趣味だろう。」

「そうだった…それがどうかしたの？」

「いや…教官がモンド・クロツゾ二連覇を達成してから暮桜について一切の情報が無いからな、気になったものの本人に聞きづらいから友達を頼つたという話だ。」



「成程……委員会の話では暮桜はISコアごと学園にあるって噂があるって聞いた事はあるんだけど、実際どうなのかはちよつと……。」

「学園にか？教官はもう国家代表ではないから専用機とISコアは倉持へ返上したと思っっていたが……。」

「当たり前だが秋十も知らないか……やはり教官本人に聞いてみるべきか……。」

「しかしもしも教官の地雷を踏んで嫌われてしまうかとも思うと聞きづらい、いや教官が悪意の無い相手をそう簡単に嫌いになるような方では無いと思っではいるが……。」

「よし、思い切って聞いてみよう。秋十……すまないが一緒に来てくれ。」

「え？俺これからハニーと新型機の訓練があるんだけど……。」

「今日は休め。」

「……やっと思ったか。大丈夫か山田くん？」

「は、はい……って2人きりの時は……。」

「わかったわかった……真耶、これでいいか?」

「はい!ち・ふ・ゆ・さん♡」

「……少しむず痒いな……しかしロッカーの中で2人きりってシチュエーションがやりたいと言いつつから入ってみたが……お互い胸がデカいせいで全く身動きができないな。」

「千冬さんが無理矢理入るからギチギチですね……これ出られるんですか?」

「たかがロッカー1つ、篠ノ之流プロレス術で押し出てやるさ……ブリュンヒルデは伊達じゃない。」

「篠ノ之流は剣道なんじゃ……所でさつき織秋くんとボーデヴィツヒさんが話していた件……真相を伝えたりは……。」

「話すつもりは無いさ、全力ではぐらかしてやる。」

「………ですよね。」

そう、あれは私が大会二連覇を制覇した後……IS学園教師として内定が私の意思を他所に勝手に決定されたのを知って数日後の話だ……。

『ん……私はたしか……IS委員会の偉い人の……化粧が濃そうなルーコスって女を殴り飛ばしてIS学園教師を辞退しようとしたはず……いや本当に教員免許を取ってない私に教師やれとか馬鹿じゃないのか委員会は……高卒だぞ私は。』

それよりここは何処だ……？なんというか、斬魄刀が正解する前のイベントで来そうな……なんかこう……ふわっとした……ラノベなら馬鹿の一つ覚えみたいにウユニ塩湖っぽい背景が使われそうな空間だな……。

なんでこう……真の能力とか新たな進化とかする前はウユニ塩湖みたいな場所で似たり寄ったりな問答をするんだろうか。覚醒前の問答と脇役の過去編は見飽きてるんだ、さっさと本編を進めろというのがわからんのか……。

『ってそうじゃない、話の流れ的に私の専用機でモンド・グロツソ二連覇を共にした暮桜の……ほら……なんかこう……暮桜と、アレする感じだろ？多分……違うとしたら昨日一気飲みしたストロングゼロが原因だな。』

やはり一夏の言う通りストロングゼロは一日一本にするべきだったか……でもアレを5本くらい飲み干してフワフワした気分のまま全裸でベッドに入らないと眠れないんだ……うん、私は悪くないな。

飲んで欲しくないならストロングゼロを規制すればいい。

『……！……っ……！』

『ん？……声が聞こえるな……ひよっとしてあの声は……暮桜か？』

もしくは私がストロングゼロを飲むと必ず現れるピンクタイトの束か……アイツら結構イタズラ好きで私を全裸にしては一夏の部屋に無理矢理引き摺り込んでくるからな……一夏は何故か私が自発的にスツポンポンで弟にシヤゲダンする変態扱いしてきやがるが……ピンクタイト着た束の仕業だと言っても信じてくれないから困った奴だ。

『……行ってみるか。……おい！暮桜!!お前だろう?』

『や……っ……わ……い……い』

『おい！聞こえないのか!!……ったく……』

『う……い……や……え……』

『おい!……後ろ姿が……おい!私だ!!織斑千冬だ!』

『やっ……い……い……』

『……………おい!!!返事し……………ろ……………?』

『やっべ…うまつ!カップ焼きそばにタラコマヨぶちまけたら…これ優勝!!タラコマヨ焼きそば優勝だわこれ!!んぐ…ずぞぞ…つぶは!!…うっめえ…たまんねっ!千冬ちゃんの脳内に色んな食べ物の方が記憶されてるけどこれが最高だわ!』

『……………お、おい……………暮桜…だよな?』

『そして…んぐ…んぐ…ぷへあッ!!全裸で飲むストロングゼロ!!!これは確かに病みつきになるう!!頭バカにして飲む酒うまつ!!……………うん!準優勝!全裸でストロングゼロは準優勝!!』

『あ、あの……………。』

『トドメはポテチを…ビールで……………流し込む…んぐぐぐっ!…んぐっ……………ぶへえ…喰った喰った…ぷふう…もう、こんなにお酒を飲むのが最高に楽しいなんて……………東ママに頼んで人間の身体とか作って欲しいなあ……………ああ……………エアコンの冷風にM字開脚するとすっげえ気持ちいい……………千冬ちゃんの見よう見まねだけど…最高……………思い切つて東ママにお願いして千冬ちゃんの専用機になって本当に良かった

わあ……。」

『す、すみません…暮桜……さん？』

『おつ……あ……ポテトチップスが……ポテチのおイモ成分が……  
ああ、これは……気功砲でるわ……ケツから10べえかめはめ波でる  
…千冬ちゃんのよりでけえのg……ん？』

『あつ……。」

『えつ……。」

『その……お邪魔、してます…千冬です。』

『あつ……はい……暮桜です……。」

「それ以来暮桜はコアを自己凍結し、二度と私や束に反応を示す事は  
無かった……。」

「何度聞いても馬鹿みたいな話ですね……千冬先輩……。」

「……………」

「あの、東さん？俺は言われた通りに東さんにカンチy…忍法千年殺ししただけだからね？……そりゃISのマニピュレーターはやり過ぎだと思っただけど……いや、それ込みで東さんの命令だからね？」

「あの…秋十様…とりあえず救急車を呼びましたので東様を外へ運ぶのを手伝って頂けますか？」

「……………」

「あ、うん…じゃあクロエちゃん脚の方お願いね…で、東さん。そりゃ最近東さんは何も悪いことしてないのに運命レベルで不幸な事故が起こりまくってたのは知ってたよ？…それに東さんは分かり

きつてた事に対策をしない馬鹿じゃないって事も……。」

「……………」

「なんで厚さ数ミリも無いパンツに爆発反応装甲なんか貼り付けたの  
や……………」

「天才にもうっかりはあるんだよ!!…っ…あ…自分にキレそう…」

「もう切れてます束様。」

「えっ。」



主人公に勝つ準備をしてる幸せかもしれんオリ主

「え？ISテロを無力化できるクリーンな新兵器を思いついた？」

「そうなんだよ束さん!!『天災』と『天才』がいれば絶対上手いくと思っただよー!」

仕事も実家の手伝いもIS委員会の会合も免許の更新も副業のV  
tuberも通院もとフレンチに行こうとしてぶっ壊したちーちゃん  
のプリウスの返却とコミケの執筆も紛失したクレカの再発行と電  
車の網棚に忘れたISコアの回収と亡国機業の残党の摘発と核搭載  
二足歩行IS戦車の破壊と盗まれた箒ちゃんのパンツの盗難届の提  
出とザンジバーランドのテロリストの対処とギレ○の野望のガトル  
マゼラ縛り実況生配信と交通違反の罰金未払いと痴漢冤罪の裁判の  
出廷と車ぶつけて凹ませちゃったパイオツ緑髪先生のキャデラック  
の弁償といっくんがベッドの下に隠してた妹の匂いのするクマさん  
パンティの追求とやる事は沢山あるけど気分が何か退屈だったから  
いつメン(束さん、クーちゃん、マドちゃん、あつくん)の4人で集  
まってIS学園の視聴覚室でポケ戦を見ながらだべっていたんだけ  
ど…。

自称『天才』こと織斑秋十…あつくくんがなんか唐突にISの軍事利  
用を提案してきやがった…殴られたいのかな？

「あつくん…ISの軍事利用は誰であれ許さないうって言わなかったか  
な？」

「あれ？篠ノ之博士、ISって普通に戦闘機の代替品よろしく世界中  
で軍配備されてますよね？」

「それは…ほらマドちゃん…あ、ISを使う悪者から身を守る為に

は善人がISを使うしかないから……。」

「全米ライフル協会きたな……。」

「そのうち一夏兄さん辺りに『感情的な説教はいらぬ』とか言いそうですね……。」

「マドカ様、実際ISを犯罪利用されると止める方法が束様が遠隔操作するか直接ISで撃退するしか無いのが今の現状です。」

「……篠ノ之博士が遠隔操作でISを止められるなら尚更軍隊に配備させる必要が無いのでは……?」

まあ、そうかもしれないけど……束さんがISの遠隔操作できるつてバレちゃうと本当にヤバイ事しようとする連中にISコアネットワークをジャミングとか対策取られたりして後手に回るのが怖いから単なる襲撃や強盗紛いに易々と使えないんだよね……まあ人命第一で使っちゃったりするけど……じゃあマドちゃんに知られたらダメじゃねえか、口滑らせてるよクーちゃん。

「まあほら、束さんも忙しいから多少はね?」

「確かに篠ノ之博士一人では無理がですか……。」

遠隔操作できるつてのは内緒にして貰わないと……後で桜ミ〇の限定ファイギュア買ってあげるから、なんならエロ魔改造したコト〇キヤプラモの初〇ミクちゃん作っただげるから本当に頼んますマドちゃん。

「と、言うわけで!!俺の考えたISの新型兵装を使えばISテロを被害ゼロで抑えられるかもしれないんだよ!!!」

「それでどんなゲテム……バカモノを作るつもりですか?秋十兄さん。」

「ああ聞いて驚k…バカモノ？今バカモノって言われた？」

「マドカ様、秋十様はクソダサグラサンノースリーブクソ野郎ですが  
こういったことは結構デカく当ててくるお方ですから…。」

「兄さんのお陰で私はミ〇ちゃんを一つダメにされたんだが…。前  
回の誤作動不可避システムだの核兵器レベルの荷電粒子砲だのVT  
擬きだの兄さんが作るものってオリジナルに限っては本当に当たり  
外れの差が致命的ですよね。」

あれは悲しい事件だったね…。あの後、束さんの自腹で初〇ミク  
のフィギュアのお葬式させられるとは思わなかったよ。

というかクーちゃんはいつになつたらあつくくんを許すんだろ…。

話を遮るようにあつくくんが咳払い。…結構好き勝手言われて  
ちよつと涙目なのがグラサンの上からでもわかる…でも実際あつく  
くんは束さんとタメ張れるクソ野郎だからね？

「……………ほん、話を続けさせてもらうけど。一夏の兄貴がボーデ  
ヴィツヒさんとNT的富野文法ロールプレイしながらISで模擬戦  
していた時に一瞬2人がスッポン☆ポン☆？(〇)／な状態でよく分  
からない空間に浮かび合う現象に遭遇したって話を聞いたんだよ。」

「なんで今あつくくんル〇ーシユのポーズしたの…？」

「富野語録っぽくロールプレイしながらIS…ロボットで戦うとか完  
全に途中からガチ口論になるやつじゃないですか…。」

「そんなのいいから…それで、俺はISコアが人間の精神に干渉する  
能力があるんじゃないかと目をつけた訳だ。」

「……………それで？」

「そこで俺は思いついた!! 『ISコアの精神干渉能力を利用してISに乗ったテロリストの心を操り無力化できるんじゃないやね?』……てね。」

その発想はなかったなあ……いや有るにはあつたけど東さん洗脳兵器とかドン引きしちゃうウーマンだし……誰だよ東さんの考えたISスーツをハイグレ星人に結びつけてネットに広めた馬鹿野郎は……本当に許さんからな。

「まあ、もしそれが可能ならISを悪用しようとしたらISコアの方からパイロットを拒否できる機能とか作れそうだし、何より面白そうだし。」

「でしよでしょ? さつすが東さん! いや……東先生! てことは……?」

「うん、東さんに研究を手伝って欲しいんでしょ? いいよ! ISを利用した洗脳兵器なんてもん作るのはぶつちやけ嫌だけどあらかじめ作った上でそれを停める方法とか対策を研究するのはいずれやらなきやいけない事だしね。」

ISコアの中身ってIS開発してたJC時代の東さんがストロングゼロ8ダース位をキメてた時に気がついたら完成してた所あるからガチブラックボックスな部分多いんだよね……丁度いい機会だし未知の探究と洒落こみますか!

「やつとできた……対暴走IS鎮圧用第三世代兵装搭載型インフイニット・ストラトス……その名も……。」  
『Lullaby Angel（ララバイ・エンジェル）……『子守唄の天使』なんてキザな名前だね。」

あつくんの数学ノートの端っこに書いてありそう。

「いいじゃん、実際こいつは某アメリカのシルバリオ・ゴスペルを素体にした姉妹機なんだし……。」

三分クツキングもビツクリなくらいあつさりと完成したね…束さんとあつくんの目の前にはちよつと前にアメリカとイスラエルが完全な兵器運用を目的に作っていたIS…シルバリオ・ゴスペルそつくりのISが鎮座している。まあISコアはあつくんのセーブ・データ・システム搭載型コアで機体は束さんが再現したやつなだけだね。

強いて違いをあげると一つは束さんと同じウサ耳が装着され、カラーリングも背中のウイング以外束さんの髪や服をモチーフにして、ちなみにあつくんがガンダムマーカールとエアブラシで塗ったとか。

そしてもう一つはあつくんが言ってたようにIS鎮圧兵装が積み込まれた背部ウイングユニット…本来は光弾をばら撒くそれは表裏に小ささまざまなスピーカーが左右合計18機ほど埋め込まれる。

そのスピーカーから発する音がISに乗ったパイロットに作用する事によつて対象を強制に眠らせて無力化するって寸法なんだよね。

「…………あれ？おかしいな私も手伝ってた筈なのにこれを開発してた記憶が全く思い出せないんですけど…。」

「奇遇ですねマドカ様、私も同じ気持ちです。」

…?  
なんかマドちゃんとクーちゃんが困惑してるけどどうしたんだろ…?

「しかし苦労したなあ…ISがコアネットワークに作用してパイロットの精神干渉を行う特殊音波発生装置…こいつが本当に0から考えて作らなきゃいけなかったから大変だったな。」

「あつくんが途中で投げ出しそうになって7割くらい束さんが作ったけどね。」

「……機体のスペックを高める為にパーツを一つ一つ吟味したり……。」

「あつくんの注文にあったパーツを探して用意したの束さんだけだね。」

「……………スピーカーの音声テスト」

「あつくんの後出しジャンケンに出し抜かれて洗脳音波を聞かされたもの束さんだね。」

「……………。」

「……………あつくん？」

「お願いします!!今回の功績、俺に譲って!!マイハニーのシャルロットとイチヤつき過ぎてIS委員会に何も貢献できてないの!!!来月末までに成果を上げないと俺が降格処分にされちゃうの!!おちんぎん!!おちんぎん無いと生きていけないの!!おちんぎんいっぱい欲しいのおおおおおおお!!!」

「ふぎけんなグラサン!?というかお前エトワール・シュバリエ開発してたろうが!!それで充分成果あげてんだろうが!!おい!束さんのスカートにしがみつくな!!脱げる!脱げるから!!下に至っては今脱げ

「だから!!」

「エトワール・シュバリエはデュノア社に権利譲っちゃってIS委員会が独占する事ができないからって……その穴埋めしないと降格処分だつて。」

ええ…誰なのそんな事言ったの…? 東さんIS委員会の偉い人やってるけど、あつくんを降格処分とか聞いてないんだけど。

……そう言えばあのルークスって奴、元は亡国機業だったよね…東さんに話を通さずにISを無力化する鎮圧兵器を作れと…。

「……………ふーん……………いいよ、その代わり最後の実践テストはパイロットやってよね?」

「え? いいの!? ぶっちゃけ他人の功績を乗っ取るとか俺の美学に反するから断って欲しかった所あるんだけど…………?」

「その代わり……………こいつをもう一機作るからね。」

「え? あ、うん! 手伝う手伝う!!」

「いやそうじゃなくて…。」

『「技術を教えてやるから一から十までお前一人で作り上げてみせろ」……………って言ってるんだよ、あつくん?」

「……………提出期限があと十日も無いんですけど?」

「とりあえず最終試験いってみよう!! ぐーぐー!」

「ああ!? ちょ、背中押さないで…ああ!! もうっ! わかったよ!! 1週間連続で徹夜してやらあ!! むしろもっと良い奴を完成させてギヤフンって言わせてやるからな!!」

「その調子その調子♪」



「秋十兄さん、結局それってIS動力のエンジェル・ハイP」

結果から言えば秋十と束さんは逮捕された。

あの天使みたいなISから出た催眠音波はISのパイロットを強制的に眠らせる能力があったそうだ：ISコアネットワークを通じて特殊な音を聴かせ精神干渉を行い狙ったパイロットだけを眠らせるのだとか。

しかしそれを受信した I S が無差別に I S 関係無く聴いた人間を強制的に眠らせてしまう催眠音波を大音量で発し始め、さらに全く関係ない別の I S コアも例え人間でも聴きとることのできない程の小さな音であろうと受信した途端に同じように催眠音波を大音量で流し……まるでゾンビ映画の序盤並の感染と蔓延によりたった 10 分で I S 学園にいた人間全員が眠姫と化したそうだ……たまたま防音室に居た千冬姉と山田先生を除いて。

教師 2 人で手分けして学園の皆を眠りから覚まさせた後、あの天使みたいな I S は千冬姉の手により爆破解体されて洗脳兵器は溶鉱炉へ放り込まれたそうだ。

何度も逮捕案件を起こして……お兄ちゃん、いっぱい悲しいよ秋十……。

「千冬姉……ひよっとしてあの竹箒片手にグラウンド清掃してる丸坊主のグラサンって……。」

「今回は一歩間違えたらテロだからな、罰を与えねば示しがかん。」

「それでも牢屋行きは免れるのか…たまげたな…。ちなみに東さんは？」

「メントスコラで人は空を飛べる事だけは分かったな。」

「えっ？」

主人公に勝てなくて暗躍して幸せを目指すオリ主

報告書

秋十くんとロボット開発を楽しむ整備科の会

開発二班 班長 2年3組 琴蕪木 八重子

秋十くんの招集したデータ及びディッカーマンの試験データにより新型ジェネレータの開発が可能となりました。これにより計画されていた最新機の製造に着手が可能となりました、つきましては追加の研究費用を『IS学園第三技術研究部』の部室に送ってください。あと同好会の名前が『AAA』と書いて『秋十の最高な同盟者達』とかダサいし厨二でかつこ悪いし満場一致でアレなので変更しておきました。

返信

秋十技術研究会

会長 1年1組 織斑秋十

報告ありがとうございます。ですがBから機体はまだ能力を十全に発揮できていない気がするとの話がありその調査を終わるまで新型ジェネレータの開発は延期してください。少なくとも研究対象：A Tには隠された機能と兵装がある事が既に発覚されています。

あと予算は3ヶ月単位で渡しています。がなんで2週間で使い切ってるんですか？貴女のTwitterに俺以外のメンバーでタピオカ啜ってる集合写真と某アヒルドファックのツーショットが上がってたんだけどアンタ何を思ってISの研究費用をタピオカ代とネズ

ミーランドに使い切ってたよこの野郎。今部室前でこのメール打ってるからさっさと鍵開けやがれ。

あと人が一晩考えた名前をダサイ言うなや。

とりあえず真面目な感じの名前に変えとくからこれに統一してください。

## 報告

秋十くんとロボット開発を楽しむ整備科の会

開発一班 班長 2年1組 万台 亜室

エトワール・シュバリエのイージス・エリア・システムの改良型が完成しました、近接武器や実弾等の実体兵器に対して脆弱だったシールドを強化し荷電粒子をシールド外側に膜を張らせる事でナノマシンを使用せずにエネルギー兵器の減衰、荷電粒子武装の無力化、レーザーガンや大口徑砲を含む実弾兵器に対する一定の防御が可能となります。連続して衝撃を受けると荷電粒子の膜が飛散してシールドが碎かれる可能性がある事とミサイルや爆弾などを放電によつて誘爆させる能力を失い、直撃すれば一撃でシールドが碎ける可能性があるといった欠点が見られており防御面に重点を置く限りは改良は見込めません。

あと我々の要望で先週設置された部室の自販機にペ○シが無いとか舐めてるんですか？良いんですよ？あのコココー○バカの琴蕪木の肩を持つなら2年1組所属の部員はストライキを起こす用意ができております。

良い返答をお待ちしております。

返信

秋十技術研究会

会長

1年1組

織斑秋十

報告ありがとうございます、開発予定の機体は高機動による一撃離脱戦法を主軸に戦うことを想定しておりミサイル等は追いつかせない、もしくは直接撃ち落とす事にしてますのでそのままISに搭載できると言うダウンサイジングの研究を進めてください。

琴蕪木から同好会の名称変更があったと聞いてませんでしたか？上記の名称に変更しておいてください。あと自販機の設置に許可した覚えは無いのですが先月渡した開発予算は何に使ったんですか？何で誰も予算の申請と領収書を私をすっ飛ばして顧問の巻紙礼子先生に渡してるんですか？あの人内容読まずに判子押してるから絶対に俺に話を通せて言ったよな？プラモ屋の娘だかなんか知らんが毎回絶版キット渡せば俺が黙ると思ったら大間違いだからな？

追伸

秋十技術研究会

会長

1年1組

織斑秋十

先程私宛に届けられた特注品の1／144ガンダムアシユタロン  
ハーミットクラブのガンプラとは全く関係ありませんが部室の自販  
機はペプ○が売ってる自販機と交換します、少なくとも明後日までに  
業者に交換させて見せます。

なのでアツグのHG版を是非とも先輩のお父上であらせられるプ  
ラモ会社の幹部様に作って貰えるように言ってくださいると嬉しいで  
す。

旧キットアツグを買い占めたやつ全員RGのゼータぶっ壊れてし  
まえ。

報告

秋十くんとロボット開発を楽しむ整備科の会

顧問 巻紙礼子

昼休み終わるまでにメビウスを八箱とコミック百合〇の新刊買ってこい。

返信

1年1組 副担任 山田真耶

織秋くんからスマホを借りてメールを送ります。

生徒をパシリに行かせるのはやめてください、ルークス平野さんの推薦とは言え貴女が研修中なのをお忘れなようお願いします。

メビウスは私が代わりに買っておきましたがこれを八箱も買う理由がわかりません。



返信

秋十くんとロボット開発を楽しむ整備科の会

顧問 巻紙礼子

先程秋十くんから受け取りましたがガンプラの方じゃないです。

返信

1年1組

副担任

山田真耶

と見せかけて実は織斑千冬

そうかそうか、お前は私の弟にタバコをパシらせようとしていたのか。  
ちよつとそつち行くから職員室から動くなよ？

通達

1年1組 布仏本音（さんのスマホ）

俺のスマホ誰か持つてる？知ってる人いたら返して……。  
by 織斑秋十

返信

1年1組

担任

織斑千冬

スマホに保存されてる男装の麗人系のエロ同人画像フォルダをデユノアにバラされたくなかったらこの『計画』とやらについて全部吐け。

## 報告

### 秋十技術研究会

会長      1年1組      織斑秋十

ブリュンヒルデに『計画』がバレたと思ったけど束さんと計画してた暮桜の凍結解除の計画の方だったわ、明日から活動を再開してください。

送信

みんな大好き篠ノ之東さん

ちーちゃんがポリギノールを60箱持って東さんの隠れ家に向  
かってきてるんだけど、あつくん何か知らない？

報告

秋十くんとロボット開発を楽しむ整備科の会

開発一班  班長  2年1組  万台  亜室

可変ウイング『クロノス』及び荷電粒子伝達パイプの完成の目処が

経ちました。これが成功すれば秋十くんの手で人類初の第四世代が完成が実現されると思われ、つきましては彼氏とのデートに物入りなのでお小遣いください。

追伸

秋十くんとロボット開発を楽しむ整備科の会

開発一班 班長 2年1組 万台 亜室

今回はMG版でガ・ゾウムをパパに作ってもらいました。

追伸

秋十技術研究会

会長

1年1組

織斑秋十

彼氏とのデート代せびるとかお前ふざk

追伸

秋十技術研究会

会長

1年1組

織斑秋十

先程はメールを誤信してしまい申し訳ございません。その件に関しては了解しましたので今度はHGでジャムル・フィン欲しいです。あと琴蕪木さんと協力して全てのパーツを例の倉庫に運び込んでください。

秋十へ

1年1組

お前のお兄ちゃん

織斑一夏

知らない先輩から『ざんせつ計画』って書いてあるファイル貰ったけどこれお前のだよな？お兄ちゃんまたお前と間違えられちゃったよ…。

ε―(∩∇ゝ；)コマツタコマツタ

シャルに渡しておいたから安心してくれ！(ゝ・ω・ゝ) b

もちろん中は見てないから心配しなくて良いからな!!

最近忙しそうにしてるし、お兄ちゃん何もしてやれないけど俺はいつでも家族の味方だからな！美味しいご飯とか差し入れ位はするから迷惑じゃなかったらいつでももって行ってやるからな。

バツチⅢ(・Ⅱ・Ⅲ)コイ

IS委員会の仕事も大変かもしれないけど頑張れよ！

あとお兄ちゃんにもうちよつと構ってけると嬉しいかな。

チラツチラツ―☒?☒( )



ダーリンへ。

1年1組

シャルロット・デユノア

浮きで色々と他の先輩と仲良くしてるみたいだけどISS委員会のお仕事なのかな？

気遣ってあげられなくてごめんね？

だけど恋人としてダーリンの為に何かしてあげたくて。

とても心配…。

しかも最近ダーリン録に部屋に戻らないから寝てないんじゃないかなって…。

たとえば僕がまたシャルルの格好で…えへへ♡ダーリンってそういうの好き

らしいって織斑先生から聞いたからね。

こんな僕でもダーリンの事大好きだから何でもできちゃうんだよ？

ろくな事起きなかった人生がダーリンと出会って良い方向に向かつて幸せです。

わたしはいつでも貴方の恋人です。

たとえば何が有ろうとダーリンと一緒に何処までもいきたいな。

しってる？私もパパもダーリンなら私が日本にお嫁に行くとして

も

もしもダーリンがフランスにお婿に来てくれるとしても結婚を認めてくれるんだって。

ぬか喜びさせないように幸せな夫婦になろうね！

返信待ってます。

返信

1年1組

担任

織斑千冬

秋十へ、いきなり電話で泣きじやくりながら『浮気者にされるくないなら首括る』とか『謝つてもれいぶめ』とか『誤解を解くために助けて』とか捲し立ててきてびっくりして電話を切ったのは悪かった。

お前の質問に結論から言うがIS学園は治外法権だとしても未成年の結婚が許される訳じゃないからデユノアと結婚したいならあと2年は待て。

デユノアには私から取り成してやるから安心しろ。

報告

日本医学会

また例の患者が来ました、今度は止まらないそうです。

関東の医者はまだ来るの一点張りなので今度は四国辺りのク  
リックにタライ回しさせるようお願いします。

主人公に勝てなくても幸せしたいオリ主

「えーっと…というわけで、この『ガイア・ラファールリヴァイヴ』は計画中止に致します。」

「えー」「なんでですか。」「脚は飾りじゃないんですよ?」

「ACじやあるまいし実質航空機のISに脚を4本付ける必要ないだろうがよ。みんなわかってる?俺が兄貴に勝つ為に『残雪』のプロトタイプ作ろうって話してんだよ?それでデータ取って完成間近の本機を手直しするって俺言ったよね?」

「でも秋十くん変なガンダムとか好きそうだし…。」

「ジオン水泳部はちゃんと理由があって作られてんの!!オツゴとかアツザムも必然性はあるの!!」

「そうかな…?でもお兄ちゃんとしてはやっぱり色々試してみるのも悪くないと思うんだけどなあ…?」

「ってあれ!?なんで兄貴ここにいるの!?!」

俺は今、とある女子生徒…たしか…ばんだい先輩だったかな?その人に誘われて秋十の部活動の見学をさせて貰ってる。

最近、箒を始めとして鈴もセシリアも簪も何だかよそよそしいというか…避けられてるというか…まあ…俺にも原因はあるんだよなあ…。

「ごめんごめん、私が呼んだ。」

「先輩!?てめえ何を考えt」

「HGでサイコガンダムMkIIをパパに作ってもらおうかと思ってた

「ただけどなあ…。」

「よう兄貴!!ゆつくりしていつてくれよな!!」

「弟がガンプで釣られてるのはお兄ちゃん不安になっちゃうなあ…。」

「ぜんせつって秋十の新しいISの事だったのか。最近あんまり相手してくれなかったのはこれが理由だったのか…。」

「ちなみにこの『ネオ・テンペストオング』とかこれ予算足りねえから作れないと思うんだけど…。なんだよサイコ・シャードって『ISのワンオフ・アビリティの力を利用して対象のISを自身の武装破壊、機能停止、パイロットの強制脱出を行わせる』…そんなモン作ったらまた逮捕されるわ!」

「もう慣れっここでしょ織秋くん。」

「手錠と牢屋になんか慣れたくないっつーの!!」

「お兄ちゃんとしても親族から逮捕者はちよつと…あ、でもこの『打鉄強化型・政宗』ってのは悪くなさそうだけどなあ…。」

「ああ、全身にブレードくっつけてサイドアームと両手に持って四刀流ってやつね。」

「剣いっばいくっつけたら強そうだろう?」

「使いこなせなかったらただ重量が増えるだk…ちよつと待てよ…。」

「そう言い出すと秋十が何やら考え込む…。」

「……………兄貴、ちよつと付き合っつて貰える?」

「えっ!?!お兄ちゃん、秋十の事は好きだけどお尻は大切にしたい派というk」

「うるせえ！」

うお!? 秋十が飛びかかってきた!? 小学校の頃から時々変な視線送ってたけどやっぱり兄萌えなのか!? お兄ちゃんこんぷれっくすなのか秋十お!?

「なんだ…白式の強化案を思いついたならそう言ってくれよ秋十。」

「まあまあ、とりあえずそこら辺に余ってたパーツで作った即席だけど……どうかな?…」

「おう！悪くないぜ…サブアームの操作もこの前のBT兵器モドキのドローンより少し楽し…いけるいける！」

アリーナのピットで俺は少しFairly Outっぽい改修が施された白式に乗り込む。

『白式改修型、阿修羅』…全身に予備の雪片を貼り付けて防御用の追加装甲と方が一に武装を破壊や取り上げられた時の二の矢として使う事を想定しているそうだ…これによって手に持つてる雪片を投擲して別の雪片を…なーんて使い方もできるようになったわけだ。

「ところでこの白騎士そっくりなヘルメットはなんなんだ？」

「それは……さあびすに御座います。」

「……このヘルメットは何の意味があるんだ？秋十。」

「さあびすに御座います。」

「……このヘルメットは安全なのか、大黒屋。」

「お代官様……さあびすに御座いまするゆえ……。」

あれ？ひよつとしてお兄ちゃん、秋十に騙されてる？

結果的に秋十は逮捕された。改修した白式を起動した途端に俺は白騎士風ヘルメットを真っ赤に光らせてたまたまその場にいたセシリアとついでに鈴をボコボコにしたそうだが、それに飽き足らず箒とISの稽古をしていたマドカに襲いかかり、ラウラによってIS操縦に關しては学年ナンバー2を誇る『I組の掃除屋』こと篠ノ之箒とブリュンヒルデお墨付きの実力を持つ『初音ミクちゃん大好き』でお馴染み折村マドカ（織斑姓じゃないのは偽名だぜ）のコンビネーションの前に白式は大破爆沈したそうだが。

2匹の蝶が舞うような戦いぶりにタッグチームならば学園3本の指に入るセシリア・鈴の2人組は「ISの修復が終わったら真っ先に挑戦する」とIS学園の新聞でコメントを残したとか…。

「お前っ…この!!お前え!!」

「やめてください織斑先生っ!?!そっちは生徒指導室じゃなくて屋上ですよ!?!」

「止めるな真耶!!私も付き合ってやるからいつペン閻魔大王のお世話になつてこい秋十お!!」

「く…首が…首が締まっ……。」

「何が首だお前!!一夏アレ終始『ガアアアアア!!』しか叫んでなかっただろうが!?!何したら血を分けた兄弟をあんなのにできるんだお前は!?!?」



「ごめつ…えつと…た、東さんが…グエ。」

「よし束だな!!真耶、こいつを独房に放り込んでおけ!!」

「ま、まあなんだ一夏…下着の件はあれを剣道場で落とした私も悪かった…その、気まずくてつい…距離をとってしまつて…。」

「いや、いいんだよ箒、俺もハンカチじゃなくてパンツだつて気づいた時に気が動転して隠したりしたから…痛たた…。」

「だ、大丈夫なの一夏?」

「鈴もお見舞いに来てくれたのか…大丈夫大丈夫、ただの全身筋肉痛だつて言つてたから。」

「そう…ならいいんだけど…ところで何で医務室の…一夏の隣のベッドに束さんが…?」

「いや、その姉さんは紅椿専用のバスーカ兼用荷電粒子砲を届けに来ただけだった筈なんだが…。」

「うう……冤罪だよお……冤罪だよお……あと束さんは東京湾アクア

ラインのトンネルじゃないよう……。」

「トミカをギツチギチに詰め込まれたらしいんだ…姉さん何したんだ？」

「してないよお!!…うご?!がつ…ぎ…う…!」

「た、東さん!?レスキューへり来るまで大人しくしてないと…まだヒノノニト○が出てこないんだろ?」

「うう……あつくんのアホタレ……グエ。」

「ね、姉さん!?しっかりしろ姉さん!!?!東お姉ちゃん!!!」

主人公に勝てないのは（中略）幸せなのが悪いオリ主

昔の話…

『それじゃあみんな学園祭に向けてウチのクラスで何の演し物がした  
いか意見をだしてくださいねー!』

『たべものやさん!』『いちかくのでーとー!』

『はーい!はいはい!!』

『うちの小学校のテレビ集めてマリオパーティ大会!』

『ハイハイハイ!!』

『わたしはいちかとでーとに1票!』『なにいつてるんだ箒!』

『つりぼりー!』『けいばー!』『ぱちすろー!』

『ハイハイハイ!!』

『競馬とパチスロは先生の両親の顔と彼ピツピに押し付けられた借金  
を思い出すからダメでーす♡』

『なにがあつたの先生!?!小学校の先生が抱える業じゃないよ?!』

『はいはいはいはいはいはい!!』

『……………あきとくん。小学生はダム建設しちやダメって、先生言っ  
たばかりでしょ?』

『なんですか!?!行政の許可は降りたって説明したじゃないですか  
!?!』

『行政の許可が降りても篠ノ之神社と周辺一帯をダムにしちやダメで

す！ゴチャゴチャ抜かすなら箒ちゃんのお姉さん呼んでまた篠ノ之流ダブルキン肉バスター掛けますよ!!』

『先生と束さんは小学生相手に何してんの!?!』

『あきとは私の家をダムに沈めるつもりだったのか!?!クリーンな水力発電で皆が幸せになるって言ったから署名したんだぞ!?!』

『……あと篠ノ之道場はプロレス団体じゃないからな?!』

『それじゃあウチの中学も文化祭の時期だからな、演し物を何にするか意見だせよー。』

『一夏くんの膝枕!』『一夏くんの耳舐めASMR即売会!』『一夏くんのパンチラリフレ!!』

『はいはい!!』

『なんで俺がそんなことしなきゃいけないんだよ!?!タコ焼きでいいだろ!』

『おい織斑!球体とかパチ玉を連想させるのは親に失望して出ていった娘を思い出すから禁止って言っただろ!』

『はーい！はーい！』

『初耳だよ?!先生の家庭に何があったんだ?!』

『わ、私は一夏だけメイド服で執事喫茶でいいと思います。』

『箒は何を口走ってんだよ?!』

『よし織斑、先生のミニスカビーチクギリギリメイド服を貸してやる。』

『なんで教師やってんの先生?!潔くクビになれよ!』

『はいはい！はいはいはいはいはいはいはい!!!』

『……織斑秋十、先生は何度も言ったけど中学生は地上げ屋とショツピングモール建設しちやダメなんだからな?』

『篠ノ之神社以外の住民から立ち退きの同意は得たって説明したじゃないですか!?!市長からGOサインも貰ってたのに……!』

『先生しってるんだぞ、住民説明会でお前が箒くん以外の篠ノ之一家全員から順番にバロスペシャルジエンドをキメられて泣きながら建設中止したのは先月の話だろ?』

『秋十お前……夏休み後半見かけないなと思ったら何してんだよ……。お兄ちゃんいっぱいびっくり……。』

『夜中に家族が全員どっか出かけたと思っただらそんな事があったのか!?!あと篠ノ之道場は剣道を教えてたんじゃなかったのか!?!』

「へえ：アタシが転校した後にそんな事があつたのね。」

「あの時の秋十は毎日が悪巧みのオリンピッククだったな…。まあ今もそうかもしれないが。」

「箒も結構メチャクチャなこと言つてたよな。」

「そんなことない、カン違いだ。カン違いじゃなかったら人違いだな。」

「ダーリンって小さい頃から積極的な人だつたんだ…：素敵♡」

「二シヤル（シヤルロット）…：今の回想の何処に惚れ直したんだお前。」

「…：で、肝心の本人は…？」「ほら、あそこよ一夏。」

「だーかーらー!!! I S学園の文化祭でフィリピンプブなんか許可できるわけないだろ!!元々は女子校だぞこの学校!!」

「風営法は書類上クリアできてるって何度説明したらわかるんだよ姉ちゃん!!ほら兄貴も何か言ってくれよ!!」

「一夏にフィリピンプブなんかやらせん!!お前は手のかかる可愛い弟だが一夏は普通に可愛い弟なんだよ!!あいつの経歴に変なモン加えて溜まるか!!!」

「可愛い弟って言うなら織斑秋十主催のフィリピンプブを許可してくれよ姉ちゃん!!束さんも『はいはいそうだね。』って好意的だったんだぜ!?!」

「それ絶対そら返事カマされてるだけだろうが!!それにフィリピンプブはお前の考えてるようなエッチなサービスはそれ程ない!!」

「何で知ってるんだよ千冬姉…。」

「ダーリン…これはハナシアイシナキヤイケナイネ…。」

その日の夜、疲れ果てて眠ってしまった山田くんをベッドに寝かせ私はバスローブを纏い肌を隠す。

「で、結局…文化祭の演し物はどうなったのちーちゃん？」

神出鬼没の天災兎…私の親友が当然のようにシャワールームから出てくる。コイツの辞書には不可能とプライバシーという言葉が欠如してるとしか思えんな。

「いや、今日は一緒に呑もうってちーちゃんがメッセ飛ばしてきたよね？ストゼロとポテチ用意して待ってたらドアがバーンって開いて東さんガン無視で絡み合いながら入ってきたのちーちゃん達だよね？」

うるせえ、ストゼロ一気飲みさせるぞ。

「嫌だなちーちゃんは呑み比べで東さんに勝ったことなんて一度もないでしょ？それともリベンジでもする？」

…そうだな、リベンジさせてもらおうとしよう。

「おっけー、じゃあ前と同じで先に十本飲み干した方が…？ちーちゃん、なんで東さんの足を引っ張って仰向けにするかな？なんでオムツ



替えるポーズさせようとするかな?」

穴を塞がれた束の心情とかけましてウチのクラスの演し物と解きます。

「そ、その心は?…あと束さんのウサちゃんストライプ脱がさないで欲しいかな?」

奥深く追求した男女無差別冥土喫茶だオラア!!

「全然上手くnひぎい!」

色々とお粗末。

主人公に勝てないけど幸せになってるオリ主

結局、文化祭の演し物にフィリピンパブを譲らない秋十の為にクラス代表の俺と勝負して勝った方の要望をクラスの演し物に決めるといふ事になった……秋十以外の全員で反対したのに民主主義ってなんだったんだよ、千冬姉。

「姉ちゃん……俺が兄貴に勝ったらフィリピンパブ、負けたら男装執事喫茶（兄貴だけ逆バニー）……それでいいんだよな？」

「いや全然良くねエからな!? 秋十はフィリピンパブで他のクラスメイト全員がメイド喫茶だっただろ!? 男装喫茶って……それ完全に秋十がシャルル・デュノア・執事ver. を見ただけだよな!? あとお兄ちゃん逆バニーしたら普通にモロちんしちゃうからな!? 俺の股間の雪片が一般公開されちゃうからな!」

「兄貴、世の中には需要と供給ってのがあって……。」

「モロちんの需要を国際教育機関の文化祭で満たそうとしてんじやねえよ!」

「全くだ、けしからん……そもそもお前が『フィリピンパブにしないなら東さんの蠟人形オンリーで秘宝館やってやる!』とか駄々こねるからIS勝負で勝った方の提案にすると譲歩してやったんだ。これ以上訳分からん事をするな。」

「ほら、千冬姉もこう言ってるだろ!!」

「それに一夏のモロちんが最も栄える衣装は逆バニーではなくウィッグ抜きの島風くんと相場が決まっている。」

千冬姉!?! どうとうおかしく……いや、元からおかしくなってたか、

山田先生と付き合い初めてから変になってたし。

「待ってください織斑先生!!」

箒!!よっしや天の助けだ…。

言ってやれ!同じ女として千冬姉が間違ってる事を教えてやってくれ箒!!

「一夏のモロちゃんは全裸に学ランしか有り得ません!!」

後に結婚して息子と娘に恵まれた俺は『パパが女を張り倒そうと飛び交ったのはアレが最初で最後だったよ。』と語る…。

まあひよいと避けた箒に組み伏せられて履いていたブリーフごとポンタン狩りされたけどな。

やっぱり女の子に手を挙げちやいけないな。

「あ、兄貴……大丈夫？……えつと……ほ、ほら！誰も見てなかったからノーダメだよノーダメ！だからせめてIS展開して尻を隠そう？  
な？な？」

嘘つけ、さつき後ろから「おりむーのお尻すっごい綺麗!?お姉ちゃんのお尻より柔らかそう……。」とか誰かがシャッター音と共に言っていたのが聞こえたぞ。

「……しかし綺麗なプリケツだな。」(●REC)

「原因は俺かもしれないけど姉ちゃん黙ってて頼むから!!あとスマホしまえ!!」

いいんだ秋十……お兄ちゃんが悪かったんだ。  
カツとなって箒に篠ノ之流シャイニングウイザードしようとした俺が悪かったんだよ……。

いや、仮にも女の子にシャイニングウイザードは本当に悪い事だな。

「あ、兄貴？……じゃ、じゃあ俺も尻を出すかr」

「秋十の尻は汚いから見たくない。」

「兄弟揃って仮にも末っ子になんて事言うんだよ……ってか俺の尻は汚くないからな。」

「いや、一緒に大浴場入る時にいつとも思うけど……お兄ちゃん的是はお前の尻は毛の生え方はおかしいと思うぞ?」

「お姉ちゃんとしてこの際言つてやるが……シャルロットから『ダーリンのお尻の毛とシミが奇跡的にチェ・ゲバラになってて怖い』って相談受けたぞ。」

「俺の尻ってどうなってるの!?!」

「……………見事に兄弟揃つてイジけちゃったな。」

「チェ・ゲバラなんていねえよ……俺の尻はちよつと防寒性が高いだけだよ……。」

「2, 3人くらい写メってた……俺の赤ちゃんヒップがクラスの皆に共有されちまう……。」

もうどうでもいい…俺は明日から『お尻斑一夏』とか『ヒツプなY  
OU』とか微妙に捻ったかアホかよく分からんアダ名で呼ばれるんだ  
……。

「……………よし、こうしよう。試合して勝った方の要望を『東に』叶え  
させてやる。天災の力なら写真も人の記憶も改ざんくらい…ちよ  
ちよいのジョー」

「兄に道を譲れ秋十おおおおおおお!!!」  
「お前が下だッ！織斑一夏アアアアア!!!」

「ISの試合だ!!殴り合うな！脱がし合うな!!おい！バカ共！互いに  
尻を叩き合うのをやめろ!!!」

絶対に負けられない戦いだ…秋十を倒して、織斑一夏プリケツ説  
なんて事実をIS学園生徒の記憶から消してもらおう…それしか俺  
に生きていく道は無い!!

「頼むぜ白式。」

(織斑一夏…私にそんな理由で頼られてもこまります…そんな理由  
で第四世代に形態移行できそうな位のシンクロ率を叩き出されても  
困ります…。)

何だか白式が俺の背中を押してるみたいだ…きつと俺に「1発ぶち

かまして勝とうぜ」って言ってるのかもしれないな。

「おっと兄貴い!!今回ばかりは俺の勝ちで決まりだな!!」

するとアリーナのピットから秋十の声と共に何かが勢いよく飛び出してきた、両腕と腰のやや下部分に大きな円盤を合計四枚くっつけた様な丸みを帯びた細身で大型のIS……俺の記憶が正しければあれは……………。

「これこそ究極のIS!!『テンペスタ・T（トライク）』だ!!円盤状のPICローターを脚部に一機ずつ、そして腕にも一機ずつ。両腕のはPICローターの出力を上げて荷電粒子を撒き散らしながら円形にAICモドキを発動する事によって実弾兵装を着弾前に停止、エネルギー兵器はAICの停止空間の空洞に閉じ込めた荷電粒子の渦で霧散させる事が可能!!しかも近接武装としても振り回せるからお得だ!!」

ああ、要はビームローターってやつか…ガンダムのだ。

しかし見た目はやっぱりウィルバーナインをISっぽくしたやつみたいだな……分からない人はハーメルン閉じてググれば良いと思うぜ。

……………しかし、似ているってことは…。

「そしてこのテンペスタは何と……完全変形してバイク形態になれる!!PICローターをタイヤ代わりにする事で三輪バイクになるわけだ!オマケに荷電粒子を背後へ放射する事で熱核エンジンの原理で超加速!!その加速力と最高速度は兄貴の白式の約五倍を実現!!原理?エンジンは先輩に造らせたから知らん!!」

「おお、本当に変形した……というか人型形態で一般的なISの約2機分の全長は変形してバイクっぽく見える為にデカくなったのか……?」

1秒掛からずに三輪バイクに変形したテンペスタTはそれでもラリーカー位の大きさを保ってやがる……これ変形しなきゃピットに出入りできねえんじゃねえかな……………。

「そしてバイク形態時は本物のバイクと同様の操作で操れる!!人型形態にならなければバイクに乗れるだけでコイツのパイロットになれるって寸法よ!!パイロットの胸部装甲のコア・バイパスからシールドエネルギーを充填してる仕組みでバイク自体はISコアが無くても荷電粒子とI P I Cが使えないだけでガソリン発電式のパワードスーツとしても3時間は使用可能!!」

ISなのにガソリン駆動なのか…………たまげたなあ…。

「撒き散らした荷電粒子とA I Cを発動すれば全方向からの攻撃を防ぐ事ができるし、バイクらしく体当たりしたってO K、外付けのビームキャノン砲とミサイルランチャーでこっちは一方的に攻撃できちゃうんだなこれが!!参ったか兄貴!!」

「アインラッドだな!!アインラッドに影響を受けたんだな秋十!!」



結果的に秋十は敗北した。テンペスタ・TはISコアが無い非常時にはガソリンさえ有ればバイク型パワードスーツとして使えるという特徴がある。

『バイクに乗れば誰でもパイロットになれる』

ということとは……。

『バイクに乗れば誰でも盗める』

とも取れるわけだ。

盗まれない為の機能が着いてるはずのISコアはパイロットの方にくっ付いてる訳で、バイク自体はコア・バイパスのコードを通してISコアに接続しているだけ。

真つ先にパイロットとバイクを繋ぐコア・バイパスを引きちぎった俺は秋十を蹴り飛ばしてバイクを奪い取り、制限時間ギリギリまで取り返そうと走る秋十に当て逃げアタックしながらアリーナを走り回って勝負が終わったわけだ。

4, 5回程、跳ね飛ばされてボロボロになった秋十は「兄貴なんか……ROUND〇のポケバイ乗れるコーナーに誘わなきや良かった……。」と涙目で呟いていた。

「ぐすん、兄貴め、モロちゃんが嫌だからって容赦なくボコリやがって……やーい!!兄貴のクラスの副担任黒乳首!!」

「なんだと!!やーい!お前の姉ちゃんの恋人デカ乳輪!!」

「ほお……いつ見たんだお前ら。」

「あ、千冬姉（姉ちゃん）の事、忘れてた……。」「」

だって秋十に「巨乳大和撫子が夜の教室でトッププレスになつてる。」って言われたら俺だって勘違いしてちゃうよ、千冬姉……。

「シャチョサーン!可愛いメイドいっぱいいるヨー!」

「イラシヤマセーゴシユジンサマー!」

「イツパイオモテナシするネー!」

「お、織斑先生…先輩?落ち着いてください、生徒の皆さんも大真面目に張り切ってるだけですから……。」

「あ、ああ……わかつてるとも真耶……。」

あのグラサン野郎…！振じ込みやがった…フィリピン要素…！！  
一応国際機関だぞIS学園……これ私が怒られるのか？

「ふふふ…潜入成功…さすがはIS学園、ガバガバ警備で助かったわ…。」

「篠ノ之東、そして織斑秋十…我ら亡国機業を壊滅至らしめた主犯と元凶め。私達フロントム・タスク残党部隊が目にも見せてやるわ！！」

「早速第1村人が壁の向こうにいるわね！！もし篠ノ之東だったらグレネードランチャーを背後からぶちかましてやるわ！」

私は元オータム、今は巻紙礼子としてIS委員会のお膝元で安月給を貰う立場で新たな生活をスタートしている……IS学園非常勤体育教師、用務員、部活の顧問、IS学園理事長専属の焼きそばパン&コミック百合姫を自腹で配達係と業務は多岐に極まる。今日は文化祭の警備を任されたんだが……。

「だーかーらー!!東さんは関係者なの!!IS学園の文化祭にこっそり忍び込んでもセーフなの!」

まさか天災が全身黒タイツのルパンスタイルで忍び込んで来るとはなあ…。

「って言われてもよお……招待客は正門の受付から入んなきゃダメって話だったからなあ……。」

「いや……まあ……東さん、招待客では無いけど……。」

「じゃあ最初からダメじゃねーか……。つーか、ここはIS格納庫に続く通路だから文化祭とは関係ねえし。」

「いや、ほらそれはISコアに自立稼動プログラムを仕込んで『天災・篠ノ之束!!』的なサプライズをs」

それってひよっとしなくてもゴーレム事件の再来でh

「篠ノ之東だど!? 我らフロントム・タスクを壊滅させられた恨みを喰  
らえ!!!」

その後、悶絶する篠ノ之博士を横目に元同僚共をボコボコにしてい  
ると

臀部の中心にグレネードランチャーを直撃させられた篠ノ之博士  
が

『ちよつと残党を一人残らず網走刑務所に捨ててくる。』

と言って何処かへ消えちまった……近距離過ぎてグレネードが  
爆発しなくて命拾いしたなあ……そう思うだろ? スコール。

主人公に勝てなくても修学旅行はするオリ主

「ぼくは進むよーお客を乗せてー♪」

「客を運ぶよー♪それが業務さー♪」

「でも退職できねえー♪でも退職できねえー♪」

「敷かれたレールをずっと進むだけー♪」

「織斑、篠ノ之……お前らは静岡県民じゃないだろ。」

なんでそんなローテンションで歌ってるんだコイツら…。

修学旅行の新幹線だぞ？ちったあ楽しそうにすればいいだろうに。

「おりむー、しののん、元気ないね？大丈夫？しののんのおっぱい揉む？」

ローテンションな一夏が珍しいのか一夏達の後ろの席でクラスメイトとトランプしていた布仏が声をかけた…。

しまった……ここで心配そうに声をかければお姉ちゃんの威厳が稼げたかも……。

「いや……実は昨日、箒と『将来どんな人生送りたいか…』みたいな話題で盛り上がったんだけど。」

「一夏は『おっさんって呼ばれる年齢くらいには定食屋を開いてのんびり生活したい』と、私は『おばさんって言われる歳になったら実家の剣道場と神社を継いで夫と二人で切り盛りする生活したい』……と、楽しく話してたんだが……。」

「秋十が……。」

『いや、世界初のIS操縦者にIS適正Sの篠ノ之博士の妹とか将来選ばせて貰えるわけないだろ?』

「……つてすれ違いざまに言われて……。」

「ああ、言われてみれば……千冬姉とか東さん見てたら『のんびりした生活』とか送れるか不安になってきて……。」

「ほえー……あつきーも酷いこと言うね、私はそんなことないと思うよー!」

「ありがとう布仏……でも私の胸から手を離してくれ。」

「ありがとう、のほほんさん……俺も揉みたいから片方貸して……。」

秋十のあんにやる……しかし箒はひよつとしてノーブラなのか？  
服の上から揉まれてるにしては布仏の指がなめらかに動いてやがる……ブラジャーの上からではああはならんな……。

「山田くん、バカの方の弟がどこいったか知らないか？」

「え？デユノアさんと二人でトイレの方に……。」

アキトラマンが説教されて

臀部ボコボコにパンチ食らって

新幹線のランプが点滅すると

あと3分で京都につき降りる

その時の彼氏の苦しむ姿にドキドキするって

ヒーロー凌辱だぜ！

グラサン割れた秋十わ前見えねえし

息わ苦しいし

アキトラマン最後の3分間わ30分以上にわたり

絶対マゾのはずのないダーリンがおつきする

そんなのあり得ない！

力尽きたアキトラマンがボコされる

マヂ苦しい

酸欠で死にそう

力が入らなくなった秋十の尻が大きく開かれて

秋十のケツにキツクが容赦なく突き刺さる

脳天まで突き上げるキツクに苦しみ喘ぐ息もおしやぶりで塞がれ

て

最初わキュウキュウ締め付けていた私も

秋十の振動で意識が薄れてくると

最後わあの痙攣がやってくるダーリンだって気絶ときわ出るんだ

よ

「あー!!イク!!」



アキトの穴にビクビクと弾丸パンチが撃ち込まれると同時に  
アキトラマンも意識がぶっ飛び謝罪  
そのあとピクピクと痙攣したまま動かなくなった。

「お前ら……修学旅行の新幹線で赤ちゃんプレイするんじゃない。見  
ろ、トイレ占拠されてオルコットが絶望の表情で固まってるだろう。」  
「……僕も、やめとけば良かったって思います。ごめんねセシリア  
……。」

織斑先生に頭を下げながら旅行のテンションで彼氏を誘惑するも  
んじゃないなあ……って思うんだろうなあ、普通は。

……とりあえず秋十……ダーリンにパンツ履かせとこうかな……お  
しやぶりはそのままでもいいや。

ダーリンはパンイチでも構わないけどデュノア社の令嬢が新幹線  
でスツポンポンはスキヤンダルだからね、僕の着替えの方優先しな  
きゃ。

「ごめんねあにき、しのののさん…ゆめのないことって…。」

「いや、気にしてないよ秋十。お兄ちゃん、全裸でおしやぶり付けて新幹線に置き去りにされかける弟を見てたら爆笑して一周回って冷静になれたし。」

「そうだな、一夏と二人で鼻水噴き出して笑ってたら寧ろ人生なんでもイける気がしてきたからな。」

しかし前を歩いているシャルロット…スカートの端から紐パンぶら下がってるけど言ったほうがいいのだろうか…？

とうか秋十はいつになったらおしやぶり外すのだろうか…？

折角、一夏と二人きりで京都観光を楽しめるかもしれないというのに…気になって気になって仕方がない…。

「ん？二人きり…？なあ一夏、鈴を見なかったか？」

「え？…あれ？…そういうえば2組はいるのに鈴がない…。とうか『鈴と2組の友達とワード人狼してくる』って2組の車両行ったラウラも見えないんだけど…。」

「そういうえば兄貴、オルコットさんは？」

「「え？」」

『まもなく、大阪く大阪く到着いたします。』

「ね、寝過ぎした……ラウラ！アンタさつき『起こしてやるから寝てて構わんど』とか言ってたじゃない!!」

「………すまない、普通に寝過ぎしてしまった………というか隅っこの座席とはいえ誰も気づかず置いてかれるって凄いな。」

「……つてことがあつて大変だったよ。あむ……あふ……はふはふ……。」

「へえ……結局その中国娘とドイツ人は大阪観光してきたんだ……はふはふ……。」

「この冷凍たこ焼きレンジでチンしても普通に美味しいですね……はふはふ……。」

今、東さまと秋十のアホタレ小僧と三人仲良く……仲良く。

タコパで美味しいたこ焼きを食べている盲目美少女は何処の誰でしょう？

そう、私です。クロエ・クロニクルです……シーズン遅れで観るアニメは一気見ができてお得です。

「それで……東さん……お願いがあるんだけど……。」

「イギリス女の搜索願でも出したいの？」

「そうなんだよ。オルコットさんだけまだ見つからなくて……可愛そうに……新幹線で酔って吐きそうだったらしいし……。」

そのリバーズしそうでヤバかった人を放置してトイレ占拠してたのは何処の日本の瘦せたホーロー・インムソンでしょう。

そう……そのグラサン野郎です。

「束さんも……最近はずっと一人で大気圏突破と突入できるISの開発研究が軌道に乗ってきて……ちよつとしたヒラメキが束さんの頭の中にどっかーん！って湧いてきたから、たこ焼き食べたら忘れちゃう前に論文にしてNASAに送らないといけないから。」

「……束さん、IS委員会の権威で宇宙開発には積極的なんだよね？」

「そうだけど？」

「俺……ISの宇宙開発利用の研究とか、ISが宇宙で実験したとか……全然ニュースで聞かないんだけど……？」

「……………」

束さまがたこ焼きを食べる手を止めてゆつくり目を逸らしました……。

三点リーダーの多い作品です。

そうです、束さまが雲隠れしながらとはいえ、IS委員会のお偉いさんの立場にいながら全然宇宙開発に乗り出せてない理由は……。

「束さん？ねえ……どしたの？」

「ごめん、あつくん…やっぱり…今すぐ論文書かないと！また忘れちゃうから!!」

「ちよ、ちよつと!?お願いだよ束さん！兄貴も姉ちゃんもハニーも『セシリア連れ戻すまで顔見せるな（チヨメチヨメお預け）』  
って言われたんだよ!!お願いだから!!」

「ちよつと抱きつかないで!?今束さん立ってるから!?たこ焼き機の前で不安定な姿勢にさせないで!!?」

「お願いだから!!お願いだか…うわあ!!?」

グラサンあほ野郎に縋り付かれて…束さまが後ろに倒れちゃう!!

「束さま!!危ない!!?」

「ごめんなさい…つ、ごめんなさい…ごめんなさい…ごめんなさい…つー!」

「泣かないで、クーちゃん…全治一週間入院の軽傷だから。」

でも…シヤンk…束さま…。

「穴が!!」

「安いもんだよ…激痛でアイディア忘れた事も…穴も…。」

「で…でも…っ!!」

「クーちゃんが咄嗟にタコ焼きをクルって回す針を突き出してくれたから…火傷せずに済んだって事だし。」

「束さま…っでも、お医者さまの話だと…火傷の場合は全治3日の通院だけで済んだとか…。」

あつ泣き出しちゃった…びえん。

主人公そつちのけでサボったけども幸せにはなりた  
いオリ主

「やっべ……学園のシステム落ちたんじゃねえかな」

「いやあ、やっちゃったね☆東さんにも筆の誤りというか……ほら……な  
！」

「うん、仕方ないですも秋十兄さん……不可抗力というか……ほら……  
な！」

「……………な！」

「マドカはともかくクロエ……クロニクル……さんはそのもうちよつと……  
実行犯として何かコメント無いかな」

「あつくんクーちゃんに嫌われ過ぎてとうとう敬語に……」

「篠ノ之博士に散々な仕打ち受けさせた原因の一人ですからね、あの  
人」

『より臨場感のあるVRchOtを体験したい』という秋十兄さんによつて篠ノ之博士とクーちゃんと共に学園の地下サーバールームへ  
連行された私、居村マドカは今すつごく困っていた……

篠ノ之博士の養女であるクロエ・クロニクルことクーちゃんのIS  
である『黒鍵』をIS学園のサーバーに繋いで演算能力を倍付けしパ  
ワーアップさせることで滅茶苦茶リアルで臨場感のあるメタバース  
体験をすることに成功したもののサーバールームに仕込まれていた  
篠ノ之博士お手製のセキュリティシステムに引っかかってしまい学  
園中に警報が響いてしまったのだ。

いや篠ノ之博士、何で自分で作ったセキュリティシステムに自分自  
身が引っかかってるんですか？

「ほら、天災の作ったセキュリティシステムだから………な!!」

そうですか……警報を止めるためにとっさにクーちゃんが黒鍵で  
ジャミング攻撃をしたところ、学園中のあらゆる電子機器が止まって  
しまい今に至る……。



「至る……じゃありませんよ。クーちゃん、早く復旧させて役目ですよ」

「いえ、マドカ様……復旧させたいのは山々なのですが」

『おいコラ開けろオ!!居るのはわかってるんだぞ!!どうせ束だろ!!束えええ!!今度はミニカーじゃなくてラジコンのブルドーザー詰め込んでやろうかア!?ああ!?お前何の恨みがあつて停電騒ぎなんか起こしたんだ!?お陰で先週から作ってたやm……じゃなくて、IS委員会への報告資料のデータが吹きとんだわコノヤロウ!!!』

うつわ……サーバールームを守る隔壁からお寺の鐘を乱雑に突いたような打撃音がめっちゃ聞こえる。姉さん早いなあ、さすがブリュンヒルデ。しかし私は兄さんに巻き込まれた被害者として許してもらえないかもしれないが篠ノ之博士が凄い末路を遂げそうな事態に……いやまああの人も『束さんも前々からVR O h a t 興味あつたんだよね』とかノリノリだったからまあ当然の結果ってやつかもしれないけど……

「……復旧させますか?」

「ちーちゃんもう来ちゃったの……?」

「やっべ、バレたら転がされる……束さんが」

「秋十兄さんと私は弟と妹の特権としてなあなあで許してもらえないかもしれないがお仕置きは免れませんね……篠ノ之博士が」

「なんで束さんだけお仕置きされるんだよ!?マドちゃんはともかく発

「案者はあつくんだよね!？」

「いや、俺は『やりたい』って言ったけど『やれ』とは言っていないし……な!」

「な……じゃねえよ!! いや消えたデータを元に戻すぐらいチヨチヨイのチヨイだけど今怒り狂ってるちーちゃんの前に出たらお詫びするまえにお仕置きされちゃう……よし、クーちゃん」

「はい」

「復旧させるのはちーちゃんの怒りが収まってからにしようか」

「え?俺とマドカはどうなるの?明日月曜日なんだけど?登校日なんですけど」

「明日は休め」

「寧ろ休み過ぎたぐらいなんだけどな……」

「開かん……!!誰だこんな頑丈な電子制御の隔壁なんぞ取り付けたやつは……!!そうだ東だ……!!アイツ絶対許さんぞ……!!私の山田真耶隠し撮りベストセレクション(動画ファイル)を理不尽にも吹き飛ばしたこの恨み……くそっ……下手にぶち壊したら滅給モノだしそもそも私怨で施設破壊なんて良心が咎めるから開ける方法が手元に無い」

「……ん?待てよ、あいつがうっかりミスか何かでサーバーをぶっ壊したとばかり思ってたここに来たがさつき非常特別区画のシステムは普通に動いていたな……パソコンのデータを確認する時にいの一

飛び込んであちこち弄り回したからそれは確か…サーバーが壊れてたらあそこも駄目になるはず……」

「そうか、クロエか！何を企んでたのかは知らんがあいつのISを使つてサーバーを落とさせているんだな…だったらこつちにも考えがあるぞ…!!」

「あれ？姉ちゃん行つちまったみたいだぜ？」

「ちーちゃん諦めたのかな？」

「束様、絶対ないと思います」

「だよねえ……RCかぁ…RC……せめてミニ四駆…ミニ四駆…いや束さんのターニングポイントにミニ四駆も嫌だけど……ううん……」

「(……今のうちに隔壁開けて逃げれば良いのでは？篠ノ之博士は兎も角、秋十兄さんは怒られるべきだから逃さないためにも言わないけれども)」

……

……

…

「というわけでサーバルームを奪還すべくお前達イツメンに協力してもらいたい」

「いや千冬姉…普通にISでサーバルームの隔壁をこじ開ければいいんじゃないか？」

「一夏は知らないのか、この非常特別区画はISテロ対策に少し狭く

作られているからISが通れないようにできているんだ。こういう非常事態に占拠されたら一番困る場所だからな、もちろん中に入つてからISを展開しても狭くて動けないようになっていた部分展開はできるがパワー不足でどのみち開けられない」

「箒……詳しいな」

「まあIS学園の建設は姉さんも設計に関わっているからな、地上部分は非常事態に教員部隊が動き回れるようにISでも出入りできるようになっているがそれはテロリストから生徒たちを守るために教員がISを展開して文字通り盾になる為だ、生徒がまず来ないように場所は逆にISが使えないようにして部屋の中に籠城してテロリストが入ってこれないようにしているらしい。……と姉さんがよくウンチクを話していた、暇なんだろうな」

多分だけど束さんは箒に構ってほしくてそういう知識披露から姉妹の語り合いに発展させたいとかそういう感じじゃないかな…それはそうと、サーバールームの奪還に専用機持ち…もといいつもの一組のメンバー+鈴と簪さんが呼び出されたけど千冬姉は何をさせるつもりなんだ？

「細かい説明はハシヨるがISコアを使って電腦世界に入って束が閉じこもってるサーバールームの隔壁を開けてもらう、隔壁を開けると同時に私と教員部隊がサーバールームへ突入して束をボコボコにする。……恐らく束の養女であるクロエが電腦世界で邪魔をしてくるだろうがそうだな…デユノア以外は織斑兄を見たらとりあえずボコボコにしろ」

「え!?!俺ボコボコにされるの!?!」

何それ!?!俺リンチされるの!?!ナンデ!?!リンチナンデ!?!あとクロエって束がいつも連れて歩いている「自分はラウラに似てる」みたいなこと自称してるけどそんな似てないあのクロエだよな…?え?それと俺がどういう…

「逆にデユノアは織斑弟を見つけたらボコボコにしておけ」

「あの…織斑先生?なんで一夏とダーリンをボコボコにするのか聞いてもいいですか?」

「もつともな質問、ナイスシャル!!」

「まあ…ほら………な?」

「な?…じゃねえよ千冬姉!!説明をちゃんとしようぜ!!」

「あー…一夏、説明するからちよつとあつち行つてろ」

「なんで!?俺だけハブられたらクロエが何かしてきても俺だけ何も対策ナシでボコボコにされるじゃねえか千冬姉!?いやクロエが何もしなくてもこのままだと皆に俺がボコボコにされるじゃねえか!」

「いや…ほら…な?」

「な?じゃねえよ!」

（ん……僕がダーリンをボコボコにする理由……そうか!相手は電腦世界で偽物ダーリンを出して邪魔してくるかもしれない…つてコト!?)

（シャルロット以外のメンバーが一夏をボコる必要がある……?……ん?……ああそういうことか…）

（なるほど、相手は私達の好意を利用して騙し討ちするつもりってわけね……この中国IS界の麒麟児こと鈴サマが随分舐められたものね……）

（相手は変装のプロで一夏に化ける可能性があるわけか…教官や秋十、他のものに化ける可能性もある…後で全員で合言葉を決めておく必要があるかもしれないな…）

（私が呼ばれて生徒会長のお姉ちゃんが呼ばれない理由はなんだろう…?まあ私は皆のオペレーター役だろうから一夏をボコるなんてことはしなくて大丈夫かな）

「二二あ、大丈夫です察しました」

「察しましたって何を!俺に理由を教えてくださいよ!」

「ほら一夏………な?」

「まあ一夏…ほら…そういう…な?」

「箒と鈴すら俺をハブろうと…俺はお前ら二人の幼なじみなのに…」

!!頼りになるのは親友のラウラか優しい簪さんしか…

「一夏、教官も言っている…：…な？（皆とノリを合わせてバイブスを下げないようにする…：…だったよな、クラリツサ）」

「…えーと…：…（あれ？これ説明したら私が一夏の事好きだってバラスことになるんじゃないや…：…）」

「ラウラまで…：頼りになるのは簪さんだけだ…：頼む!!」

「…：…：…な？（ぶ）めん一夏）」

「簪さん…!?!」

俺には味方はいないのか…!!お兄ちゃん悲しいよ秋十…：お前がいたらきつと俺の味方して皆に話すように言ってくれたりとかしてくれるんだろ…：うな…

「それと織斑弟…：もとい秋十も束と一緒にサーバールームに立て籠もっている可能性が高い」

俺に味方なんかいなかった…!!

…

…

『電脳世界に侵入を確認、ワールド・ページ起動します』

…

…

「…：…：…え？これ次回に続く感じなの？」

「多分…：…電脳世界なら怪我しないし一夏兄さんと対決してみたいし私もクロエと一緒に妨害に回りますね」

「俺も電腦世界ダイブとかしてみたいんだけど…」

「篠ノ之博士が今ある材料だけじゃ電腦世界ダイブする装置は二人分しか作れないそうで」

「ごめんねあつくん、東さんと一緒にVRゲームしながらちーちゃんに気づかれずに逃げる方法でも考えよう？」

「えー…もう隔壁の前に姉ちゃんがSWATみたいな装備付けた教員部隊を率いて取り囲んでるのに無理だよ…えーつと…コントローラどこやったかな…？」

「ゲームのセッティングしとくから探しといてね、よつこら…しよつ  
t——」

「椅子の上に置いておいた気がするけどこっちの椅子には置いてないな……」

「あ…が……っ！…コントローラあつたよ……」

「え…？あ……その……ごめん。」